昭和九年六月廿五日印刷納本　隔月一回一日發行
昭和九年七月一日發行

精神分析

第二卷第七號

昭和九年七・八月

戀愛心理研究號

――（裏面に續く）――

東京精神分析學研究所出版部

本誌の隔月刊行制について

讀者諸賢に告ぐ

六月號を突然無斷で休刊しましたことを、まづ讀者諸氏にお詫いたします。斯學の弘通益々大となるに從ひ編輯關係者も近頃愈々多忙を極め、如何とも手の下しようがなかつたゝめであります。小誌は創刊以來一ケ年餘、月刊制をとつて來ましたが、學術雜誌としてこれだけの大雜誌を月刊することは、いさゝか無理でありまして、歐米諸國の斯學雜誌も隔月制又は季刊制をとつてをりますに鑑み、本誌も本號以降隔月制をとることにいたしましたに就き、何卒倍舊御聲援の程切にお願ひ申上げます。

雜誌を隔月制にいたします代りに、その餘力に依つて纏つた單行本又は叢書を刊行いたし、熱心なる讀者諸氏の渴を醫すべく準備いたしておきます故、これまた精々御後援の程お願ひ申上げます。

なほ、特別誌友諸氏には季刊にするやう豫め御拶挨申上げましたが、季刊制ではあまりに時日の隔たりが大きすぎると申出で下さる方が多く御座いましたので、改めて隔月制といたしました。これまた何卒御諒承被下度お願ひいたします。（雜誌委員一同）

本研究所關係者名簿（いろは順）

●印……客員
＊印……特別誌友
△印……雜誌委員

△東京濟生會　岩倉具榮
＊東京澁谷區　岩倉良子
＊奈良縣　茨木基忠
＊大連　伊藤梅吉
△東京本郷區　伊東豐夫
＊東京淀橋區　入江敏夫
＊第一神戸中學校　池田多助
新潟縣　磯野信司
東京本郷區　今福由江
△早稲田大學　長谷川誠也
東京瀧野川　長谷川浩三
●東北帝大醫博　早坂長一郎
＊愛知縣　本田了惠
●名古屋醫大醫學士　堀要
＊北海道函館　堀濱吉雄
東京　朴永鎭

東京日本橋區　時平佐喜雄
滿州新京　千葉廣洋
＊新嘉坡　林獨步
長野、醫學士　和田節雄
●警視廳　金子準二
●東洋大學　高島平三郎
東京下谷區　高橋鐵
＊西の宮市　田中雅子
△東京杉並區　田内長太郎
＊右同　田内貞喜
＊宮崎縣　竹之下學山
東京澁谷區　武俣勇往
＊東京淺草區　高橋退藏
阿佐谷幼稚園　高崎能樹
＊東京本郷區　高村光太郎
本研究所内　高水力太郎

慈惠醫大文學士　武田忠哉
横濱鶴見　立川玄一郎
＊京都中京區　津田九郎
●東京高校、文博　塚原政次
＊北海道札幌　浪越春夫
＊京都府　中野正一
東京本郷區　中山太郎
＊金澤市　南雲義男
＊東京杉並區　長崎文治
東京蒲田區　生形要
●早稲田大學　内田勇三郎
＊山形縣　梅木米吉
●東京、能率研究所　上野陽一
＊北海道小樽　井上千秋
東京麻布區　小野田幸雄
東京本郷區　小柳津邦太

成城學園前　奥村博史
*京都府舞鶴　奥本島田
*横濱神奈川區　太田繁子
△本研究所內　大槻憲二
右同　大槻岐美
*奉天　大橋正二
*神戸市林田區　大岡正己
東京杉並區　大久保眞太郎
*宇治山田市　大山浩
*東京荏原區　尾形孝治郎
◉廣島文理大文博　久保良英
精神分析學會　矢部八重吉
◉東北帝大醫學士　山村道雄
*神戸精神衞生相談所　山田一郎
東京赤坂區　山本鎭雄
*京都左京區　米原浩
◉東北帝大、醫博　丸井清泰
△東京麹町區　松居桃多郎

◉東京四谷區　慶大神經科教室
*東京本郷區　福間光
*東京本郷區　福澤一郎
*東京麹町區　藤井和子
*東京中野區　藤木義輔
臺灣阿里山測候所　近藤石象
江戸橋病院、醫博　小山良修
*長野縣　小林忠藏
東京麻布區　小林五郎
東京板橋區　小松德
東京麻布區　小杉長平
精神分析學診療所、醫博　古澤平作
東京芝區　江戸川亂歩
◉東京、醫博　雨宮保衞
*奈良縣　佐藤政宕
*東京府　佐々木龍治
◉東北帝大醫學士　木村廉吉
*京城府　三井慶次郎

◉成女學校　宮田修
*長野縣　三輪輔
*東京、醫學士　芝川又太郎
*栃木縣　島崎勝次郎
*沖繩　島袋常雄
*東京　清水桃子
トモヱ幼稚園　霜田靜志
*熊本市　澁田見勝亮
大阪　廣井重一
*横濱中區　平野良太郎
東京(寄稿家)　平塚義角
◉東京、醫博　諸岡存
*朝鮮平安北道　森永醇
*東京府　森下雨村
◉東京、醫博　鈴木雄平
*ハワイ　菅村氏
*東京淀橋區　須田勇
◉名古屋醫大醫博　杉田直樹

戀愛態度に於ける男女の別

大槻憲二

右の表題の下に論ぜられねばならない事柄は非常に廣汎に亙るが、只今の場合は問題を主としてナルチスムス（自已戀愛）の關係する範圍内に留めておかう。そのために筆者は主としてフロイドの『ナルチスムス概論』を再吟味する如き方法を採つた。このやうな方法もまた古典研究としての新たな意味があるので、今後も時々試みたいと思ふ。戀愛の最も原始的にして最も幼兒的な方途は、自已戀愛（ナルチスムス）である。換言すればリビドーを自已に纒綿（備供）することである。自已戀愛研究の大道は知力喪失症の分析であるが、なほその他にフロイドは、身體的病氣の研究、ピポコンドリーの研究、兩性間の戀愛生活の研究などを擧げてゐる。で、以上四つの方法に就いて、多少の說明を加へて見よう。

一、戀愛と知力喪失

一體、知力喪失症（Paraphrenie）とはフロイドの造語であつて、これはクレーペリンの造語である早發性痴呆症（Dementia Praecox）や、ブロイラーの造語である精神分裂症（Schizophrenie）などゝ同じ對象を意味する語であつて、つまりこの同じ病氣に對する三者の見解の相違がこのやうに病名の相違となつて結果してゐるわけである。クレーペリンはこの病氣は早期に發し結局直らぬものだと云ふ見解をこの造語に依つて意味してゐるし、ブロイラーはこの病氣が分裂に因るものであることを意味してゐるし、フロイドはこの病氣がリビドーの外界（現實）からの引揚げ

に依り知力（自我の働）の退行してゐる狀態であることを意味してゐる。

知力喪失症者の根本的特徴としては二つ（誇大妄想的であることゝ、外界への興味を失つてゐること）が擧げられてゐる。外界に興味がないから精神分析の感化をも受付けないわけである。併し知力喪失症者が外界に興味を持たなくなつてゐる、その持たな加減には、なほ細かい特徴が見られる。ヒステリー患者や强迫神經症患者も、彼等の病氣の程度に應じて現實への興味を喪失してゐるが、併し分析して見ると、彼等は他人や事物に對する性的な結合關係を少しも放棄してゐない。彼等はなほそのやうな關係を空想中に確保してゐる。つまり彼等は一方に於いては、現實的對象の代りに空想上の對象に興味を寄せてゐる（か、或は兩者を混同してゐる）と共に、他方に於いては彼等の目的を達するための言語行動をその對象にさし向けることを斷念してゐるのみであるが、知力喪失症者はさうでない。彼等はそのリビドーを外界の人間や事物から本當に引揚げて了つてをり、空想中に於ける他のものを以てこれの代償にしてゐないやうである。そこで對象から引揚げられて行場のなくなつたリビドーはどうなるかと云ふに、それは自己に還つて來る。さうして自己戀愛の傾向を二重にすることになる。卽ち、本來的に自己に存してゐた幼兒的な自己戀愛と出戻りの自己戀慕が成立する。かくて知力喪失症が誇大妄想的になるのは、必然である。

二、身體的の病氣

ナルチスムス研究の第二の方途は、身體的の病氣である。身體的の苦痛や不快に惱まされてゐる者は、外界の事物に對しては、それが自分の苦痛に關係のない限りは、興味を持たなくなると云ふは、自明の事として誰しも一般に認めてゐるところである。更に仔細に觀察して見ると、そのリビドー的關心をその戀愛對象から引揚げ、これを愛することをやめてゐるものであることが分る。自己保存本能と種族保存本能とが嚴格に區別出來るものとすれば、人々は病氣の間は自己保存のため種族保存の方を姑く保留してゐるのだと云ふことも出來るかも知れない。これは極めてあり觸れた事實であるから、誰人にも容易に首肯出來る。これをリビドー說で換言すれば、病氣の間、病人は自己のリ

ビドーを對象から引揚げ、病癒えて後に再びこれを對象に送り出すものであると云ふことが出來るのであらう。ロシアの小説家アンドレーフの作に『ベントビット』と云ふ短篇があつて、その主人公はユダヤの市民で、彼は救世主が磔刑に處せられると云ふ當日、自分の齒痛の事にかまけてゐて、この歷史上の大事實の前に全く風馬牛であつたと云ふことを描いたものである。

病氣の時と同樣に、睡氣の催した時も、リビドーはナルチスティッシュに自分自身の上に引揚げられてゐる。夢は主我的なものであるが、それはリビドーが既に自我中心的に引揚げられてゐる狀態に於いて見られる現象だからであらう。人間が一日の勤めを終へて、勤務先から自家へ歸つて來た時、大體に於いてリビドーはナルチスティッシュな形をとることになるであらう。人間は大體に於いて內辨慶になる傾向のあるのは、そのためもあらう。

三、ヒポコンドリー

ナルチスムス研究の第三方途たるヒポコンドリー（憂鬱症、恐怖症など）は、身體的病氣と同樣に肉體的苦痛を示し、リビドー配分の具合は、身體的病氣と全く同一である。ヒポコンドリー患者は興味をもリビドーをも——殊に後者を判然と——外的對象から引揚げて、それを自分が目下注意を拂つて身體的機關へと集注する。こゝまで考へて來ると、ヒポコンドリーと身體的病氣との區別は明かになる。後者に於いては苦痛の感覺が成程と首肯出來るだけの身體的變化を示してゐることに依つて基礎づけられてゐるが、前者に於いてはそれがない。併しヒポコンドリーとても、全然無根ではない。身體的變化がそこに缺けてゐるわけではないと云つても、精神分析の見解と矛盾しない。では、その身體的變化とは如何なるものであらうか。

フロイドはヒポコンドリーとは神經衰弱や强迫神經症と共に、身體的效果を示す第三の現實神經症であると云つてゐる。換言すれば、他の諸々の神經症にも多少のヒポコンドリーが混入してゐるのだと云つたとしても、必ずしも過言ではないやうである。これが最も美事に見られるのは强迫神經症に於いてと、强迫神經病に基いたヒステリーとに

於いてゞある。
さて苦痛的な感じのある、(何等かの點で變つてはゐるが、併し普通の意味で病氣になつてゐる)肉體器關の慥に原型となつてゐるもの(從つて同樣な心理作用を起させるもの)は、亢奮狀態に於ける性器である。病める器關は、さう云ふ場合には、充血し、膨脹し、濕潤となり、種々な感覺の座となるのである。性的亢奮が心理生活中に傳達せられる入口としての肉體個所の活動を、フロイドは發情性 Erogeneität と名付けてゐるが、この發情性なるものは、總ての肉體器關の一般的性質であると認めることが出來る。何となれば、フロイドが『性說に關する三論文』の中でも論じてゐるゐるやうに、性器以外の肉體的個所(性的帶域)が性器の代表となり得るし、また同樣な働きをなすものであるからである。從つて或る一定の身體個所に就いて發情性の潮が高低すると云つても差支へはない。諸々の器關に於ける發情性がそのやうに變化する度に、それと並行して自我內に於けるリビドー纒綿も變化するものである。そのやうな變化の原因を調べて見たならば、ヒポコンドリーの根抵は何か、身體的效果ある現實神經症と同じ效果をリビドー配分上に及ぼすのは何のためであるか、などの疑問が解けるであらう。

四、兩性間の戀愛生活

ナルチスムスを硏究する第四の途は、男女の戀愛生活の相違を觀察することである。我々は對象に纒綿せられてゐるリビドーを觀察してゐて始めて自我に纒綿せられてゐるリビドーを氣付くが、丁度それと同じやうに、分析者は又子供(或は若者)の對象選擇に於いて、彼等の對象選擇がその嘗ての經驗に由つてゐることを始めて氣付いたのである。幼兒時代の自己慾情的を性滿足は、結局生命に重要な自己保存に奉仕する機能(哺乳)と關係して經驗(口唇性感)せられる。性本能は始めは自我本能(自己保存本能)の滿足に依憑し、後になつて始めて自我本能から獨立する。ところで、その依憑は何に依つて分るかと云ふに、子供を育み、世話し、守護した人々が、(つまり母親又はその代理の者が)、最初の性對象となると云ふ點に於いてゞある。この型や、このやうな對象選擇の原因を依憑型と名

付けることが出來るが、これとは別に、分析者は第二の型を發見するやうになつた。そのリビドーが發達の途上に於いて障害を受けた人々（變態者や同性愛者）は、後年になつてその戀愛對象を母の原型に從つて擇ばず、自分自身の俤に從つて擇ぶと云ふことを、我々は明白に發見したのである。彼等は明かに自分自身を愛の對象として擇ぶのであつて、ナルチスティッシュと呼ばるべき擇び方をするのである。分析學者がナルチスムスを假定せざるを得なくなつた最も強い動機は、この觀察の内にあるとフロイドは云つてゐる。

とは云へ、人間は截然二群に分立し、或る者は依憑型に基いて戀愛し、他の者はナルチスムス型に基いて對象選擇をするのだと云ふわけではない。總ての人間の戀愛にこの二途が開かれてあつて、何れか一方が比較的より多く好まれると云ふだけである。人間は元來二つの性對象（自分自身と世話してくれる者と）を持つてゐるのだ。併しそこには勿論一切の人間に於いて第一次的ナルチスムスが豫想されるので、そのナルチスムスが對象選擇に於いて優勢を示すやうになることが多いのである。

戀愛の仕方に於ける男女の別を研究して見ると、對象選擇の型に對する關係に根本的の（常に定まつたと云ふわけではないが）差違の存することが分るのである。完全に依憑型の戀愛をなすのは、本來、男子的な特質である。男の對象愛には驚くほど性的買被りが表れてゐる。この買被りはどうやら、子供に本來なナルチスムスから發してゐるもので、このナルチスムスを對象に轉嫁（交付）するからこの買被りが出て來るのである。買被りをするところから、自分の持合せてゐる全財產（全リビドー）を投出して買物をしようとする。それが惚込み（リビドーの無一文狀態）である。かくて相手の方ではさして欲しくもないリビドーを押賣されて閉口することもあらう。岩倉氏が本誌本號に譯してゐられる『オランダ芹の漬物』の酷つぱさは、丁度から云ふリビドーの押賣、相手迷惑な惚込み狀態の象徵となつてゐるのであらうと思ふ。

女に於いて最も屢々見られる（最も純眞であると思はれる）型に於いては、ナルチスムス發展の樣子は、右に述べて來た男の場合とは、大分に違ふ。思春期に至るまで勢を潛めてゐた女性器が漸次に成熟して春情が發達するにつれ

て、本來のナルチスムスが昂じて來るやうである。これが昂じて來ると、普通の（そこに性的買被りの伴ふ）對象愛には、都合が惡くなつて來る。特に娘盛りになつて來ると、女は自身一人で澤山と云ふところを示すやうになる。ドイツの俚諺で云ふ『大理石の如く美しいが、大理石の如く冷い』"Marmorschöne aber marmorkalte" と云ふのは、この狀態を云ふのである。そのために、女は對象を自分勝手に擇ぶことが社會の因襲や制裁に依つて面倒になつてゐても、さして困らないわけである。『さう云ふ女は』とフロイドは云ふ。『嚴密に云へば、たゞ自分だけを愛してゐるので、その愛の激しさは、丁度彼女を愛する男の激しさと同じやうである。彼女はまた人を愛さうとは要求しないで愛されることを要求するのである。さうして、この條件を滿して呉れる男の氣に入らうとするのである。このやうな女の型の意義は、人間の戀愛生活のために甚だ高く評價すべきものである。さう云ふ女は男に對して最大の魅惑である。さう云ふ女は普通に最も美しいから美的根據から魅惑があるばかりでなく、また興味ある心理學的の觀念からもさうである。つまりかう云ふ事は判然認識されるだらうと思ふ、自分自身のナルチスムスをすつかり外へ出して了つて對象愛を探ねてゐるが如き人々にとつては、他人のナルチスムスは大きな魅力となるのである。子供の魅力も大部分は彼等がそのナルチスムスを保有し、自己滿足と、傍若無人振りを發揮してゐるに存する。同樣に、我々の事など眼中においてゐないやうに見える或る種の動物（例へば猫や大きな肉食獸などの）魅力もさうである。

『更にまた、大犯罪者や諧謔家（ユモリスト）も文藝作品の中で我々の興味を牽くが、それは彼等がナルチスス的な態度に依つて、彼等の自我を弱小に見せる一切のものを遠ざけることを心得てゐるからである。つまり、これは彼等が或る淨福な心的狀態を、襲ひ難きリビドーの位置を（我々自身は既に放棄してゐるのに）彼等が保持してゐるから、これを羨望してゐるかのやうである。ナルチスス的な女の大きな魅力には併し、その裏面がなくはない。惚込んでゐる男が滿足を得ないこと、女の愛を疑ふこと、女の本質が謎であるのを嘆ずること、などの大部分は、この對象選擇型のこの齟齬に、その根柢が存するのである。』と。

つまりかゝる女にとつては男から愛されることは嬉しいが（ナルチスムスに媚びられる結果となるが故に）、自分

は自分だけを愛してゐるので、男からの惚込みに對して[*]それに相應する戀愛を以て返報することは考へてゐないのである。女の戀愛生活は大體このやうであるが、男子型に從つて戀愛し、男子的な性的買被りを示す女子も、世には多數存することは勿論である。

註＊こゝに惚込みと云ふ言葉を用ゐたが、これは術語的な意味のある言葉で、この語を正しく理解するためには、戀愛感情の中には、幼兒時代から兩親（又はその代償）に對して抱いて來た（性目的を禁制せられた）感傷愛の流れと、思春期に至つて眼覺め來つた肉感愛の流れとが交流してゐることを知らなければならない。この二つが矛盾なく合流するところに健全な戀愛が生じ、そこにエディポス的その他の障害が生ずるところに不健全な、併し時には精神的に崇高な戀愛が生ずる。それ故に惚込み狀態に於いては、ナルチスス的な自我リビドーの一部は對象に纒綿してゐる。併し、これが極端になると、自我リビドーの殆ど全部が對象に纒綿し、對象は自己の超自我と同じになつて來る。自我は超自我の命令に從順であつたのと同じ程度に、對象の命令に從順になつて來る。卽ち、沒我の狀態になつて來る。換言すれば、催眠狀態と同様になつて來る。催眠狀態はリビドー關係が（集團に於けると違つて）二人の間に限定されてゐる點と、對象を超自我（理想我）の代償とする（又はせんとする）點とに於いては同一であるが、たゞ催眠狀態に於ける二人の關係はその間の性目的が禁制されてゐる、その點が違つてゐるのだ。精しくはフロイドの『集團心理と自我の分析』を參照ありたし。

またナルチスティッシュで、男に對していつまでも冷淡である女にとつても、彼女が完全な對象愛をするやうになるべき機會がないではない。彼女が生んだ子供に於いて、自分の肉體の一部分が別個の對象となつて、自分と對立する。そこでその對象に向つて女は自分のナルチスムスに少しの矛盾もなく、却つてこれを生かして對象愛を送ることが出來るやうになる。なほまた別の女たちは、子供に於いて再發見した第二次的のナルチスムスから對象愛へと發展するために、子供を持つに及ばないのがある。どう云ふのかと云ふと、彼女等は思春期以前に自ら男のやうに感じて、その部分をずつと男子的に發達させてゐる。この男子的なものが、年頃になつて女として成熟して行くにつれて、打破せられると、一つの理想的男子を憧憬するやうになる。この理想的男子とは實に、嘗て彼女自身であつたと

ころの、男子的本質の連續したものなのだ。
以上で簡單ながら對象選擇の途を大觀して來たが、更にこれを表示すれば――
（一）自己戀愛型に基くもの、
（a）現在の自分自身、
（b）過去の自分自身、
（c）將來の自分自身、
（d）自分自身の一部分であつた人、（例へば母にとつての子供）
（二）依憑型に基くもの、
（a）育んでくれた女、
（b）保護してくれた男、並びに彼等と前後して入替つた者。

右の內第一のa種に關しては、人々が相手の內に自分自身を發見することに依つて愛情を覺えることは、『同病相憐む』とか、『類を以て集まる』とか、（これ等は廣い意味のエロスで、男女間のことに局限されないが）、『戀愛とは相手の內に自己を見出すことなり』とか云ふ言葉に徵しても分る。『戀愛とは自己の內に缺けたるものを相手の內に發見することなり』と云ふ言葉もあるが、その缺けたるものが自信や我儘や自由や力である場合には、既にフロイドが論じてゐるやうに（九頁一二行以下）、やはりナルチスス型の戀愛の範疇に屬すべきものである。

次に、これは一種獨特な型で、右の四種の內何れにも該當せず、dの內にbの實現せられなかつたところを實現せんと願望するものとして、フロイドは興味ある鋭い觀察を述べてゐる。『優しい兩親が子供に對する心的態度を仔細に觀察するならば、そこに彼等自身の久しく放棄されてゐたナルチスムスの復活と再生とを認識せざるを得ない。買被りと云ふことは對象選擇に於けるナルチスムス的特色として既に我々が論じたところであるが、この買被りの徵象が彼等兩親の子供への感情の內に認められることは、萬人の知るところ

である。そこで子供に一切の完全さを、正氣で觀察すればとても考へられもせぬやうな完全さを、歸するやうになり、一切の缺陷を看過し忘却する（その忘却の中には、子供の性感を否定することも含まれてゐる）やうになる。ところがまたそこには一切の文明的成果や社會的約束（それ等を承認することは彼等のナルチスムスに拘らず已むを得なかつた）を子供等には及ぼさないやうに、久しく放棄してゐた特權をば子供に於いて復活させようとの傾向も存するのである。子供はその親たちよりは優遇されなければならない。人生を支配してゐると親の認めてゐる種々な必然事にも、子供は屈從すべきでない。病氣、死、享樂放棄、自己意志の制限などは子供に及んではならない。自然や社會の法則は子供の前に堰止められねばならない。子供こそ萬有の中點であり核心でなければならない。赤ん坊陛下はつまり我々自身の嘗ての自己空想であつたのだ。兩親が實現し得なかつた願望の夢を、子供は充足しなければならない。父の代りに英雄偉人になつて貰はねばならない。母には及ばなかつたが、せめて娘は王子樣のやうな人に嫁いで貰はねばならない。ナルチスムス的組織の最大の難點は自我の不滅性であつて、これは現實の前には一たまりもない點であるから、この難點を遁れるには最も確かな道は子供へ逃込むことである。兩親の切々たる、併し根柢に於いては甚だ幼兒的な愛情は、彼等のナルチスムスの再生に外ならないのだ。さうしてそのナルチスムスは變じて對象愛となることによつて、それの嘗ての日の本質を明かに呈露してゐるのである。』

この意味で凡そ多少ともナルチスティッシュでない親はないであらう。また凡そナルチスティッシュでない戀愛者も絶對にないと云つて差支はなさゝうである。

精神分析學は科學であつて、科學は價値判斷には無關係にたゞ事實を正しく認識することを目的とするものであるから、以上のナルチスムスの論に於いても、これを非難する意圖は全然ないのである。事實の正確な認識に基いて以何に生活を實踐するかは、これ既に別問題である。

五、女性愛に於ける受胎の象徴的意義

以上、戀愛態度に於ける男女の別に就いてリビドー說に卽して、自己戀慕型と依憑型の交錯を考究して見たが、更に戀愛時の空想に卽して考究して見ることも出來るので、それを茲に試みよう。勿論、兩方の考へ方は相補ふべきものであるが――。フロイドは、男にとつて女を愛するとは、これを母にすることであり、女にとつて男を愛するとはこれを子にすることであると云つてゐるが、これは實に眞實である。これを最も完全に表現してゐるものに、故瀨戸英一氏が花柳社會を描いてゐる芝居がある。かう云ふ社會は科學的敎養がないだけに人間の無意識空想を完全に保存してゐるやうであるから、我々の硏究には非常に參考になる。その實例として、こゝに氏の『追善二筋道』と『むらさき』の二作を擧げて論じて見よう。

この作の主人公藝者喜代次はあんなに世話になつた前の旦那阿久津の忌日や命日に少しも顏を見せないのが花柳道德に反すると云ふので、姐さんたちの間に一大問題を惹起してゐる。ところが喜代次としては、阿久津の恩義を忘れずその愛情を覺えてゐればこそ、忌日命日に顏が出せないのだ。何故か、それは現在の旦那菅澤との間に（阿久津との間にはなかつたのに）始めて一子をなしてゐるからである。併し菅澤の義理立てならば、無用である。さばけた菅澤は阿久津の命日の詣りに喜代次の行くことを寧ろ切に勸めてゐるほどだからだ。さア、人々の間に喜代次は謎となり、憤慨の對象となつた。併し喜代次としては阿久津との間に子を生さず、菅澤との間に子を生したと云ふことに、大きなこだはりが覺えられるのだ。彼女の本心から云へば、寧ろ阿久津との間に子を生したかつたのであらう。少くとも阿久津との間にも生したかつたのであらう。それが女として男への最大の愛情と感謝の表現だからである。こゝまでは常識で解釋がつく。併し子供を生むことが何故男への愛情と感謝との窮極的表現となるのかと云ふことは喜代次にも姐さんたちにも、恐らくまた作者自身にも分つてゐないであらう。作者として必ずしもそれを意識しなければならないと云ふわけでは、勿論ないが……。

男にとつては女を愛することは相手を自分の母にすることであり、女にとつて男を愛することは相手を自分の子にすることである。（どうしてその事が分つたかは、精神分析の實驗結果を見て貰ふより外に返事の仕樣がない。）併し

堂々たる成人を事實上子供にすることは出來ないから、その代償として、その男の××を含み、その男の子を生んでやるのである。その故に赤ん坊は屢々男×の象徴となるのである。胤を宿したと云ふことは女の無意識にとつて本當に××を含んだと云ふことを意味する。喜代次は、心持では阿久津を愛してゐたのに、身體では菅澤の愛をのみ受入れた結果になつて了つた。そこに彼女の心的葛藤があつた。その葛藤と矛盾とを除く方法は、端的に云へば子供を殺すことであるが、それは別の愛情や理性や本能が許さない。そこで子供の代償（象徴）として頭髮を取除くことがその方法として選ばれた。どうせ子供が抑々、象徴に外ならないのだから……。かくて彼女は申譯ばかりに髮を切ることに依つて、阿久津の靈前へ出て良心の咎めを感じないで濟んだのである。頭髮の先を少しばかり小女に切らせてゐる喜代次の姿を、さきに批難した姐さんたちが垣間見して、申譯ながつて泣いてゐる場面は、滑稽と云へば滑稽だが當人たちにとつては尤なところだ。頭髮が子供（即性器）の象徴であることは、僧侶の剃髮を見ても分る。剃髮は去勢の象徴であると分析學上云ふのは、そのためである。

六、女性愛に於ける人形の象徴的意義

『むらさき』にも、やはりから云つた象徴が用ゐてある。その方の象徴は頭髮ではなく、子供でなく、人形である。美しいお酌の麗子はお座敷で血を吐いて、やがて肺のために死んで行く。彼女が平生大切にしてゐた人形があつたので、それを麗子の養母にして藝妓家照大和の女將なるお京が、麗子の旦那になる事になつてゐた大海原に與へようとするが、その人形は麗子が生前、近處の蕎麥屋の出前持の幸ちやんに與へる心組みにしてゐたと女中が云ふので、遺書を出して見ると果してさう書いてある。お京もお京の旦那も大海原も、呆れはてゝ物が云へないと憤慨する。人もあらうに蕎麥屋の出前持に心持を寄せるとは、何と云ふなさけない麗子であらうと痛嘆する。

麗子の心の唯一の理解者は回向に來合せたお寺の坊さんであつた。彼は平生、麗子が自分に實の親のないことを悲

しみ『おれと來て遊べや親のない雀』と云ふ名句にしみ〴〵自分の境遇を同感してゐたから、それはやはり親のない子の幸ちやんに同情してゐたので、その無邪氣な同情心の單に子供らしい發現として解すべきものだと坊さんは主張するが、旦那や姐さんたちはなか〳〵承知しない。大海原も誠にしらけた、照れくさい氣持になつて歸つて行く。

　この場合、坊さんの云ふ事が正しいのであらうか。もし正しいと作者が考へてゐるとすると、この幕切れは誠にあつけない。坊さんの云ふことなど、一向誰も耳にも鼻にも入れてをらぬ樣子である。當然ならば、坊さんのお説に一同敬服して、麗子の無邪氣な、清淨な心を邪推したことを謝罪するやうな場面を以て幕切れとすべき筈である。併し作者がさうしなかつたのは、やはり作者に別の考へがあつたからであらうと我々は察せざるを得ない。

　併し麗子は慥に無邪氣（と云ふよりは無慾）であつたには相違ない。彼女は彼女の旦那にならうとした、金と教養とのある大海原よりは、少し足りないとさへ見られてゐる貧しく無教養な幸ちやんに興味を寄せてゐたのだから……。彼女の戀愛心理は、精神分析的に見れば、まだ發達の第一段階にあつた。彼女は幼兒的心情をまだ殆どそのまゝに保存して思春期に第一歩を踏入れたばかりで、その根柢にはまだ多分の自己戀愛（ナルチスチツシュ）的な要素を保存してゐた。それ故に、なるべく自分の境遇に近いものに興味と同情とを持つやうになつたのである。さうしてその興味と同情との表現として、自分が平生大切に可愛がつてゐた人形を遺品として遺書まで添へて、幸ちやんに與へることになつたのである。この人形は麗子自身の『分身』（代理）であると共に、自分と幸ちやんとの間に出來た子供としての意義が、彼女の無邪氣な性的空想の中に存在してゐたと察せらるべき理由がある。この『無邪氣な性的空想』の意義を花柳界の人々獨特の敏感さを以て感得したのが、麗子に對する反感と失望となつて現れ、坊さんの取なし的解釋も、その反感と失望とを打消すに力なかつたのである。

三、少女愛に於ける母性愛的特徴

　人形に複雜な象徴的意義あることは、何人も知るところであるから、こゝには説明を省略しておく。

以上擧げた二つの例證は文藝作品中の場合であるが、實際の場合にとてもさう云ふ心理は幾らでもある。次に擧げる二つの實例は、少女の愛情心理であるが、それ等に於いて既に立派に女としての愛情心理の特質が表はれてゐるから、恐ろしいものである。二つとも雜誌『子供の教養』（昭和九年一月號）に出てゐる話である。『子供の素顔』の題下に王山氏が書いてゐるところの一節を引用する。

『みんな連れて買物に出掛ける時でした。私も支度をしてゐました。ネクタイを結びかけてゐるところへ、もう外套を着てしまつた宣子（十歳）が來て、だしぬけに云ふのです。「お父さまがねえ、私より小さくて、私の方が父さまよりが、大きいとよかつたわねえ……。」「どうして？」「それだつたらねえ、私がねえ、父さまにねえ、今日は寒いからもつと着なさい……だの、それは食べてはいけない……だの云へるからよ。』私は何とも云ふことが出來ず、默つてしまひました。外へ出てからも、何度も何度もこの言葉を繰返して見ました。』云々と。

筆者はこの少女の心理が分らなかつたらしい。併し不思議な言葉として氣に掛つてゐるらしい。が、我々から見ると、父を自分の子として扱ひたがつてゐる、少女とは云へ既に女らしい愛情心理をそこに判然認めることが出來る。父を子にすることの心理の中には、母の代りにならうとするエディポス・コンプレクス以外の傾向を認めねばならないわけである。なほ同誌同號には、本誌關係者の高崎能樹氏が寄稿してゐられる中に、同氏が幼稚園長としてやはり幼兒の遊びに仲間入りをさせられるところの話が出てゐる。曰く――

『……おうちごつこのお仲間に初見參の御挨拶をして「一體、私を何にして下さる？」とお役目を聞いて見ますと、「園長先生は赤ちやんになつて頂戴」と御命令が下ります。大きな白髪の赤ちやんが、小さなお母さんのお膝にもたれて可愛がつて頂くこの光景！』と。

そこになほも一つ見落すことの出來ないのは、少女心理に於けるエデポス願望であると思ふ。先の場合は實父を相手とするものであるが、次の場合は父コムプレクスの轉嫁對象たる園長を相手とするものである。

男性愛に於ける空想に就いては、救助願望論（本誌第一卷）中に詳論しておいたから、こゝには贅せぬ。（完）

自己戀愛と超自我

——J・C・フリウゲルに依る——

岩倉具榮

人間に自己戀愛（Narzissmus）の存することは、本誌の讀者諸氏にまで今更説明を必要としないであらう。その自己戀愛が如何にして對他戀愛となるか、それの一般的發展を極く簡單に考察して見よう。自己戀愛（ナルチスムス）に於ては、諸氏が既に御存知の如く、リビドーは外界に對するよりもむしろ自己に向けられる。强烈にナルシスティッシュな個人は、自分の肉體及び（多少それよりも極端な場合には）自分の心理に執心するから、直ぐにそれと分る。此のやうな非常に高度なナルチスムスのある人は、外界に對してやゝ無關心となり、また外界から孤立するやうになる。このやうに孤立して了はれては如何なる精神療法も手のつけようがなくなる。何となれば、精神療法は、患者が外界（治療家もまた患者から見て外界の一部分だから）に興味を向けてゐてくれるからこそ、その興味を手蔓として治療の手段を講ずるのだからである。總て狂氣と云ふものは、外界からのある程度の絶緣を意味してゐる。初めて瘋癲病院を訪問する何人もが受ける所の恐らく最も强い印象は、患者がお互同志極めて僅小の關心しか持合つてゐないと云ふことである。狂人はみな自分自身への關心に沒入してゐる樣に見える。常態人ならばその樣に大勢人が寄合へば、その内の二三人は必ず一緒に雜談してゐるものであるが、狂人等に於いてはそれがない。彼等にもし環境と云つたやうな觀念が少しでもあるとすれば、その環境觀の根抵は幻想的のもので、內面から精神から構成される傾向がある。この樣な人々は、永久に外界現實に卽することを忘れて了つてゐ

るのである。併し吾々常態者とても、定期的には現實との接觸を失ふものである。その極端な場合は睡眠中であり、又それのより少い場合は白日夢や幻想に耽つてゐる時である。現實に於て慾望を成就するには必要であるべき手段も、それを取る心配なくして吾々の慾望の空想的成就を遂げるのである。フロイドの用語を用ふれば、吾々は「現實原則」によるにあらずして「快樂原則」によつて思考するのである。併し乍ら、かう云つたからとて、幻想が必然的に無用なものだと云つてゐるわけではない。それどころか幻想は恐らく本質的に必要なものである。——

(1)この不完全な世の中に於ては、到底満足させられつこのない慾望に對するはけ口、或ひは「安全瓣」として幻想が役立つこと。

(2)何かを實際に成就するに就いての手初めとしても、幻想が役立つこと。何となれば、空想の豫備快感に釣られて吾々は、一層困難な、併し一層永久的に満足を與へる現實への享樂に向ふやうになるものだからである。

幻想が病的と認められ得るのは、只そのために、吾々が外界との取引するに當然必要なエネルギーの量をそこから回收して了ふ時にのみである。幻想が病的と認められるのは實は、人人が事前と事後とに考へて見ると云ふ凡ゆる重要な能力が誤用される場合にのみである。

變態的狀態にある場合は別として、ナルチスムスの如何なるものであるかは、多分ある比較を用ゐることによつて一番よく理解され得るであらう。先づ最初に、肉體が健康である場合と肉體が病氣である場合との、心理狀態を比較して見よう。後者の狀態では、興味が必然的に自己に一層集中される様になる。病人はその愛人に對して素氣なくなる。リビドーが自己に集中されて相手に纒綿されないからだ。二つの場合の心理狀態の差違は、齒痛とか船醉とかの様に極めて急に起つては消滅する一時的苦痛の場合を見れば最もはつきりと分る。齒病や船醉の狀態に於ては、吾々自身の肉體から來る感覺が非常に心を奪ふので、ほんの少し前迄は吾々が興味を寄せてゐた人間と事物とからさへも吾々の注意は回收されて了ふのである。

第二に、男女兩性を取つて比較して見よう。吾々の現代社會は、男性に於けるより以上に女性に於いて一層大量のナルチスムスがあると考へてをるばかりでなく、あることを奬勵してゐる。男性がその個人的外貌に就いてあまりに氣を配りすぎると、おしやれであるとか、女のくさつたやうだ（やはり女と關係させて考へてゐるところに注意あれ）とか云つて批難するが、それが女の場合

であると、或る程度まで喜んで許容する。男性の衣服にあつては、そこに少しでも誇示（何となれば、ナルチスムスは、社會的に表現されては勿論、露出慾を利用することになるから）の調子のあることは嚴しく禁壓される。實際の戀愛生活そのものに於てさへ、差違がある。婦人は自分の方から愛するよりも、むしろ先方から愛されることを求めるが、格別に愛他的の男は戀愛の對象を自身で所有することを盛に求め、而も彼は相手からも愛されてゐるかどうかについてはやゝ無關心である。勿論その差違は如何なる場合にも相對的で、絶對とは云へない。女性に於いてはそのナルチスムス的なリビドーの目標は個人的美であるが、男性に於いても、その個人的美のある代償がナルチスムス的リビドーの目標となる。運動競技の勇敢さや筋肉の發達はこの様な代償であらう。（ある有名な體育家はその生徒に向つて、「汝等はその練習を鏡の前でせよ、然らば一層面白いであらう」と說ききかせてゐる）。智力上の勇敢さも亦、男女兩性に於て、一層精妙な、又昇華された代償としての役目を果し、そして之のために吾々は自然に、ナルチスムスのより高度な、より複雜した發達に導かれるのである。

ナルチスムスの極初期の、又もつと原始的の形は、實際あるが儘の自分自身を愛することである。子供のナルチスムスがそれである。リビドーの多少の量は生涯を通じてこの狀態に止まつてゐるのである。けれども、それ以後の發達途上で、或る量のリビドーはひとりでにこのナルチスムスの形に入り込みつゝ轉位（置換）に遭遇する。――そしてこれには二つの主なる方向がある。一方に於ては、自己愛から他人愛への置換、卽ちナルチスムスの段階から轉嫁愛の段階への移行がある。この事はやがて後ほどにまた詳しく論及する。他方に於て、實際あるが儘の自分自身（現實我）の愛から、かくあれかしと思ふ自分（理想我、自我理想、或ひは超自我）の愛への置換と云ふことが存する。このやうに原始的ナルチスムスが理想的ナルチスムスへと置換られるために、吾々の（屢々あれほど恐るべく又力强い）道德性はそこから一つの大なる精力の源泉を得て來るのである。もう一つの大きな源は、その起源に於て一層複雜してゐる。それは最早期の外部の道德力、卽ち兒童に最早期に善惡の別を敎へる兩親とか、乳母とか、その他影響を與へる人々の道德的態度及び訓言を自己の中に取込むことから來てゐる。此の取込み（或ひは內化）によつて、個人はやがて彼の永久の心構への一部分として、云はゞ彼の中に、その環境の道德的標準を採用するやうになるのである。本源的には外部的法則であつたものが內部的法則となつた

のである。兒童分析に於ける最近の研究に依れば、超自我の基礎は極めて初期（確かに五歳以前）に定められるものであることが分つた。またこれに依つて見ても、之等の基礎が特別に古代的なものであり又近づき難い性質のものである事が明かである。――成年後の經驗によつては、それに對してなか〳〵影響を與へ得ないものである。このやうな近づき難い性質があればこそ、人々は、（フロイドの言葉を引用すれば）、「彼自身の思つてゐるより以上はるかに道德的である」と共にまた、彼の意識的道德性（それは一般に溫和な、融通の利く「合理的な」ものだ）と、無意識的道德性（この方はより嚴しく且つ伸縮不自由なものだ）との間には屢々（多分常に）重大な矛盾が存在するのだ。――今日の進步的な意見を持つてゐる人々は、その理論の方がその實際よりもはるかに自由であるが、彼等に於てはこの矛盾が恐らく特別に著しいのでめる。

超自我は、あれほど嚴酷で頑固であるところから見ると、それは勿論大部分は吾々の父兄師長の道德性の取込みに依存するにしても、矢張その成立するに就いては父兄師長の道德觀以外の要素もそこにあるに違ひない樣に思はれる。特に超自我の苛酷と兩親の實際の嚴しさとは、常に必ずしも正確に一致してゐるとは限らないのだから、猶更である。

この事は、精神分析學が探求に依つて現在解決に力めつゝある大問題の一つである。吾々には現在のところ未だ確信を以て何事かを逑べ得るまでには至つてゐないが、超自我中の少くとも或る重大な要素が個人の自己に對する攻擊的傾向に存するらしく思はれるのである。之等の傾向は慾望が挫折された場合には、いつでも喚起せられ、そして最初はその傾向があるやうに考へられる。吾々は、何か自分の慾望が思ふやうにならぬと、それは周圍の人々が故意の敵意を抱いてゐるためだと考へてゐるかの如く行動する。野蠻人も不幸や病氣や死は、凡て邪惡な魔法、或ひは敵意ある惡靈の爲だと思つてゐるが丁度それと似てゐる。併し、吾々は吾々の父兄師長を愛すると共に又恐れてゐるものである以上、慾望を挫折せしめることの內に含まれてゐる攻擊性はそれ自身禁制されねばならず、又かくして挫折されねばならない。然るに凡そ禁制された攻擊慾は必ず一つの別のはけ口（轉位――置換に依つて）を見出すことになるか、又は自分自身の內部に向けられざるを得ない樣に思はれる。前者の例としては、江戶の仇を長崎で打つとか、傭主に叱られた番頭が、小僧に當り散らす如きである。極めて幼少期に於いては、江戶の敵を長崎で打つやうな器用な眞似は

出來ない。それ故、幼兒の攻擊慾は自身に向けて返り、そして超自我が野蠻で殘酷な現れとなる主なる源の一つと成るのである。

以上の說が眞理である限り、吾々は非常に溫和な寛大な兩親でさへ、尙彼等の子供等の中に嚴しい超自我を形成する契機となるものであることを見ることが出來る。何となればこの樣に兩親が大人しくては、恐るべき攻擊をこれに向けるに特に不適當であるからだ。そのために此の攻擊慾を禁制する必要が愈々大となり、從つてそれが自我に返つて來ざるを得なくなるわけである。吾々は亦、苛酷過ぎる超自我を持つてゐる子供の超自我を緩和せんとするに、育兒室や學校敎室に於いて嚴格の代りに優しくすると云ふだけでは駄目だと云ふことが分る。問題はそれよりも一層六づかしいのである。この問題を解決するためには、一方なるべく子供の慾望を拒否しないやうにしてやる（子供の「多型變態」に對して一層寛大な態度をとる――つまり大人の生活の性慾に對して社會がより寛大になるのと丁度符合し合ふ育兒室に於ける寛容の態度）と共に――出來得べくんば――尙必然的に起つて來る攻擊慾のための適當なはけ口を用意してやる事である。之は未だ考慮の餘地のあることではあるが、この問題は精神分析學が今後の發達に依つて間もなく吾々に啓示するものであらうことは明かである。

以上はまた不確定な點の含まれた說であつたが、次に吾々は精神分析的理論の更に確實な方面に向はう。分析者によつて認められる如き超自我の性質と機能とをよりよく理解するためには、フロイドが一九二三年に公にした著「自我とエス」の中に述べてゐる一層進んだ概念を參照しなければならない。その中で、心は自我、超自我及びエスの三部分から成立つてゐると云ふ。自我は外的現實を認識し、吾々をしてそれに適應するやうに行動せしめる部分であるが、エスの方は吾々のあらゆる慾望が結局そこから引出されて來る本能力の一大貯藏所である。併しそれに對して吾々は常に意識的に自分で責任を持つのではない。我々が我々の內なる現象でありながら、エス（それ）と云ふ第三人稱を用ひ、何か吾々自身とは緣遠いものであるかの如く見做す傾向があるのはそのためで、現に「私は自分の感情の波に押流された」とか「私はそれ等に壓倒された」とか云ふ表現を用ふるのだ。自我は三人の主人（卽ち外的現實、エス中に存する吾々の本能的慾望、及び自我中に存する吾々の道德的標準）に對して何れをも滿足させるやう最善を盡さねばならないと云ふ、非常な力量、技巧及び政策を必要とする困難な役目を持つてゐるのである。心が健康でなければ

自我はこの大役を果し得ないのである。自我が如何なる性質の不健康さに陷つてゐるかに依つて、その役目を果し得ない樣子にも相違があるが――。そして精神分析的治療の目的は自我の働きを强めるにある。自我の働きを强めるとは、どう云ふ事か。

(1)抑壓されてゐる本能的慾望の眞の性質を闡明せんがために、エスを調べて見ること。

(2)超自我が如何なる要求を出してゐるか、その性質をも、同樣自由に調べること。

(3)超自我とエスの間に出來上つてゐる神經症的妥協機能を打破すること。

斯て超自我とエスは共に等しく現實に直面することになる。そして葛藤の中に閉込められてゐるエネルギーが現實に自由に表現せられるために(卽ち吾々の慾望が、合理的な又は進步した道德性の要求と調和する方法によつて「現實」上の滿足の最大限を受ける爲に)必要なだけの犧牲を拂ふことになる。ここまで述べて來れば、何人にも大低お分りの通り、本質的の困難は(1)よりもむしろ(2)及び(3)に存する。(2)に關しては、凡そ神經症を首尾よく解消し得るためには、多くは超自我の要求を多少變形したり弛緩したりするのだといつても過言ではない。その超自我は屢々現實の人間性がどんなであらうと、本能が如何に不可抗力的なものであらうと、それを考量の內に入れることを好まない樣に見える。それは丁度、エスが、吾々の慾望の途上に如何に屢々外的世界に依つて障害物がおかれるかを考量することを好まないのと同じである。就中、超自我はその組織上の二三の昔ながらの特徵を放棄せねばならない。――

(a)行動に對すると同樣な嚴格さを以て單なる思想を罰する傾向(例へば、ある人がその親戚の者の死を無意識に願望してゐて、併しそれに就いて別に何も手を下さなかつたとしても、その親戚の者が死んだ場合に、自分が殺したと同じ罪惡感を覺える如き……。)

(b)ある特種の慾望への非難を、それとは薄い關係しかない凡ゆる慾望に迄擴張する傾向。(例へば、幼兒期性慾の最期の表現が近親姦的基礎を持つがために、凡ゆる性慾を非難する如き)。

併し多分最大の困難は(3)に存する。長い間、神經症に罹つてゐると云ふことは、エスの力と超自我の力とが特別に堅く結合してゐることを意味し、兩方が妥協の解消によつて失ふことを恐れるためにこの結合はなか〳〵破り難い。社會的の比喩を用ふれば、超自我とエスが神經症的徵候から得る滿足は、敎會と酒密賣者とが共に禁酒令の中に見出し、そして兩者が共に飮酒の自由を訴へる

ことの可能な利益を客觀的に考察するのを好まないのと同樣である。

×

精神分析學的調査が超自我の研究をなし遂げた限りでは、吾々の苦惱――個人的苦惱及び社會的苦惱――は人間の道德性の不足のためよりは寧ろその過剩なるに基くらしい事は、奇妙な、そして面白い事實である。實際、患者の超自我が弱きに失して危險である場合を報告してゐる分析者は一人もないのである。このやうなやゝ逆說的な發見がなされたのは、超自我が過度に發達してゐて絶えず抑壓への極度の努力をなし、「常態的の」發達に見られる如きリビドーの置換や昇華が妨げられてゐるといふ事實に基く所が多いのである。それ故リビドーは比較的未發達な幼兒期的標準に定着してをり。從つてある意味に於ては、不都合、或ひは不道德と見做される（大人の標準によつて判斷されるならば）如き行動となつて現はれる傾向がある。この樣にして借金支拂のために借金する如き惡い循環が生ずる。抑壓は定着を獮し、定着は更に、抑壓への新しい努力をなさしめる。此の如き狀態を治す唯一の方法は、道德的檢閲を緊張させないで、弛緩させることであつて、實際多くの反社會的行動は、最初は超自我が不當に弱いためである樣に見えるかも知れないが、實は明かに超自我そのものの影響であることが、細かく調べて見ると、分るのである。此の如き行動としては、次の如きものがある。

(a)精神分析學は、ある種の人々が「良心のために罪」を犯すやうになるものであることを明かにした。卽ち社會から罰して貰へば內心の罪障の耐えられない緊張が寛和せられ輕減されるためである。

(b)生命本能の慾求が餘りに深く不斷に拒否せられてゐるために、それに對する欝憤が發して敵意と復讐との行爲となる。

(c)あとで苦痛を受けることに依つて倍償するといふ條件の下に許されるリビドー的慾望の直接的表現。

(d)刑罰に對する右の如き要求を他人（「身代り」）に投射することから結果する殘酷。

この最後の場合には本誌先號にも書いておいた如く、普通にはサディスティッシュな傾向が強く混つて出て來る。これは、疑ひもなく社會を分裂させる如き種類の攻擊慾の本源となり、吾々はたゞ今その驚くべき力に對して微かな洞察を得つゝあるに過ぎないのである。（完）

ドストイェフスキーの戀愛心理（ノイフェルド）

平塚義角譯

一、詩人の宗教心理

子として父に對する態度が惛愛並存的（アムビヴァレント）であつたためにまた、詩人の宗教に對する態度が生涯、相反並存的であつたと認められる。彼の作を表面的に讀む者は、勿論、彼が二十世紀での最も深い宗教詩人であると考へる。然し神の存在や宗教に對して、彼以上に力强い反證を作り上げた詩人や哲人が、嘗て一人でもゐたであらうか？ 宗教に對する彼の感情の發露は肯定的であつたのだが、殆ど否定的な、いや誹謗的な發露に近いものとなつたのであらうか？ さうだ、一體、「惡靈」のキリローフや「カラマーゾフ兄弟」の宗教裁判長の挿話の如きを創作した人間が、尚宗教的だと言はれ得るだらうか？ 「惡靈」に於いてスタフローギンがシャトーフに向つて問ふたと同樣に、我々は詩人に向つて汝は本來神を信じてゐるのかと質問して見たくなる。すると詩人は、彼の創造した人物と同樣にかう答へるに違ひない。——「私はロシアを信ずる。その正教的な教理を信ずる。私は基督の肉體を信ずる。私は新らしき再現がロシヤに於いて實現するものと信ずる。私は信ずる……」そしてスタフローギンが、然し神はどうだ？ 神はどうだ？ と追及した時、シャトーフはうな垂れ吃り乍ら、「私は、私は神樣も信ずるでせう」と答へた。然し彼はこの信仰を、非常な魂の格鬪の下に白熱的に戰ひ取つたのであるが、かく白熱的に戰ひ取つたこの神の信仰も屢々動搖した。そしてドストイェフスキーも自分の不信仰を承認しようとはしなかつたであらうけれども、不信仰者の心得を餘りに良く知りすぎてゐた。刑務所での服役を終つた後、即ち彼がそのために非常な賞讃を浴びた例の信仰への轉向を既に經驗して了つた後、彼は或るデカブリスト（一八二五

年ロシアに起つた陰謀團員）即ち政治上の追放者の妻（彼女は彼に、そのオストロッグでの滯在中もその後も、際限なく澤山の恩惠を施したのであつた）に宛てゝ斯う書いてゐる。

「私は貴方に自分の事を申上げますが、私はこの時代の子供であり、不信仰と懷疑癖の子供であり、そしてどうやら（私は確かにそれを知つてゐます）私は死ぬまでこのまゝでゐるでせう。然も信仰への憧憬は、如何に私を惱ましたか（そして現に、今も私を惱ましてゐます）。そして信仰への反證が澤山になればなるほど、その憧憬は愈々強くなるのです。」

この告白は、遠いシベリヤでの私信の中にあつたのだが、直接に不信仰や神の否定に對して鬪爭してゐる公表の文章に於いても、かう云つた個所が見られる。彼は例へば「或る作家の日記」の中でかう言つてゐる。神を否定する者は、自分が發揮した樣な否定力などは夢想だもしないものだと。……然し結局彼はこの否定を淸算しなかつた。何故なら、父親への否定的感情は又しても爆發して、父なる神に對する常に新らしき叛逆へ、卽ち神の否定や不信仰へと彼を驅立てたからである。最後までこの鬪爭は盡きなかつた。にも拘らず、彼の宗敎的感情はまたしても、彼の相反並存的なエディポス・コムプレクスの克服に對して、卽ち彼の同性愛的素質の昇華に對して、助けとなつた。*

註 *父への同性愛的感情が昇華（醇化）せられて、父なる神への敬虔心となると斯學は敎へる。（譯者）

二、彼の祖國愛心理

かくて父親に對する憎惡感は昇華せられて宗敎心となり、他方近親姦的願望は昇華されて祖國愛となつた。卽ちこれ等の願望は抑壓される限り、生きながら葬られるかも知れないとの恐怖の如き神經症的疾患となり、上述の「お話しめいた心配」へとなつて行つた。然しこのやうな神經症的狀態が獄中に於いて餘程よくなつて行つたところを見ると、我々は、この間にその狀態が昇華せられ始めて、大部分はまた完全に昇華して了つたのだと認めねばならぬ。「私はロシアを信ずる」と云ふシャトーフの第一信條は、また同時にドストイェフスキーの信條でもある事は、彼の作品の何れの中にも認められる。彼は祖國ロシアが神に選ばれたる國である事を斷乎として信じ、さうしてロシアは、社會主義の涙と血との氾濫から全世界を救濟するであらうと豫言した。またヨーロッパの模範となり、眞のキリスト敎國家となるのはロシアであると豫言した。然し精神分析は祖國愛の根柢に橫は

つてゐる無意識的感動の何たるかを敎へた。それによると、祖國愛は寧ろ母國愛と稱せられるべきものである。何故なら、愛國者の愛情纏綿は母なる大地への關係の中に根ざしてゐるからである。無意識にとつては母や子守りや乳母や又親切に世話してくれる女は、人間を養ひ、その生活に必要な凡てを親切に與へてくれる大地とは同一である。人間のことを大地の子と云つたり、自然のことを母なる自然と云つたり、子供のことを肉體の果實と云つたりすること等の表現は、最も一般的になつてゐるシムボルが用ゐられてゐるのであると云ふ事が、極めて明かである。

祖國は人間が生れる大地の一片であつて、(祖國が我々を生むといふ事は、例へばハンガリーで『故郷（ハイマート）』の替りに Szülöföld と云ふ語を用ゐてゐるに徵しても分る)これは人間を養ひ、人間に風雨からの逃避所を與へるものであつて、人間の近親姦戀愛は直接的には遂行することを自分で許さないが、母なる祖國に對してはそれは遠慮なく遂行出來る。それ故に祖國は、凡ゆる民族の空想中に、女性として生きてゐる。例へば La France, Hungaria. 母なるロシア、Germania 等々の形を見ても明かだ。ドストイェフスキーもこのやうに祖國を女性として象徵化してゐた事は、既に述べた通り、生きながら埋められると云ふ象徵的恐怖を持つてゐたことに依つても察せられる。彼は嘗て異國からその姪に宛てた書翰の中で、外國で生活してゐるロシア人は、その母(ロシア)の横面を擲るものだと言つてゐる。人間の母に對しては注ぐことを許されざる情熱も、祖國に對してはこれを熱烈に發しても譴責もされないし、良心の苛責も感じないですむ。それ故に、スラヴ最屓であり、正敎的であり、保守的であらうとすることは、多くの人々や彼自身も信じてゐる様に、詩人が人生の悲劇的な運命によつて醇化されてこの世界觀に到達した事を意味してゐるのでもなければ、また青年時代の迷ひや混亂を經て後、政治的な聰明さを以て、ロシアの正しき道を認識した事を意味するのでもなく、彼のエディポス・コムプレクスが、その生活の凡ゆる關係に於て、またしても現はれた事を意味してゐるにすぎぬ。彼があれほどの情熱を以てその政治的並びに宗敎的意見の爲めに戰つた事は、その意見が本能感情的な無意識に根差してゐることを充分に示すものである。然し彼の世界觀がエディポス・コムプレクスと密接に關係してゐることは、細々した事柄からも現はれてゐる。

それ故に、ドストイェフスキーと彼の周圍に集つたかのスラヴ最屓の連中は、「土着派」と自稱し、この名稱

によつて見ても、彼等の愛國主義が如何に近親姦纒綿と關係があるかゞ分るのである。彼はその生涯の最後に至るまで、痛烈な憎惡を以て、西方者を、即ち自由思想を持つて、屢々外國で生活してゐるロシア人等を攻撃して「スキタルツキー」即ち根無し草と呼んでゐる。これ等の人々は近親姦願望を克服し、母に疎遠になり得る幸福な人であることを認め、ドストイェフスキーは彼等を無意識に憎んでゐる。彼は止む無く外國に滯在してゐる間に祖國に疎遠になりはせぬかと絶えず不安に驅られてゐたが、この事はやはりこの無意識的思考の道程に根ざしてゐるのである。彼の書翰にしてこの病的不安を述べてゐないものはない。で、彼が愛姪ソフヰに宛てゝ、外國生活は彼にはシベリヤへの追放よりも遙かに怖ろしいと書いてゐるのは、決して誇張ではなく、全く眞實であつたのだ。

　然しそれにしても、ドストイェフスキーがこの外國旅行を必要以上に延引させた事は人一倍であつて、この事はやはり近親姦的纒綿によつてのみ、或ひはそれの抑壓によつてのみ説明され得るのだ。彼が最後の長年の在外生活中、故國への憧憬の爲めに全くホームシックに罹つてゐたに拘らず、それでも最後の瞬間になつて尚、約束した或る土地へ旅立たうとしてゐるのである。彼が外國へ行つたのは債鬼を避けるためであつたのだが、借財のことならば他國へ逃亡しても歸國してもどうせ同様に返濟されつこはなかつたのである。その事は彼の作品のドイツの出版者が正しくも認めた通りだ。この旅行がよしんば或る程度まで理屈づけされ得、必要止むを得ぬものゝ如く思はせる事が出來ようとも、この事は、この旅行以外の旅行の場合には確かに通用しない。丁度最初の旅行の門出に際して詩人は、「ヨーロッパを信じない」と言ひ、外國は大きな一つの墓地で、また將來はロシアのものだと聲明してゐる。彼は在外ロシア人を輕蔑し、熾烈に憎んでゐる一方、この外國を又しても殆んど強迫的に訪れないではゐられなくなつてゐる。が、彼がこの外國に於いて＊天國の樣な地方に對してさへ一瞥をだに拂はなかつた事は、彼の内に抑壓されてゐるものが蘇つて來ることに基因してゐるのであるけれども、彼をかやうに又しても母なるロシアから逃亡せしめたものは、實にこの近親姦思想に對する無意識の不安である。外國で見た凡ては彼にとつては全く興味がなかつたばかりでなく、寧ろ端的に不愉快でさへあつた。彼にとつて非常に興味のあつたところと言へば、それはペテルスブルグを思ひ起させる如き所だけであつた。

註　＊天國的なところ、即ち、山水好風景の地は母胎を聯想

させるからだ。

單に彼の愛國思想や郷土愛だけが詩人の近親姦纒綿から發してゐるのではない。彼の宗教心の大部分もやはり同じところに根ざしてゐる。敎會でさへもが神經症者にとつては屢々女のシムボルとなつてゐるのである。*

註 *正敎派の敎會に對して詩人は大きな愛と强烈な興味を持つてゐたが、これまた同じくエディポス・コムプレクスに基づいてゐる。正敎派敎會の多くの高僧等は、この偏愛に於いて、父の面影として一つの大きな、然も無意識の役割を演じたかも知れないが……。小說「カラマーゾフ兄弟」のゾシマや、スタフローギンが自己の懺悔をする僧（この懺悔は今日までドストイェフスキー博物館の篋底深く藏されてゐたが、近日中に現はれる）等は父としての意味を持つてゐることは既に明かである。

三、彼の罪惡感

上述の様にエディポス・コムプレクスのために詩人は刑務所へ這入り、この同じコムプレクスや贖罪願望のために詩人はたゞに必要以上に服役したばかりでなく、這入つた時よりも比較的健康にさへなつてこの地獄を出たのであつた。この苦難の四年間を彼が如何に過ごしたかを多少なり正しく描寫する事は困難だ。詩人の鑑賞家であり批評家である或る人がかう言つてゐる。「死の家の記錄」中の水浴の插話は、ダンテの地獄の描寫と比肩し得べきものだらうと。然もこれは、この怖ろしい繪の中の最も怖ろしい部分ではないのだ。シベリヤの冬の夜長を、點火する事も許されず、何時間も〳〵睡りもせずに毒虫の蠢いてゐる堅い木床の上を轉げ廻り、幾百の營養不良の肉體の怖ろしい發散の中で、病毒の充滿した空氣や恐るべき惡臭を吸はねばならぬ。寢室の戸口には樽が置いてあり、それには囚人どもが日沒から翌朝まで大小便をするので、恐ろしい惡臭は、そこから發散するのだ。また衣服はかつて洗濯をしたことがないので、汚物や膿で硬直してゐると云ふ有様。几帳面で綺麗好きで、日々の洗濯に澤山のオー・ド・コローヌを使つたと言はれてゐる我々の詩人の如き人間が、かゝる生活を一時間でも辛抱し得たと云ふ事は殆んど信じられない事だ。かゝる苦しみが相當と思はれたところを見ると、彼の罪惡感は無限であつたに違ひない。何故なら、刑務所の長官等――その人達の間には彼に好意を持つてゐる人が澤山にゐたのだ――の記錄によると、彼は絶對に自分の服役の輕減を望まなかつたと云ふことである。ドストイェフスキーは彼の舊友で共犯者のドゥローフと同様に、オストロッグの司令官に最も熱心に紹介された。そして或る暴動

の爲めに罰せられて、こゝに職務を行つてゐる海軍候補生と共に、政治上の囚人としてこの二組の品位ある人達に對しては、能ふ限りの輕減を與へるように指定されたのである。然しドゥローフが有難がり、愛想良く、打ちとけてゐたのに、詩人はその恩惠者に對して不機嫌で、邪推的で、むつつりしてゐて、庇護や輕減を受けても決して喜ばぬので、間もなく恩惠者たちも相手にせぬやうになつた。彼は辛苦や屈辱や苦悶の杯を一滴殘さず飮み干したかつたのである。興味のあるのは彼がドゥローフに對して抱いた憎惡で、彼はそれを隱す事などは出來ずやがて沈默を守つて了つた。四年間を通じて、詩人はこの友に一言も口をきかなかつた。のみならず、記錄の中で詩人は彼の事を、たゞ「私とそしても一人」と云つてゐるだけである。彼はドゥローフの中に己れの犯行を見てそれを憎んだのだ。然も自白せられた、外面の犯行は皇帝に對する謀叛だが、そればかりでなく、かのもう一つの、無意識の、許すべからざる父殺しの犯行を憎んだのだ。

四、エディポス型の戀愛

四年の刑を終了した後、詩人の拘束は除かれたのであるが、彼の自由は、たゞ彼が一兵卒としてセミパラティンスクへ行くシベリヤ常備聯隊に加へられたと云ふだけであつた。人の影の樣に彼のエディポス・コムプレクスは彼の後をつけて、彼の一切の行爲を從來同樣に決定してゐる。つまり、彼は此處で、初めて彼に戀の何たるかを敎へることとなつた、かの婦人を見出したのである。彼女はマリヤ・ディミトリエフナと云つて、肺結核に罹つてゐて飮兵衞である同僚の妻であつた。詩人はこの同僚を陸軍學校時代から知つてゐる筈である。詩人を餘りに崇敬してゐる傳記家達は、詩人の人間的弱點を表明するかゝる秘密を、彼の生活から白日中に曳出すことを恐れてゐる。で、精神分析者に取つて興味深いこの結婚生活に關して、我々が言はゞ全く何事も知らず、大部分は想像へと向はざるを得ないのは、その責この傳記家たちに歸せられる。ヴランゲル男爵——詩人はマリアとの熱愛時代にこの男爵と共同生活をしてゐた——の記錄は我々に、不充分ではあるが二三の暗示を與へてゐる。第二の結婚によつて生れた彼の娘は、詳細に報告してはゐるが、勿論この稀な關係に就いてはこれまた同樣客觀的ではない。この關係を理解するには、小說「虐げられし人々」中の自叙傳的な個所が最も參考になる。

詩人がこの婦人と戀に陷つた時、彼女は一友人の妻であつて、自由の身でなかつた事、そして彼女は詩人と知

合つて以來、終始自由でなかつたこと、つまり、この時から死ぬまで彼女は常に詩人にとつて嫉妬の原因を具へてゐた事は、精神分析者には無意味ではないだらう。詩人が彼女を知つた時、彼女は夫の他の友人と戀に落ちてゐた。そして詩人の妻となつても彼女は、詩人の娘の言によると、一家庭敎師と長年の關係を續けてゐた。彼女の第一の夫が酒癖と、その爲めに悪化した肺病の爲めに死んだ後、詩人はこの寡婦がその愛人と、卽ち彼の戀敵と結婚出來るよう、不思議にも人力の及ぶ限り盡した。詩人は近親者や勢力ある知人等に迫つて、彼女が彼の戀敵の方へ轉じて行くように、彼に良い生活狀態を世話してやり、マリヤ・ディミトリエフナとの結婚を可能にしようと努めたが、一面では謂れない嫉妬に身を焦した。その骨折も效なくこの結婚が成立しなかつた時、彼はこの寡婦を物質的困難から救つてやる爲めに結婚した。

我々はフロイドが「戀愛心理論」*の中で、エディポス的戀愛者の特徴として擧げてゐるものを、この戀愛の中に見出す事は困難でないだらう。就中、戀愛對象が他人に所屬してゐなければならないとしてゐる點を‥‥。マリヤ・ディミトリエフナは詩人との戀愛及び結婚中、他の男に屬してゐた。最初は夫に、次は戀敵に、最後に戀人に、然し詩人自身には一瞬間も屬さなかつた。「憤る第三者」がなければならないとの戀愛條件が、この戀愛事件の中に完全に滿されてゐるのを見る。同樣に嫉妬——嫉妬の情熱に就いてはヴランゲル男が詳細に述べてゐる——と云ふ條件や救助願望の條件も‥‥。就中、詩人が二番目の妻君の愛人に職を世話をしたその骨折は、この項に相當してゐる。また彼は婦人ばかりでなく、その小さい男兒をも、文字通り飢死から救つてやつた。また最後に、マリヤ・ディミトリエフナの自由な突飛な性質が、ヴランゲル男の語つてゐる樣に、シベリヤの小都市に蔭口の動機を尠からず提出し、またアイメー・ドストイェフスキーによると、家庭敎師との戀愛關係を町中知らぬ者はなかつたさうであるが、その彼女の名譽をも救つてやつた。興味ある事は、詩人が一般の近親姦的戀愛者と同樣に、マリヤ・ディミトリエフナのその時々の言はゞ正當な所有者に對して、何等の嫉妬も感じず、無意味な機會に、病的な嫉妬に焦された事である。「我々は二人とも非常に不幸であつた」と詩人はその結婚に就いて、親友のヴランゲル男に語つてゐる。「が、我々は不幸になればなる程、益々離れる事は出來ない。何故なら我々は底まで愛し會つたから‥‥。」と。然しこれ等凡ての戀愛條件を見ると我々は、この戀愛が近親姦的なもので、愛人は母の面影であつた事を知るのだ。この嫉妬

の中に詩人は、子として父に對して覺えた嫉妬をそのまゝに經驗した。同時に憤る第三者は、これ等の永久の競爭に於ける無意識の勝利を意味してゐるのだ。

註 *フロイド全集第九卷大槻氏譯「分析戀愛論」（一一六四頁）參照。

アイメー・ドストイェフスキーは、父の最初の妻がナポレオンの奴隷の娘で、詩人に對しては燃えるやうな憎惡を抱いてゐたと言つてゐる。在來の家庭の傳統によつて、彼女は物質的窮乏から保護を受ける爲めに父と結婚したのだが、詩人は何にもならなかつたので、愛人と共に彼を無慘に嘲弄した。その愛人とは上述の家庭教師で結婚以來町から町へと、まるで犬の樣に彼女を追つて旅をした。然も詩人の追放も終りをつげ、彼はアレクザンダー二世の特別の恩惠によつて、モスカウとセント・ペテルスブルグとの間のトヴェールに定住する事を許された時、家庭教師は彼等を追つて其處へ行くことゝなつた。詩人はこの家庭教師を良く知つてはゐたが、この關係に就いては少しも感づいてゐず、一つの瞞着に就いても考へた事がなかつた程、彼を何とも思つてゐなかつたさうである。彼の妻は亢進して行く肺結核の爲めに、極度に激し易い氣持になり、病氣の爲めに魅力を失つて愛人に棄てられた時、この激し易い氣持は絕望に變化し、流石に鈍感な御亭主の眼をさへ開くことになつた。せつぱ詰つて、彼女は夫に長年の瞞着を輕蔑と嘲笑を以て告白した。それに拘らず詩人はこの暴露の後にも、夫人に對する態度を決して變へなかつたと云はれる。それからずつと後、出版上の仕事でセント・ペテルスブルクへ是非とも行かなければならなかつた時、初めて彼は、あれ程大きな苦痛を與へた妻と離れたのである。「彼の心臟は張裂けむばかりであつた」と詩人の娘は書いてゐる。「然し自分の姓を名のつてゐる彼女に對する義務感は變らずにゐたのである。然しその義務感はマリヤ・ディミトリエヘナの武裝を解除しなかつた。彼女は黑人の女でゞもなければ知らない樣な容赦なき憎惡を父を向けた。彼女を看護した人々は後にかう告げてゐる。彼女は長時間苦しさうな凝視に沈んで肘掛椅子にじつと動かずにゐた。それから突然立上つて、熱病の樣に家の部屋々々を横切つて行つた。居間に行き、詩人の像の前に立ち止つて、それを長い間見つめてゐたが、掌でそれを威嚇し乍ら、罪人め、不名譽な罪人めと叫んだ。彼女は全く疲勞し切るまでかゝる振舞をつゞけた」と。

さうアイメー・ドストイェフスキーは語つてゐるが、精神分析は「黑人の女の怖ろしい憎惡」と云ふ報告だけでは滿足せず、かう質問を發するだらう。何故に一人の

妻が、自分ばかりでなくその小さい男兒までも文字通り飢死から救つてくれた夫に對して、その樣に怖ろしい憎みを向けねばならぬだらうか？　當時既に全ロシアが單に大詩人としてばかりでなく、言はゞ豫言者として讃えた彼を、何故に彼女は侮辱せねばならぬか？　マリア・ディミトリエフナはセミパラティンスクで、瑣事や社會的な考慮などは高く超越した、精神と文化の貴婦人を氣取つてゐた。そして彼女は、詩人がまだ一兵卒で、だから彼女の夫の多くの上官達がこの親しい交際を非難した時、見えを以て詩人と交際した。當時彼女が世の偏見を高く超越してゐたのなら、後に詩人が全ロシアからのみならず、皇帝からも高い尊敬を拂はれるやうになつた時詩人を罪人と罵つたのは如何にもをかしい事だ。家庭敎師との關係が、既に最初から存在してゐたのなら、何の理由あつてか夫を怖ろしく憎んだのか？　フランスの多くの喜劇から我々は、三人結婚が最惡のものでないとの平凡の眞理を、饜きる程知つてゐる。彼女が家庭敎師に棄てられた後、憎惡を夫に向けたのは、これまた筋が全く徹らぬ。憎惡を向けるなら、精々、不信な愛人の像に對してすべきではないだらうか。彼女の態度は、アイメー・ドストイエフスキーの說明では全く理解出來ない。夫を愛してゐて、然も嫉妬の根據が有るか、又は有ると妄想する人妻ならば、或はさう云ふ態度をとるであらう。何故なら、憎惡は愛の裏面にすぎず、女性は嘗て愛した人だけを憎み得るのだからだ。では輕蔑は？　政治的違反の爲めにその夫を侮蔑すると云ふ事は、マリヤ・ディミトリエフナの如き氣質や性格の妻には確かに思ひも及ばぬ事であらう。然しかゝる妻は、同棲に依つて性的滿足を與へてくれぬ夫を輕蔑はする。嫉妬の理由は彼女には充分にあつたかも知れぬ。確かに詩人は、妻の死ぬ前長い間殆んど專ら、ペテルスブルグで暮した。そこに於いて、アイメー・ドストイエフスキーの所謂パウリン・Nと云ふ若い女學生と知合つて、二人の間は忽ち熱烈に燃え上つた。そして彼は妻の（言はゞ）最後の月を女と過す爲めに、女を追つて外國へと旅立つた。だがこの場合には詩人の害された虛榮心が一つの役割を演じてゐたかも知れぬ。何しろ詩人には近親姦的定着のあつたことが考へられるし、又彼が性的慾望に驅られる時は精神的に愛さず、精神的に愛してゐる時は性的に慾望しなかつた人である事が考へられるし、又更に彼が夫人との關係に關して、ヴランゲル男に宛てゝ、彼等二人は深く不幸であるが、然し決して互の愛を中止する事は出來ないと云つた言葉が思ひ起されるからだ。尙最後に、マリア・ディミトリエフナは先夫との間に子が生れ、詩人の

方にも第二の結婚に依つては子供が出來てゐるのに、詩人とマリア・ディミトリエフナとの間に子供のなかつたところを見ると、我々は黑人の女のやうなわけの分らぬ憎惡の背後に、何か悲劇的な家庭の秘密を想像しずにはゐられない。マリア・ディミトリエフナが詩人の母と同じ病氣に罹つて死んだ事、然もその時ほゞ同年輩であつたらしい事は、この家庭悲劇を理解するに就いて我々を迷はさぬであらう。詩人の雜誌仲間ストラーホフは、詩人の最初の妻が肉體的に纖弱で病身であつたと書いてゐるが、この事は詩人の母に就いても同樣に言はれる。またリーゼンカムフ博士は彼女を思ひ出して、自分の家を住心地良く作る事を心得てゐる善良な家庭婦人だつたと言つてゐる、卽ちそれは母の特質でもある。これ等凡てが恐らく一緒に働いて、それが詩人の近親姦恐怖を目醒めさせ、結婚生活の調和を破壞したのかも知れぬ。この事は、上述の批評家ストラーホフがこの期の詩人の性生活に關して書いてゐる事と、恐らく一致するであらう。

ストラーホフは詩人が如何なる世界觀を持つてゐたかを說き、その世界觀が人間の弱點への許容と理解として說明してから、かう斷定してゐる。「かくて私が加つて行つた文學者仲間（といふのはドストイェフスキー兄弟が、マリア・ディミトリエフナの重病の時に出版した雜誌の協力者たちの事だ）は、私の見る所では、多くの點で人本主義の一派であつた。然し私を殊に驚かしたも一つの特徵は、私の見解との遙かに大きな隔りを現はしてゐた。この仲間に於ては、肉感的なものに於ける墮落、のみならず放縱を別に何とも思つてゐない事を知つて、私は呆れたのだ。これ等の人々は道德的關係に於いては非常に敏感で、思想の調子が最も高く、大抵は放縱な心理とは緣遠い人々だが、然し彼等は凡ゆる放埒に對しては注意が全く冷淡で、その話をまるで、馬鹿げた冗談や無益な細事に就いての樣に氣輕に話し、寸暇をさいてそれに身を委ねるのもよからうと言つてゐる。精神的な卑猥は嚴格に銳く譴責されるが、肉的な卑猥は大體問題にされない。肉をこのやうに特殊に解放した爲めに誘惑的な作用をなし、或る場合には考へるだに苦しく怖ろしい結果を惹起した。私が文學上で協同の仕事をしてゐた間、卽ち一八六〇年代に知つた人達の中、二三の人々はそんなに瑣細に見えた精神的罪惡のために死んだり、發狂したりするのを私は見た」。

ストラーホフは、この仲間の精神的中心であり指導者であつた詩人が、かゝる放縱を言はゞ單に理論的に是認したゞけか、或ひはそれを實行したかどうかに就いて

は、全然語つてはゐない。然しどうやら實行もしたらしく思はれる。と云ふのは、ストラーホフはこれに關聯して更に二三行、詩人の行爲や思想の中に現はれてゐた矛盾に關して述べてゐる。この矛盾は彼の魂の深奥に於いては調和となつてゐた。そして多くの場合、誤つた、變態的な方法の前に彼を抑止したのであつたと……。

小說「虐げられし人々」は作者の最初の結婚を詩的に描寫してゐるが、そのエディポス・コムプレクスとの格闘をも描いてゐる。ナターシャと云ふ人物には最初の妻マリア・ディミトリエフナがそのモデルになつたのだそうである。この小說の中で詩人が自分に與へてゐる幾分をかしな姿や、性的熱望なくして愛する守護の天使の役割は、エディポス・コムプレクスに、卽ち抑壓された近親姦願望に基いてゐる。

上の凡てから見て、詩人の戀愛選擇を決定したのもこのコムプレクスである事が分るが、またこのコムプレクスの爲めに普通の性生活の遂行を防げられ、かくて結婚は失敗したのである事が明かだ。旣に述べだパウリン・Nとの戀愛關係は、上述の初戀と同じ特質を示してゐる。此處でも愛人は一人身でなかつた。この若い女學生は長い間この有名な詩人の寵愛を得ようと努めたが、效果がなかつた。詩人は彼女に父の如き好意と關與を示したが、情熱的なこの娘にはそれでは滿足が行かず、長い間の躊躇にあきて、速かに意を決してパリへ旅立ち、そこで若いロシアの學生と知合を結んでから、詩人との絕交を彼の地から通告した。近親姦の定着を受けてゐる詩人の嫉妬は、この手紙によつて目醒まされ、「憤る第三者」と云ふエディポス的戀愛條件が滿されてから、彼の愛は炎々と燃え上つた。大急ぎで荷物をまとめ、旣に死の病床に横はつてゐる妻の事も氣に掛けず、あれ程熱心に自分の全活動を捧げてゐた新聞にも振り向かず(以前に彼はパウリンに對して、外國へ旅立ちたいが、新聞のために遲れるのだと告げてゐた)、また勿論大金を要するこの旅のために、今ごろ中止したのでは新聞も駄目になるだらうし、從つて彼自身も、熱愛してゐる兄弟とその多數の家族も、破滅に陷るだらうと云ふやうな事は問題にならなかつた。彼は日夜不休の旅を續けて、愛人のもとに達し、彼女に願ひ、嚇し、遂ひに說得して、再び自分に彼女の愛を向けさせた。そして、あれ程彼の熱望してゐた事が遂ひに到達されて、パウリンが詩人と共に行く爲めに愛人を棄てた時、二三ケ月すると、彼はこの情熱から冷めて了つた。嫉妬と憤る第三者との戀愛條件がなくなるや否や、この盲目的な情熱も亦消え去るのである。面白い事には、この乙女も亦身持ちは評判の良く

ない方で、勉學はたゞ自由な生活を送らうための萬年學生の典型的な女學生であつた。

五、彼の結婚生活

詩人の第二の結婚は全く幸福であつたと言はれる。彼の妻は生れつき非常に實際的な頭を持つてゐて、夫のもつれた金錢關係を整頓し、彼の作品を速記し清書し、彼のために色々の厄介事を除いてやつた。然しこの結婚生活の當初にも、詩人のエディポス・コムプレクスは暗い影を投げかけた。ヨーロッパ滯在から書き送つた手紙の中で詩人自ら、彼の妻は、彼の性格の缺陷の爲めに非常に惱まねばならなかつたと書き添へてゐる。アイメー・ドストイェフスキーも、初めの頃の色々な困難に就いて語るべき多くを知つてゐた。それによると、詩人はその近親者に刺戟されて、彼の妻が餘りに若すぎて無智で、自分の考へや心配を分つ事は出來ないと思つたさうだ。（彼の妻は非常に若かつたので、彼女に母コムプレクスを轉嫁することが妨げられたらしい。）詩人の兄弟の家族は彼の家の中でのさばつてゐたので、若妻は主婦としての地位、夫の心の中での地位を彼等と競爭した。借金の重荷と、將に迫つてゐる零落のために止むを得ず彼は外國へ旅立ち――この旅を賢い聰明な若妻は百方力を盡して助けた――そのために詩人はこの係累から次第に遠ざかつた。然し長年の結婚生活の後でさへも、いろ〳〵の故障が起らねばならなかつた。アイメー・ドストイェフスキーの物語つてゐるドレスデンでの小挿話は、意識心理學者の眼には無意味に見えようが、精神分析者には大きな推定を可能ならしめるであらう。卽ちドレスデンで詩人は第二子の誕生を役所に報告したさうである。ドイツ風に杓子定規で官僚的なこの地では、勿論家族關係に就いて委細を尋ねたが、かゝる無用の杓子定規を少なからず不快がつてゐた詩人は、妻の里の姓に對するドイツ官吏の質問など思ひもしなかつた。彼は失念してその姓を思ひ起す事が出來なかつたので、ドイツ人のかゝる要らざる質問に腹立ち乍らも、家へ歸つて妻に尋ねるより外なかつた。ドストイェフスキー家の家族の思出に於けるこの小挿話は、二三のこれと似た挿話と共に、天才の特殊な放心狀態の徵候と看做される。この放心狀態の徵候としてアイメー・ドストイェフスキーは語つてゐる。詩人が街角で妻に物乞ひをされた所、餘りに氣前良い詩人は、相手の婦人が自分の妻だとも知らずに、彼女に施しをしたと。フロイドの「日常生活の精神病理」に就いての研究以來、精神分析者が一般に忘却や行り損ひの傾向を評價したと同樣に、詩人の夫人もこれを知つてゐた

ならば、彼女自身に就いてのこれ等二つの小挿話を、全然有難がつてばかりはゐられなかつたであらう。

六、貧困と肛門性感

然し妻の母親的特徴が詩人の第二の結婚とどんな關聯をなしてゐたにせよ、この結婚はかなり幸福であつた。一方、寄る年波と詩的製作とは、彼のエディポス・コムプレクスの强さを次第に弱めて行つた。父の尊嚴は我々の詩人にとつては、常に深い喜びの源泉となつてゐた。この深い喜びは、父とのこの無意識の同一化に基いてゐたのである。アイメー・ドストイェフスキーも、父との散歩や、教會行きや、祈禱や、夕べの朗讀を語つてゐる。詩人は父が彼にしたとそつくりその儘の方法で、自分の子供等を敎育した。

詩人の晩年が著しく平靜になつた事は、彼の益々大きくなつて行つた詩的名聲は別として、大部分は夫人の經濟的才能のためである。詩人が生涯それと戰つた金錢上の困難な狀態を知つてゐる者のみが、かゝる經濟事情好轉の意味を察し得るだらう。「彼が世の光を認めた時」と彼の傳記家の一人は言つてゐる。「まづ目に留つたのは父の勤めてゐた病院の貧しい人々であつて、この瞬間以來、貧困は彼の踵に從つて、生涯に亙る忠實なる同伴者となつたのだ」と。この樣にして、彼の全生涯は言はゞ唯一つ金錢への狂暴な追獵であつたと言へる。だから數字の列や計算で充ち滿ちてゐる彼の手紙や、金への絕望的な（然も屢〻なる）請願を讀む時、人々は彼が金を並々ならず重大視してゐた事、のみならず、それを愛してゐたと云ふ事を考へざるを得ない。然し、彼の娘は旣に、父のこの金錢上の困却が大部分は自業自得であつた事を我々に注意させてゐる。彼女は詩人の餘りに物惜しみせぬ性格にその罪を歸して、家庭間や友人間で人々は彼を金いぢめだと呼び慣はしてゐた事に、筆を及ぼしてゐる。

メレジュコフスキーも偉大な慧眼を以て、詩人の非常な貧乏は、彼には大變苦しかつたかも知れないが、外的な偶然よりも、彼の最も深い本質に基づいてゐた事を認めてゐる。精神分析はこの假定を是認して、金の評價は實際人間の最も深い本質から、つまり彼の無意識から、換言すれば彼のリビドーの肛門性感的な部分本能から發する事を示してゐる。浪費癖やだらしのない事は肛門性感者の特性である。だが一方貪慾や杓子定規や剛情は、その肛門性感を昇華され或ひは醇化せられた所の肛門性感者の特性である。詩人の肛門性感者的特性に就いては我々は熟知してゐる。彼は生涯執拗な便秘に惱み、それ

が屢々彼の歎きの理由となつた。ペーダー・パウル要塞の禁錮中に、彼の言はゞ凡ての神經上の病苦は減少した。「私はやはり蓖麻子油だけで生きてゐるのだ」と彼が書いてゐるあの便秘までも。絶えず彼は痔疾を歎いてゐる。兄ミハイルの言によると、フョードル・ドストイエフスキーは自分の持物を、金であらうと、衣服であらうと、下着であらうと、或ひは他の有用品であらうと、何程あるか、何があるかを決して知らなかつたと云ふ事である。リーゼンカムフ博士は彼にドイツ風の几帳面さと正確さを若干與へようと骨折つたが、駄目であつた。彼の云ふところに依ると、詩人はかなり重要な收入の口にありつく事が出來たけれども――即ち彼の後見人はかなりに規則的に、相當な金額を彼に送つたけれども――やはり絶えず困つてゐた。彼は要る物や要らない物に對して一日に二千ルーブルも支拂つて了つて、翌朝はもう屢々五ルーブルの借金を彼に賴んだと。詩人が最初の小説以外は、豫め稿料を取らないものは決して書かなかつた事實も、この肛門性感の項に屬する。彼は或る惱みを以て自分の作品に前借をした。彼はその作品を長い間計畫し、然も適當な時に殆んど決して引渡さなかつたのである。彼は頭の中では完成してゐる作品と、云はゞ別れがし難いのであつて、その爲めに屢々出版者を絶望に陷らせたのである。ストラーホフは友のこの特性を述べて天才の怠惰だとしてゐるが、我々はその中に肛門性感的な特徴を認める。詩人のこの肛門性感は彼の作品の中に屢々明かに表はれてゐる。例へばアリョーシャ・カラマーゾフと僧院全體が、ゾシマの(父の)屍が腐敗して怖ろしい屍臭を流した爲めに、一部分は絶望し、一部分はこの不幸に活潑な喜びを感じた場面や、又カラマーゾフの父殺しの名はスメルヂャーコフと云つたが、それはロシア語で同樣に「臭い男」と云ふ意味であると云ふ事の中に明かである。

七、賭博癖

詩人の四、五十歳の間に起つた甚だしい賭博癖の發作は、このコムプレクスで説明される。この發作は單に金錢慾に根ざしてゐるのではなく、無意識の決定要素を持つてゐる事は明かだ。この發作は彼を非常に下品な絶望的な生活狀態に落し入れたので、この發作の病的であつた事は疑ひの餘地がない。それ故彼は更に當て、バーデン・バーデンで金を悉く失つて了つて、友のマイコフに手紙を書いてゐる(一八六七年)。「私は貴方にだけこれを書くのですから、世の普通の判斷で見てくれるな。バーデン・バーデンを通過した時、此處に立寄りたくなり

ました。十ルイドルを犧牲にして、その替り二千フランクを儲けようと云ふ誘惑的な考が私を惱ましました。最も惡い事には、私は以前時々儲けてゐたのです。尙更にいけない事には、私は卑しい、然も非常に情熱的な性質を持つてゐたのです。惡魔が直ぐ樣惡戲をしかけました。二日の中に珍らしく容易に四千フランクを儲けました。然し要は賭博そのものにあつたのです。否、私は誓ひます、それは單に射利心ではなかつたと。で、私は更に賭けました。そして失ひました。私は自分の着物を、アンナ・グリゴリエフナは彼女の持物を凡て質に入れました。あれは何といふ天使でせう。」

續いて彼は金の無心をしてゐる。「私を見棄てゝくれるな」と彼はこの手紙を結んでゐる。「神がその酬ひはしてくれませう。一杯の水を以て、荒地に衰てゐる魂を霑はせて下さい。」この告白に於いて我々の興味は就中、金に對する相反並存的態度に向けられる。またしても彼は金を窓外に投げ棄てゝは、再びそれを貪慾に追ひかけ回はすのである。彼はそれを全く下等な未知の人に贈つて了つて、そのあとで經濟狀態のあまりよくもない(ことを自分でもよく知つてゐながら)友にねだるのである。然し彼は屢々卑屈な能辯を以て、殆んど腹這はむばかりの卑下を以て、未知の人に乞ひ求める。「惡靈」のフェブチャドキンや「罪と罰」のマルメラードフの樣な全く自尊心を失つた人物に、彼はその手で懇願をさせてゐる。それ故にこの飮んだり打つたりする人間、これ等の(彼の所謂)「不幸な人々」は、彼自身の「困つた、卑しい性格」の片割れである。

金に對するこの相反並存態度の中に我々は、エディポス・コムプレクスから發してゐる無意識的願望の實現を見る。詩人が前借なしには決して書かなかつたと强調してゐる事、それから出來た作品を出し澁りきちん〳〵と渡さなかつた事、また借金とその上金儲けが好きであつた事等は、金の無意識の解釋と聯關を持つてゐる。金は成人者には自己の慾求を滿す手段として、從つて權力手段として尊重される。然し金の評價は、子供や我々の詩人の如く、この方面に於ては幼兒性を保留してゐる神經症者にあつては、異つてゐる。子供は自分に與へられる以外の金の事は何も知らぬ通り、金と贈物とは同じものとして概念してゐる。贈る事自身が、對象愛の爲めに自己戀慕(ナルチスムス)から强奪せねばならぬ行爲である。子供の養育者への最初の贈物は、彼の糞便である。それを子供は快感を得る爲めに保留しておきたいのであらう。氣前良さ、乃至は物を欲しがること、金を費はない樣にする事などの根柢には、つまり、金・卽・糞と云ふ無意識の平等化

が横はつてゐるのだ。母から子供を持つと云ふ事（或ひは母に子供を生ませる、贈ると云ふ事）は、神經症者の最も古い幼兒的願望に屬する。かくて今述べた金・卽・糞と云ふ無意識の平等化に對して、第三階段として子供が加はる。故に母に依り子供を持つと云ふこの無意識の近親姦願望は、甚だしい賭博癖や、勞力なしに金を得たい（本來は贈つてもらひたい）との願望の背後に潛在し易いのである。

然し詩人の意識的に氣前良くしてゐた事は、父に對する反抗と結びついてゐる所の前意識的思考に基づいてゐる。彼は、父の過度な貪慾の素質を受繼いでゐる樣に見えるが、息子の强情はそれを浪費癖に變へた。然しこの强情それ自身が肛門性感的な特性である。この特性を詩人のみならず、彼の妹バルバラや、父方の他の近親者もやはり受繼いだらしい。この場合のこの病的な素質は周知の事であるが、然しこの病的な性向もエディポス・コムプレクスの中へ流れ込む。

八、口唇性感

强度の肛門性感と同樣に、口唇帶域のより强い性的快感も受け繼いでゐる。詩人の父以外に二人の兄弟、既に屢ゝ述べた長兄ミハイルと末弟ニコライも、酒癖に惱んだ。我々の詩人自身は非常に節制的で、彼はアルコールとは非常に仲惡で、そのかはり甘いものが大好きであつた。この特性はアイメー・ドストイェフスキーも作家ストラーホフも氣づいてゐる。彼は常に無花果の實や、棗椰子の實や、果物煎餅やその他甘い物を澤山戶棚の中に藏つておいて、一日中それを味つてゐたさうである。强い茶や黑いコーヒーへの偏愛も口唇性感と關聯してゐる。この事はドストイェフスキーの文學の特徵的な性格を理解させる。彼の主人公等は元來決して食事をしない、少くとも普通には食はない。彼等は全く疲れ果てゝ腹が空いたと思ふと、どこか汚い飮食店で少し許り喰べるだけだ。然し彼等はその他では、專らコーヒーや茶のやうな嗜品好を取る。その上非常に愛煙家である。我々の詩人自身强い喫煙家であつた。

九、窃視慾と露出慾

かくて、詩人の精神生活に於ける凡ゆる倒錯はかなり實證し得たから、我々は、積極的な又は消極的な窃視慾の衝動が彼には無かつたかどうかを尋ねよう。さうしたものは何等彼の口からは語られてゐないけれども、たゞ彼の娘は我々に、彼の性格とは良くは調和しない特徵を告げてゐる。卽ち、彼は立派な着物が好きで、然も非常

に注意して着た。自分の衣服を常に自ら非常に念入りにブラシを掛け、手入れをして、それが何時までも新らしく見えると嬉しがつたと云ふ。然しこの綺麗でそして立派な着物を着たがることは、精神分析的な經驗によれば、露出的傾向の抑壓の結果である。彼の作品の二つの特色も同樣に、彼が積極的な又は消極的な强い窃視慾を抑壓し、或ひは昇華してゐる事を我々に感じさせる。就中、彼の作品の中では自然が、ほゞミケランジェロの作品に於けると同樣に、僅かの場所しか取つてゐないと。自然描寫は彼には全く珍らしい。長年の外國滯在中でも、自然には殆ど頓着しなかつた。イタリーやスキスの魅力的な地方や、ライン地方は、彼には殆んど一瞥の價値もなかつた。彼がこの地方を手紙に述べる時、彼の歡喜は全く世間普通のもので、一地方が彼の興をひくのはたゞそれが彼に母なるロシアを、或ひは退屈な荒涼たるペテルスブルグを思ひ起させる限りに於いてゞある。ストラーホフは詩人と共に行つた詩人の最初の外國旅行に就いて、彼等が大抵はカフェーの中に坐つて、ロシアの雜誌を讀んだり、人々が不思議がつて彼等の方を振り向いた程聲高に政治論をした事を語つてゐる。フローレンスで詩人は日夜ヴィクトル・ユーゴーの「レ・ミゼラブル」一を讀んで暮らした。ウフィツィーのギャラリーを唯一回だけ見たが、間もなく退屈を感じたので、彼等はメディシのヴェヌスは全然見なかつた程である。そのかはり彼等は市中を散歩するのが好きであつた。この町はフョードル・ミハイロヴィッチに、ペテルスブルグのファンタンカを思ひ出させたのである。自然とそれを模倣した藝術には、詩人は非常に僅かしか興味がなかつた。我々は精神分析的經驗から次の事を知る。卽ち、畫家に於いては人體の表現への熱望は、母體との活動の代償として役立つものであり、またこの慾望の强い抑壓は、人體の描寫慾の轉位を自然一般の上に轉化するものであると云ふ事を。一詩人に於いて、自然描寫及び自然美に對する彼の興味が、大體に著しく乏しいのを見出すならば、窃視慾が大いに抑壓されてゐることを常に想像するのである。ドストイェフスキーに於いては、窃視慾も、抑壓された暴露快感も、素裸の魂の描寫の中に、また彼の魂の描寫の偉大なる主觀性の中に昇華されて現はされてゐる。それ故にストラーホフもこれを正しい本能によつて認めて、詩人が自己の內的な精神生活を如何にさらけ出したかを氣附かなかつたらしい事は、眞に幸福であつた、何故なら、さもなくば彼にはこの事は出來なかつたであらうからと言つてゐる。

かくの如く我々はこの大詩人の生活を、精神分析的研

究の光に照らして觀察する時、我々は、詩人の性格は父への關係によつて特色づけられ、彼の運命と體驗はたゞに彼のエディポス・コムプレクスによつてゐるばかりでなく、言はゞたゞ一にこのものによつて決定されたのである事を見出す。例錯と神經症、病氣と創造力、本質と特性、凡てを我々は兩親コムプレクスの上へ、實にこのコムプレクスだけの上へ還元する事が出來た。人間の魂の最も隱密の活動をその作品で照明したこの大詩人は、彼自身永久の子供で、その魂は、父に對する愛と憎みの間を、尊敬と輕蔑の間を、また犧牲の喜びと殺人願望との間をあちこちと引摺り廻はされるのであつた。彼が魂の活勤に就いて語らうと、或ひは感情に就いて、愛國心に就いて、或ひは宗教に就いて語らうと、彼の感情、思想、認識、凡てが彼のエディポス・コムプレクスに基づいてゐるか、又はそれに流れ込むのである。人間の運命はそのエディポス・コムプレクスだと我々は言ひ得る。況んやその人が、ドストイェフスキーのやうに詩人で神經症者である場合には、その運命は、尙更このコムプレノスに依つて決定されるのである。(未完)

『孤獨地獄』の精神分析

石井佐太郎

緒言

芥川龍之介の「孤獨地獄」は大正五年四月の「新思潮」誌に發表されたもので、卽ち芥川の二十五歳の時の作である。氏獨特の短篇物で、引證の點などから其後有名になつた作品で、これを俎上に載せた批評家も多く見受けられた。私は科學者として分析的見地から興味深く覺ゆるが故に、今こゝに主觀的立場も多少混えて論じ、所謂「孤獨地獄」なるものの本體に觸れて見ようと思ふ。

一

孤獨地獄とは、同小說に依れば——

『佛說によると、地獄にもさまぐ\あるが、凡先づ、根本地獄、近邊地獄、孤獨地獄の三つに分つことが出來るらしい。それも大抵は昔から地下にあるものとなつてゐたのであらう。唯、その中で孤獨地獄だけは、山間、曠野、樹下、空中、何處へでも忽然として現はれる。云はば、目前の境界が直ぐそのまゝ、地獄の苦艱を現出するのである。（中略）一切の事が少しも永續した興味を與へない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追つて生きてゐる。勿論それでも、地獄は逃れられない。さうかと云つて境界を變へずに居れば、尙苦しい思ひをする。それでもやはり轉々として その日のぐ\苦しみを忘れるやうな生活をして行く。しかし、それもしまひに苦しくなれば、死んでしまふ外はない。』云々。

又

『津藤の言葉として「これは嫖客のかゝりやすい倦怠（アンニュイ）

だ」と解釋したりしてゐる。』
と説明してゐる。これは芥川が作中の僧侶禪超をして語らして居る語である。芥川はこれは勿論小説の貌ではあるが、決して自分が勝手に空想したので無いと言ふ事を大童になつて辯明してゐる。卽ち作品の冒頭に、

『この話を自分は母から聞いた。母はそれを自分の大叔父から聞いたと云つてゐる。』

而して母とは芥川道章氏の妻儔(トモ)であり、大叔父とは津藤藤次郎、森鷗外の考證の「細木香以」であると説明して居る。このやうに考證を正しく示す所に芥川の作品の一特徴があるが、又分析的に言はば、この物語が決して自己の架空的噓構では無く、自分に傳つた道筋がしつかりしてゐて、途中で歪形を受けたり、誇大化されたもので無いと、力強く讀者に響かせる役目を務め居る。それだけに如何に作者が孤獨地獄に對して關心を持つてゐるか、換言すれば、二十五歳の作者が如何に孤獨に苦しめられたかを力強く訴へて居る譯になる。芥川はこの作品に於いて自分の主觀を次の如く述べて居る。

『一日の大部分を書齋で暮してゐる自分は、生活の上から云つて、自分の大叔父やこの禪僧とは、全然沒交涉な世界に住んでゐる人間である。又興味の上から云つても、自分は德川時代の戲作や浮世繪に特殊な興味を持つてゐる者ではない。しかし、自分の中にある或心もちは、動もすると孤獨地獄と云ふ語を介して、自分の同情を彼等の生活に注がうとする。が、自分はそれを否まうとは思はない。何故と云へば、ある意味で自分も亦孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである。』

此の文章に依れば、所謂禪僧の言葉を幾分超然的に批判し、見下して居るやうであるが、芥川が最も高き意味のインテリゲンチアであり、最も纖細な理智的神經の所有者であつた事に思ひ至らば、この一作品が芥川の精神を現はしてゐる事を知るのである。卽ちこの作品が物語つて居る語は「作者たる私は所謂孤獨地獄に最も苦しめられてゐる」との芥川の主觀である。

二

以上の主觀を分析して行けば、芥川の自殺の理由がはつきり解るかも知れない。が、私は今こゝでそれを論ずるのが目的ではない。芥川のこの作品に於けるは長日月に亙る所謂孤獨地獄であるが、これと一脈相通ずる私の經驗を述べたい。

十七八歳の秋のよく晴れた午後、大ぜいと松茸狩に行く途中に、何の深い考へも無く、譯も無く寂しくなる感

情を私は一友に次のやうに語つた。

『君、今から百年も二百年も經つてだね。ひよつこり昔の儘の頭や考へを持つて、此の地球に生れて來たとしたらどうだらう。誰一人として、自分を知らないのだ。丁度浦島太郎が龍宮から歸つた時のやうに、皆珍らしい人が來たと云つて眺めて居る。勿論驚くべき發達した文明は既知の己れの文明の影をさへ留めぬであらう。幸ひ自分の子孫を見つけても四代も五代も後で、そんな人が居ましたかと言ふ位の關心しか持ち合はない。さうだつたらどんなものだらう。寂しいだらうね。生れて來ない方を望むだらうね。』

と快活に話した。其友人は極めて神經質で、物に感じ易い性格であつた。「さうね」と考へて居るやうであつたが、暫くして大變悲しそうな顔をして歎息しながら、

『あゝ歩く元氣も無くなつた。松茸狩にも興味を持たない。又何の爲に勉强するのか其意味さへ解らなくなつた。』

と云つて殆んど歩くにも堪えない樣子であつた。其後、私は時に一種變つた寂しい氣分に襲はれる事があつた。其氣分に於いては只慰めやうも無い孤獨感であつて、社會の名譽や金や戀愛を持つて來ても何等の意味が無いやうに思つたのである。二十歳頃に芥川の「孤獨地獄」を始めて讀んで、其の說く所に多くの共鳴を感じた。

後に記す如く、所謂孤獨地獄とは人間の陷る一つの氣分（ムード）であつて、芥川の小說の中に描かれてゐるのは長日月に亙る孤獨地獄の事であるが、私は如何なる年齡の人に於いても、極く短時間に人間に現はれる發作的のものに就いて述べるのである。恐らく長日月に亙るものは、短時間的のものの連續であり、意識面をすつかり孤獨感情が占有して、社會的、外的要約を盡く脫した場合と考へられる。此の一時的の氣分（ムード）は何の先觸れも無く、突如として來り、二分か三分の極めて短時間の後には夢のやうに去つて、直後は其ムードに對する追想能力を缺如する。多人數の中でも、一人の時でも起り得る。勿論やる瀨無く寂寞を感じ、到底家に居るに堪へられず、確たる目當など無いのに家を飛び出す。さう云ふ孤獨感は、獨身の青年の誰でもが經驗はするが、感情の悉くを意識で說明して居るのでは今私の論ずる「孤獨地獄」はそのカテゴリイーの中に入らない。此のムードに於いては外界の條件は殆んど問題にならない。よく晴れた春の日に於いても、又野山を散步して美麗な景色に對して居ても、忽然として此のムードに襲はれる。此のムードの中に於いては胸中に苦悶が起り、言葉を發する事が出來ず、時に冷汗さへ伴ふ場合がある。而して心情は限り無く陰鬱で、

厭世的で、孤獨感が強い。此の性質は實に小說中の僧侶が語つてゐる如く、「山間、曠野、樹下、空中、何處へでも忽然として現はれる。云はば目前の境界が、直ぐそのまゝ、地獄の苦艱を現出するのである」と記載されるところによく一致する。

其後私は二三の人にかゝるムードの經驗の有無を尋ねて見た。內にははつきり所謂「孤獨地獄」を知つて居る人もあつた。ある人は朝目が覺めて起きる迄に床の中でよく此の氣分に陷ると答へた。尙、此のムードは極めて暗示に富んで居ると見えて、人に話す事に依つて、容易に其人を此ムードに陷れる事がある。先に述べた私の友人の話は其一例と云へるであらう。私の此の拙文を讀んで暗示を受け、所謂「孤獨地獄」を味ふと云ふ人が無いとも限らない。

科學者である私は死後の世界を信じない。極樂や地獄が地下に存在するなどとは勿論思つて居ない。此の所謂「孤獨地獄」のムードは、科學的、精神分析的にのみ解釋が可能である。分析的解釋が出來てから、又私は此のムードの苦しさを知らない。

三

所謂孤獨地獄とは、無意識が抵抗を破つて自らを表示する孤獨感情である。

周知の如く、言葉や文學に表示されるものは意識であつて、無意識は一次的な表示形式を持たず、只二次的に、象徵的にしか表示されない。從つて我々は其間接的に現はれて居る無意識を、分析的智識と象徵の一次的表現への飜譯とに依つてのみ理解するのである。しかし其無意識の感情が極めて强力となつて抑壓を突風的に打破つて現はれる時は、それが元來意識的のもので無い爲に、意識には不可思議に思はれるのである。それは一種不可解なムードとなつて我々を怯かすのである。故に不可解のムードの伴ふ心身條件、卽ち胸內苦悶、焦慮感、强迫觀念、冷汗等を持つのである。故に在來の宗敎家たちは、これは地獄である、現世に於いて現はれる地獄の一つと見なしたのであらう。

孤獨感なるものは人間に宿命的なもので、自我衝動が完全にまで、英雄の如き完全さ迄、滿足されなければ必ず孤獨感情を引き起すであらう。ナルチスムスは强盛であるのにそれを滿足させるどころか、却つて餘りにも强き禁制がそこに加はる。一代に自己の野心を殆ど完全に滿足せしめ得たナポレオンも、臨終にはセント・ヘレナの孤島で孤獨感を味つた事であらう。詩歌文章は數多く孤獨感を取扱つて居る、いや凡ゆる詩歌文章は孤獨感より

出發したとさへ言つても良いかも知れない。菊地寛の名作「忠直卿行狀記」の主人公の大名は、何不足なき境遇にありながら、眞實のものを見る事も知る事も出來ない、焦りに焦つて眞實を捕へやうとして捕へる事が出來ず、却つて益々陷つて行く孤獨を巧みに表現したものである。啄木の「ココアのひと匙」と云ふ題の歌に

はてしなき議論の後の、
冷たきココアのひと匙を啜りて
そのうすにがき舌觸りに、
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

とあるは、如何に暴力を用ふるも孤獨感は消えさるべきでないのを詠つたものである。其他、孤獨を唱つた歌は思ひ出すだけでも、限りなく多い。例へば、若山牧水の歌に——

幾山河越えもて行けば寂しさの
消えなん國ぞ、今日も旅行く。

杉浦翠子女史の歌に——

天地におのれ寂しと思ふとき
淺間は燃ゆる日の入りぎはを。

これらの寂しさを歌つた歌がそれぞれ有名になつて多くの人に愛唱されるのは、各々の胸の共通する孤獨感の琴線に觸れるからである。

我々は個人として社會の一員となり、談話し、事業し、勞働する。親子愛、夫婦愛、朋友愛、戀愛など、リビドーの對他纏綿は孤獨感情を消し得るが、その可能は永久的でありえない場合が多い。もし纏綿が裏切られる時、却つて孤獨感情を増惡せしむる結果となる。このやうな事情の爲に、人間共通の宿命的孤獨感情が存する譯である。しかし我々の生活は社會的であり、何等かの形に於いて妥協的である以上、日常生活に於いて此の孤獨感に深く沈んで居る事を許されない。謂はば、孤獨感は紛れて無意識の底に殘り日常の意識的心理過程から除外せられてゐる。玆に人間的悲劇が存在する。宗敎家はこの人間的悲劇を說明するために、三世因果應報を作り、來世を作り、地獄極樂を作り、またこれから免れるために念佛を唱ふる事を考へ出した。これは要するに孤獨感情を紛らせる方法である。而して到達する最後の切札は「諦念」であらう。これが宗敎家の謂ふ「悟り」の心理であるかも知れない。私は宗敎家と全然反對の道を採り、精神分析學に依つてこの孤獨感情を認識したいと思ふ。さうしてこの認識に依つて悟りに達し得るならば達したいと思ふ。

フロイドが云つてゐるやうに、各人は無意識內に他人

の無意識を理解する鍵を有して居る。私は此の說に萬腔の贊意を表する。我々が目覺めて居て、日常生活に從事してゐる日中に於いては、無意識は强い抑壓を受けて居て意識的行動をなしつつある。無意識は此の意識的行動の間隙に時々首を出すが、それは分析的に考へて始めて了解し得るもので、一次的發表樣式を有して居ない。然るに睡眠から將に目覺めんとする時は、意識の朦朧狀態にある。此の時の意識の抵抗の弱いのに乘じて、無意識內の孤獨感情が突發的に人間を捕へるのである。文學的な云ひ方をすれば、人間の五體を震撼し去るので、人間は直ちに之を孤獨感情から來て居るのだと知り得ないから不可思議に思ふのである。此の朦朧狀態に於いて全く日常生活に關係の無い事や、遠き過去の事を思ひ浮べるのは（それは盡く無意識に關係した事であるが）萬人の經驗する處である。かくて無意識の孤獨感情は不思議なムードとなつて、曉時によく起るもので、甚だしい場合に胸內苦悶、强迫感の如き身體的條件を伴ふことさへあるやうだ。

以上で覺束なくも大體、所謂孤獨地獄が無意識に根ざすものであることだけはやゝ說明し得たかと思ふが、なほ孤獨感の內容をリビドー說や出產外傷定着の概念を以て細かく研究する機會を持ちたい。始めて孤獨地獄などの名を聞かされた諸兄は奇異な思ひをするであらうが、嘗てこのやうなムードを經驗したことのある方は、必ずや私の此小論文に對して多少の興味を持つて下さるであらう。（完、九、六、六）

近代的人間の精神問題（ユング）（4）

武田忠哉

西歐の精神的後景の一瞥は、知的・道徳的・美的觀點のいづれの側面からも殆どわれわれの心を惹くことが出來ない。もちろん、われわれは一つの熱情をもつてわれわれの周圍に一つの無比の記念碑的な世界を建設した。しかしながら、それがあまりに甚しく壯大なために、やはり一般にすべての壯大なものは外部に横はり、これに反して、われわれが精神の後景において見いだすものは必然的に不充分な憐れむべき現狀に陷らねばならないのである。

勿論、私はこの點において自分が一般的意識から何らかのものを先取することを認めてゐる。眞に、かやうな心理學的事實に對する洞察はまだこの時代の共有財産を形づくるにいたらない。今や西歐の公衆はやうやくこの洞察の途上に佇み、しかもなほそれは明白な理由から最も烈しく反撥されてゐる。實際、われわれはシュペングラーの厭世觀によつて印象を與へられたが、しかし、かやうな印象は快適に精密なアカデミックの内部において動くに止まり、これに反して、心理學的洞察は、苦しく個人的なものへ侵入し、したがつて、個人的な抵抗と拒否に衝突するのである。もちろん、私はけつしてこれらの抵抗を無意味に見なすものではない。むしろ、それらは破壊的なあるものに對する一つの健康な反應のやうに私の眼に映じるのである。一般にすべての相對主義は、それが最高かつ究極の原理である場合、破壊的に作用するものであり、したがつて、私が精神の後景の幽暗な狀勢を示すことは、けつして厭世觀的に一つの警戒の指を擧げるために行はれるのではない。むしろ、私はそれによつてつぎの一つの事實を强調するのである。すなはち

無意識的なものはそれ自身の脅威的外見にもかかはらず一つの強い牽引力を作用し、しかも、それは單に病的な本性に對してだけでなしに、健康な積極的精神に對しても與へられるのである。精神の地下は本性であり、本性は創造的生命にほかならない。もちろん、本性はそれが建設したものを自ら破壞するかも知れないが、しかし、改めてそれを再建してゆくのである。かうして可視的世界の内部において、近代の相對主義によつて價値を破壞されたものが、再び精神によつてわれわれに提供されるのである。最初、われわれはただ幽暗と醜惡への下降を見るにすぎない。しかしながら、この景觀に堪へないものは恐らくけつして澄明と美を創造するにいたらないであらう。光は常にただ夜から生れ、かつていかなる太陽も一つの不安にみちた人間的思慕がそれに固執するといふ理由によつて空に佇みつづけたことはなかつた。およそ精神がどのやうにしてそれ自身の憂鬱を再び揚棄するか、それはあのアンクティーユ・デュペロンの例によつてわれわれに示されなかつたであらうか。恐らく支那は自らヨーロッパの科學と技術によつて滅亡するとは信じてゐないであらう。それならば何故われわれが、東洋の祕密の精神的影響が必然的にわれわれを破壞するやうに信じなければならないのであらうか。

しかしながら、實に、われわれがわれわれの優秀な技術的能力によつて東洋の物質的世界を亂雑に搖り動かしてゐる他方において、東洋はそれ自身の優秀な精神的能力*によつてわれわれの精神的世界を紛糾に導いてゐるのである。それにもかかはらず、一見われわれはこの狀勢をなほ全く知らないやうに思はれ、あるひは、東洋がわれわれを内的に捉へ得るかも知れないといふ觀念にさへ到達してゐない。しかしながら、ローマ帝國の例はわれわれに何を敎へるであらうか。すなはち、前アジアの征服によつてローマはアジア的になり、さらにヨーロッパが一般にアジア的に影響され、今日もその樣態を保持しつづけてゐるのである。

* この場合の精神的には seelisch が用ひられ、直ちにそれに續く精神的能力の場合には geistig といふ形容詞によつて代へられてゐる。ここでは、それによつて東洋の靈性的側面と、西歐の知的側面が一つの對照として强調されてゐるやうに思はれる。

かやうにして、西歐の神智學が東洋の一つのディレタント的・眞に野蠻な模倣であることはまだ充分に理解されてゐないのである。いまやわれわれは、東洋の日常のパンを形づくる星占術を再開始し、一方、かつてわれわれに對してヴィーンとイギリスにおいて起つた性慾研究

もまた優秀なインドの規範を與へられ、一千年に及ぶ東洋のテクストは哲學的相對主義に關してわれわれを啓示し、そして、支那の學の內容は主として一つの超因果的觀點――われわれがやうやく漠と感じ始めたにすぎない――の上に基礎づけられてゐるのである。さらに、一部の、複雜な、われわれの心理學の新發見について云へば、それの認められ得る敍述はすでに古代の支那のテクストにおいて探求されることが可能である。われわれが一つの獨特に西歐的發見だと解してゐるもの、すなはち、精神分析とそれに由來する多くの提議、それらもやはり東洋において古代から訓練された祕術に比べられるならば一つの初歩の試みにすぎない。現に、オスカー・アー・ハー・シュミッツによつて、精神分析と瑜伽論を對照した研究がすでに提出されてゐるのである。

事實、東洋はわれわれの現在の精神的變化の惹起に對して何らかの役割を演じなければならないやうに思はれる。しかしながら、この東洋はけつしてティベットのマハトマ（大智）の修道院ではなしに、その主要事項においてわれわれの內部に存在し、恐らくそれはわれわれ自身の精神に他ならないのである。いまやこの精神は新しい精神形式――（アリアン人種の限りなき掠奪慾を消火すべき精神的現實を含むところの）――の創造に從事してゐるのである。すなはち、東洋において一つの憂慮すべき寂靜主義にまで發展した生活の制限、そして、精神の要求が外的社會生活の要求と同じやうに切實になつたときに必然的に生じる存在の安定、恐らくそれらに類似したあるものがアリアン人種の掠奪慾に對して與へられねばならないのであらう。しかしながら、われわれはアメリカニズムの時代に生活しつつ、なほ遙かに東洋的なものの領域から遠ざかり、やうやく一つの新しい精神文化の劈頭に佇んでゐるにすぎないのである。もちろん、私はけつして自ら豫言者の地位を潛稱するものではない。しかしながら、恐らくわれわれは、不安の狀態における平靜への思慕、不確實の狀態における確實への願望、それらに關して敍述することなしに、近代的人間の精神問題の設計を試みることは出來ないのである。眞に、新しい存在形式は必要と困窮から生じ、それは理想的要求と單なる念願からは誘導され得ないのである。さらに、われわれは少くも一つの解決の可能性を暗示することなしに――（假令、それによつて何ら最後的決定的なものが云はれるべきでないにしても）――、本來、一つの問題を遊離して敍述することは出來ないやうに思はれる。今日、當面の問題の狀勢が私の眼に映じる限りにおいて、なほそれの將來の解決に關する何らの點も全く

決定されてゐないのである。そこでは、一部の人々は依然として從來のものへの諦念的復歸を努力し、他の樂觀的な人々は世界觀と存在との形式の獲得を追求してゐるのである。

近代的意識の、精神に基づく眩惑。そこに私は現代の精神問題の核心を認め得るのである。この眩惑は、一方において厭世觀的に見られるならば、一つの崩壞現象であり、他方において樂觀論的に見られるならば、西歐的精神態度の一つの可能な一層深い變化の輝ける萠芽を意味してゐるのである。この、一つの重要な現象はそれが廣汎な國民の層に根ざしてゐるだけ一層注目すべきものであり、さらに、それがあの精神の非合理的・無限の衝動力——（豫測されることなしに、不思議に多くの國民と文化との生活を變形するところの）——に觸れる限りにおいて、それだけますます重要なものとして理解され得るのである。そして、今日なほ多くの人々の視野から遮られ、われわれの時代の心理學的興味の後方に橫つてゐるものは、實にその力に他ならないのである。畢竟、精神の眩惑は何ら病的な不合理ではなしに、一つの魅力であり、それは非常に烈しいために沒趣味的なものによつても脅威されることが出來ないのである。

いまや世界の大いなる國道に沿うてすべてのものが消耗され荒廢に陷つてゐるやうにみえる。したがつて、恐らく追究的な本能は踐み慣らされた過去の道を離れて他方向に走るものを求め、それは、古代の人間が彼のオリンプの神々の世界から免れ、前アジア的神祕を發見した場合と正確に等しいのである。われわれの內奧の本能は、東洋の神智學と東洋の魔術を體得することによつて、それを外側に求め、さらに、精神の後景を內省的に考察することによつてそれを內側にも求めるのである。この場合のわれわれの懷疑と極端主義は、一人の佛陀が唯一に確信的な根本經驗に到達するために彼の二百萬の神々を價値なきものとして排除した際の懷疑と極端主義においてそれ自身の反映を見いだすのである。

いまやわれわれは最後の問題に到達するにいたつた。近代的人間に關する私の敍述は現實においても眞なのであらうか。あるひは、恐らくそれは一つの錯視ではないであらうか。何百萬の西歐の人間にとつて私の引用した事實は全く無意味な偶然であり、極めて多くの敎養高き人々にとつてそれらは悲しむべき迷路にすぎないのである。例へば、かつて敎養あるローマ人は、先づ國民の下層に流布されたクリスト敎に關していかに考へたであらうか。現在も西歐の神は多くの人々にとつて、アラー神が地中海の彼方におけるやうになほ個人的に生々と保持

され、前者は後者を劣れる邪教徒として理解し、ただわれわれは他の可能性を缺除するために、同情をもつて彼等を忍受してゐるにすぎないのである。さらに、怜悧なヨーロッパ人の說によれば、宗教とそれに親和的なものは國民と女性的情意にとつて全く善きものであるが、しかし、いまやそれらは、その後景において直接的の經濟的・政治的諸問題に面接するやうに見られてゐるのである。

恐らく私は雲のない空にもかかはらず一つの嵐を豫言するもののやうにこの全線において否認され、あるひはそれは地下線の下における嵐であり、けつしてわれわれに到達しないかも知れないのである。しかしながら、精神の問題は常に意識の地平線の下に横はり、一般にわれわれが精神問題に關して話す場合には、本來われわれに視えるか視えない事物、最も親しいが最も纖細な事物、ただ夜にのみ咲く花、それらに關して話すことに歸着するのである。白晝にはすべてのものは明瞭かつ强健であるが、しかし、夜もやはり白晝と同じやうに長く、また夜にもわれわれは生きてゐるのである。ある人々は夜の惡しき夢のために彼等の白晝をも害され、さらに、多くの人々にとつては白晝の生活が一つの極めて惡しき夢であり、したがつて、彼等は精神の眼ざめる夜に向つて鄉愁を感じるのである。實際、目下特にかやうな人々が多數にゐるやうに思はれ、その結果、近代的精神問題は私の記述した狀態になつてゐるやうに私には理解されるのである。

勿論、この場合に私は多少自ら責めなければならないことを知つてゐる。何故なら、私はわれわれの現世的性質の精神を默過してゐるからである――（この精神はすべての人間にとつて明白であり、したがつて、大部分の人々がそれを中心に話してゐるのである）――。それは國際聯盟とそれ類似のものによつて具象化されつつ、國際的あるひは超國民的理想において表示され、さらに、それはスポーツと映畫とジャズにおいて顯現するのである。いまやこれらのものは現代の記號的徵候として、人道の理想を明白に肉體の上へも延長させるやうに思はれ、かやうにして、スポーツは肉體に對する一つの異常な價値判定であり、それはさらに近代舞踊によつてアンダラインされ、これに反して、映畫は、探偵小說と同じやうに、すべての昂奮・情熱・幻想――恐らく一つの人道的時代には拒否されねばならないやうな種類の――を危險なしに體驗することを可能ならしめるのである。これらの徵候がいかに心的狀態と聯關するであらうかは容易に理解され、實に、そこに生じる精神の眩惑は基礎的

人間性に對する一つの新しき自覺と一つの囘想とに他ならないのである。この場合に、かつて精神と比較して非常に長く侮蔑されてゐた肉體が再發見されることは當然の歸結であり、しばしばわれわれは精神に對する肉體の復讎に關して話されるやうな方向をさへ認めることが出來るのである。カイザーリングは自動車運轉手を現代の文化的英雄として告發することによつて必しも全く正確に問題の焦點に的中し得なかつた。いまや肉體は同權を要求し、さらに、それは精神のやうに一つの眩惑を作用するのである。もしわれわれがなほ精神と物質との對立の古き理念によつて捉へられてゐるならば、この狀態は一つの分裂を、いな、一つの堪へがたい矛盾を意味するであらう。しかしながら、これに反して、一般に精神は內的に直觀された肉體の生命であり、肉體は外的に表示された精神の生命であること、これらの兩者は二つの他のものでなしに同一のものであること、もしわれわれがかやうな事實の神祕と和解することが出來るならば、その結果はどのやうな伸展を示すにいたるであらうか。すなはち、そこでは、現在の意識段階の克服に對する努力がいかなる無意識的なものを經て肉體に通じ、さらにその逆方向を取るのであるか、いかにして肉體への信念が唯一の哲學――（一つの純粹な精神のために肉體を否定しないところの）――のみを容認し得るのであらうか、それらの經緯が容易に理解されることが出來るのである。この、過去の例に對して無比較に一層强力の、精神的かつ肉體的諸要求の進出は、假にそれが一つの崩壞現象のやうに映じるとしても、やはり一つの若返りを意味することが可能である。

危險のあるところには
また救ひ手が現れて來る。
――ヘルダーリーン――

かうして、事實、いかに西歐の世界が、一つの遙かに迅速なテンポ、アメリカ的テンポ、寂靜主義と現世から隔離された諦念との反對、それらを打ち鳴らし始めてゐるか、人々はその樣態を理解し居るのである。いまや外部と內部、あるひは一層適切に云ふならば、客觀的なものと主觀的なものとの間に一つの未曾有の對立が緊張を起し始めてゐる。青年のアメリカに對して老いゆくヨーロッパが賭ける一つの最後的競走。幽暗な自然法則の力から逃れ、一つの・さらに偉大の・一層英雄的な覺醒の勝利を諸國民の眠りの上に戰ひ取らうとする、一つの健康な・あるひは絕望的な實驗。

それは歷史が將來において答へる一つの疑問である。（完）

オランダ芹の漬物 （マンスフィールド作）

――“A Dill Pickle”(1920)―Katherine Mansfield――

岩倉具榮譯

それから、六年後に、彼女は再び彼に會つた。造化の水仙を生けた日本の花瓶で飾られた例の小さな竹製テーブルの一つに向つて、彼は腰掛けてゐた。彼の前には臺の高い果物皿があつた。そして彼の「特別な」やり方――だと彼女が直ぐに認めたそのやり方――で大變注意深く、彼はオレンヂの皮を剝いてゐた。

彼は見上げた時に彼女の眼にかち合つたので、彼女が彼だなと思つてハツとしてゐるのを感じたに違ひなかつた。まさか！　彼は彼女を認識しなかつた！　女は微笑した、男は顏をしかめた。彼女は彼の方にやつて來た。彼は一瞬間眼を閉ぢた。所が眼を開けると、彼は宛かも暗い部屋でマッチをすつたかの樣に輝いた。彼はオレンヂを手から下して彼の椅子を後へ押してやり、又彼女は小さな溫い手をマッフから取出して彼の方にさし出した。

「ヴェラ！」と彼は叫んだ。「これは變だな。實は、一瞬の間、僕はあなたが分らなかつた。腰掛けませんか。あなたは晝食をすませたんですか。コーヒーを少し飲みませんか。」

彼女は躊躇してゐたが、勿論飲みたいと思つてゐた。

「えゝ、私少しコーヒーをいたゞきませう。」

そして彼女は彼の向ふ側に腰を下した。

「あなたは變りましたねえ。あなたはすつかり變つて了つた」と彼は云つてあの熱心な輝いた顏付で彼女を見つめた。

「あなたは大變丈夫さうだ。僕は以前にあなたがそんなに丈夫さうなのを見たことがなかつた。」
「本當?」彼女はヴェイルを上げて高い毛皮のカラーのボタンをはづした。「私は大して丈夫のやうに感じてゐません。私はこんな天氣には耐へられませんのよ。」
「あゝ、さうですかね。あなたは寒い…のが嫌ひなんですね。」
「大嫌ひ。」彼女は身震ひした。「そして一番惡いのは年をとつて來るとどうしても…。」
彼は彼女の言葉をさへぎつた。「一寸失禮」と云つてテーブルをたゝいて女給仕を呼んで。「少しコーヒーとクリームとを持つて來て呉れ給へ。」と注文し、次に彼女に向つて云つた。「本當にあなたは何も食べたくないんですか。果物ならいゝでせう? こゝの果物は大變いゝんですよ。」
「いゝえ、ありがたう。何も欲しくありませんわ。」
「ぢやア、それはそれでよしと。」さう云つてあることを露はにほのめかすやうな微笑をたゝへながら、彼は再びオレンヂを取上げた。「あなたは云つてゐましたね、年をとつて來ると——どうなるんですつて?」
「寒がりになるつて云ふんですよ」と彼女は笑つた。けれども彼女は彼のあのトリックを——彼女の言葉をさへぎるトリックを——そして六年前にそのためにいつも腹を立てたことを想起して、それを考へてゐた。彼女はその當時に宛かも、彼が全く突然に彼女の話してゐる最中にその手を彼女の唇の上にやつて彼女から向きかへり何か違つたことに注意を向けて、それから手を取り去つて(丁度先程と同じ様に)いさゝか無遠慮に過ぎた微笑を浮べて彼の注意を再び彼女に與へる様に感ずるのが常であつた…。さあ、これだけ斷つておけばよい。それはそれでよしと。
「寒がりに!」彼は自分でも微笑し乍ら、彼女の言葉を鸚鵡返しに口にした。「あゝ、あゝ。あなたは相變らず同じことを云つてゐるね。そしてあなたについては相變らぬことがもう一つある。——あなたの美しい聲——あなたの美しい話し振りだ。」今や彼は非常に眞面目な顏をしてゐた。彼は彼女の方に身を近寄せた。と、彼女はオレンヂの皮の溫い刺す様な香りをかいだ。「あなたがたつた一言云つても、僕はいろんな人の聲の間でもそれがあなたの聲だと

云ふことが分るんです。僕は時々不思議に思ひましたが、どうしてだかあなたの聲が度々思出されるのです。どう云ふわけですかね。吾々がキュー植物園で一緒に過した最初の午後をあなたは覺えてゐますか。あなたは僕がどんな花の名前もちつとも知らないので大變驚いてゐましたね。僕は今でも相變らず、あなたが僕に敎へてくれた名をみんな忘れて了ひましたよ。けれども天氣がよくて溫い日に、何か輝かしい色を見ると何時でも——實に不思議なことだが——僕はあなたの聲で「ゼラニウム、金盞化、馬鞭草」と云つてゐるのが聽こえるのです。そして之等の三つの言葉が、自分では忘れてはゐるが或る天國的な言葉について思出す凡てである樣に感じるのです。……あなたはあの午後を覺えてゐますか。」

「えゝ、よく覺えてゐますわ。」彼女は長く柔く息を引いた、丁度彼等の間にある造花の水仙が餘りに甘美で殆ど耐えられないかの樣に——。だが、その特別な午後について彼女の心に殘つてゐたことは、お茶のテーブルの上で不似合な場面であつた。隨分大勢の人々が支那の塔の中で茶を飮んで居た。そして彼は氣狂ひの樣に黃蜂を追つてゐた。手を振つて追つ拂ひ、麥わら帽でたゝきつけ、そんな場合には全く似合はず、眞面目くさつて怒つてゐた。クスクス笑ひ乍らお茶を飮んでゐる人達は如何にも愉快さうだつたが、彼女はどんなに困つたことであつたか。

けれども今、彼が話すにつれて、その記憶は消えた。彼の記憶の方が本當であつた。さうだ。それは素晴しい午後であつた。ゼラニウムや金盞花や馬鞭草が咲き誇り、——日は溫く照り……、彼女は『日は溫く照り……』と云ふ言葉を、宛かも自分で歌つたかの如くに考へてゐた、

溫く……と云へば、さうだ、もう一つの思ひ出がそこに浮んで來た。彼女には自分が芝生の上に坐つてゐるところが見えた。彼は彼女の傍に横たはり、そして突然、長い沈默の後に彼は轉がつて來て、その頭を彼女の膝においた。

「僕はね」と彼は取亂した低聲で云つた。「僕はね、自分で毒を飮んで死にかゝつてゐるんだといゝと思ふんです。——こゝで今!」

その瞬間に、白い着物を着た小さな女の子が長い水のたれてゐる水蓮の花を持つて、藪の後からチョコ〳〵出て來

て彼等を見つめ、それから又チョコ〳〵行つて了つた。けれども彼は見なかつた。彼女は男の顔をのぞき込んだ。
「あら、どうしてあなたはそんなことを云ふんですか。私はそんなこと云へませんわ。」
けれども彼は一種のやさしいうめき聲をして、彼女の手を取り乍らそれを自分の頬にもつて行つた。
「僕はあなたを餘りに——餘りにも愛さうとしてゐることを自分でも知つてゐるんでね。それでね、ヴェラ、僕は非常に苦むだらう。あなたは決して、決して僕を愛しはしないだらうから。」
彼は確かに、その頃よりも今は、はるかに樣子がよくなつてゐた。彼はあの夢みる樣な曖昧さと不決斷とを、すつかりなくしてゐた。今や彼は如何にも人生に自分の位置を見出し、少くとも深い印象を與へる自信と確信とを以て滿ちてゐる男の態度を持してゐた。彼は又、金が出來たに違ひなかつた。彼の着物は立派であつた。そして彼はその時ポケットからロシアの煙草入を取出した。
「煙草をのみませんか。」
「えゝ、いたゞきませう。」彼女はそれを取らうとした。「大變よさゝうな煙草ですね。」
「えゝ、いゝ煙草だらうと思ひます。僕は聖ジェームズ街の小さな男に僕の爲に作らせたのです。僕は餘りに煙草はのみません。僕はあなたの樣ぢやないんです——けれども僕が吸ふ時には、おいしくて大變鮮しい煙草でなければならないのです。煙草は僕にとつては習慣ぢやありません。それは贅澤なんです——香水の樣にね。あなたは今でも大變香水が好きですか。あゝ僕がロシアに居た時には……」
彼女は言葉を入れた。「あなたは本當にロシアにいらしたんですか。」
「えゝ、行きましたよ。僕は一年以上も居ましたよ。吾々はいつもロシアに行くことについて話したぢやありませんか。あなたはもう忘れて了つたんですか。」
「いゝえ、私、忘れはしません。」
彼は妙な風に笑ひかけて、椅子によりかゝつた。「をかしいですね。吾々があんなに計畫した旅行の總てを僕がみ

んな實行したんだから――。えゝ、僕は吾々の話した凡ゆる土地へ行きましたよ。そしてそこに十分永い間止つてゐましたよ――あなたがいつも云つた樣に、そこで浩然の氣を養ふことが出來るだけ永い間ね。實際、僕は自分の生涯の最近三年間をしよつ中旅して過しました。それで僕は戰爭がすんだら、そこへも行かうと思つてゐます。」スペイン、コルシカ、シベリア、ロシア、エジプトと云ふ風にね。殘つてゐる國は支那だけです。

彼が煙草の先を輕やかに灰皿にたゝき乍ら話してゐた時に、彼女は自分の胸に大變永い間眠つてゐた奇妙な獸物が動き出して、身體をのばし、あくびをし、耳をそばだて、それから急に足でとび上つて、それ等の遠い土地に行きたさうな憧れる樣な風で見つめてゐるのを感じた。けれども彼女は笑ひながらおだやかにかう云つただけであつた。「羨しいわね。」

彼はそれを受けて云つた。「隨分素晴らしかつたな。――特にロシアはよかつた。ロシアは、吾々の想像した通りだつた。いや、想像した以上だつた。僕はヴォルガの河上に舟で數日を過ごしたりした。あなたはあの舟人の歌をよく彈いたぢやありませんか。覺えてゐますか。」

「えゝ」彼女がさう云つた時に、心の中でその歌が彈奏され始めた。

「この頃でも時々はあれを彈くことがありますか。」

「いゝえ、私にはもうピアノがありません。」

彼はそれを聞いて驚いた。「併しあなたの美しいピアノはどうなつたんですか。」

彼女は少し顏をしかめた。「賣りましたの。何年も前に。」

「併しあなたは大變音樂が好きだつたんでせう。」彼は不思議に思つて云つた。

「近頃ではピアノなんか彈いてゐるやうな暇がありませんわ。」彼女は云つた。

彼はそれを聞流して、前の事に返つて云つた。「あの河上の生活は全く特別なものですね。一二日經つと世の中に今一人知つてゐる人間があつたとは思へなくなつて來るんですよ。そして言葉と云ふものを知つてゐる必要がなくな

る。――舟の生活は自分と他の人々との間に十分以上の結合を作ります。彼等と共に食べ、彼等と共に日を過ごし、そして夜分になるといつまでゞも歌を歌つてゐます。」

彼女には舟人の歌がまた聲高に悲しげに叫ばれるのが聞こえて來、さうしてどちらかの側にものうげな樹々のある暗い河に舟が浮んでゐるのが見えて來たので、思はず身を震はせるのであつた……。「えゝ、私それが好きなんです」と彼女はマッフを撫でながら云つた。

「あなたはロシアの生活についてなら大抵何でもお好きですね。」と彼は熱心に云つた。ロシア人の生活は形式的でなく、非常に衝動的で、勿論大層自由です。それから百姓が非常に素晴しいんです。彼等は形式に囚はれない、衝動的な、自由な人間です――さうだ、さう云ふ人間です。僕は吾々の連中で――僕の二人の友人とその內の一人の妻君と都合四人で――黑海のほとりにピクニックに行つたことがありましたよ。吾々は夕食にシャンペンを飲み、草の上で食べたり飲んだりしました。そして吾々の食べてゐる時に馭者がやつて來ました。「オランダ芹の漬物をあがりませんか」と、彼は云ふのでした。彼は、吾々の仲間に這入りたいと云ふのです。それは僕には全く正當なことに思はれました。全く――あなたは僕の云ふ意味を分つて下さるでせうね。」

そして彼女はその瞬間に、天鵞絨のやうな波を岸邊に寄せる天鵞絨の樣に黑くて靜かな神祕な黑海のほとりの草の上に、自分が坐つてゐる樣に思はれた。彼女は道の片側に寄せてある車や、草の上に集ふてゐる數人の人々、月明りに仄白い彼等の顏や手などが見えるやうに思つた。集ひの內の女の蒼白い着物がひろがつて、そのたゝんだ日傘が巨きな眞珠の編針の鈎の樣に草の上に橫はつてゐるところも彼女には見えた。彼等から少し離れたところに馭者が坐り、膝に布をひろげて夕食をとつてゐる。「オランダ芹の漬物をあがりませんか」と彼は云つた、彼女はオランダ芹の漬物つて何だかよく分らなかつたが、彼女は透いて見える鸚鵡のくちばしの樣な赤い唐がらしの透いて見える綠色の硝子の壺を渡された。彼女は自分の頰を吸込んだ、オランダ芹の漬物は恐ろしく酸つぱいものであつた。……

「えゝ、私、あなたのおつしやることが本當によく分ります」と、彼女は云つた。

それから言葉の途切れた間に、彼等はお互ひに見交した。以前には彼等がその様にお互ひに見交した時には彼等は二人の心が云はば悲戀の男女のやうにお互ひに抱き合つて心中して了ふ様な限りない理解が、彼等の間にあるのを感じたのであつたが、今日では驚くべきことには、溺れようとしないのは男であつた。彼はかう云ふのであつた。「あなたは僕の云ふことを隨分よく聽いて下さるんですね。あなたがそんな卒直な眼で僕を見られる時には、僕は他の人間には決して云はないこともあなたには話せる様に感じますよ。」

彼の聲にはからかひの調子があつたのだらうか。それともそれは彼女の思ひ過ごしであつたらうか。彼女にはよく分らなかつた。

「僕はあなたに會ふ迄は」と彼は云つた「僕は決して自分のことを誰にも話さなかつたんです。僕があなたに小さなクリスマス・トリーを持つて行つて、僕の子供の頃のことをすつかりあなたに話した一夜のことを僕は忘れられません。子供の時分には僕は家を逃げ出して庭の車の下で二日の間見付けられずに過したほど慘めな氣持で居たつてことを話しましたら、聽いてゐるあなたの眼頭は輝いてゐました。それであなたは、お伽話にある様に、クリスマス・トリーにも聞かせる様にしたのを僕は感じました。」

けれどもその夜の事と云へば、彼女は鮪の鹽漬の小さな入物を覺えてゐた。それは六、七ペンスのものであつた。彼はそれを片附けることは出來なかつた。考へても御覽なさい。――六、七ペンスくらゐの小つぽけな壺だのに彼女がそれを食べてゐる間、彼は愉快げに驚いて彼女を見守つてゐた。

「いや實際に、それはお金を食べることだ。あの位の形の小さな入物には、七シリングも入れることは出來ないんです。奴等がどれくらゐ儲けるか、それを考へても御覽なさい……。」そして彼は何か深い複雑な計算を始めたのであつた。……併し今は鮪の鹽漬にはおさらばだ。クリスマス・トリーは食卓の上にあり、そして少年は庭の犬を枕にして車の下に横はつてゐた。

「その犬はボーサンと云ふ名でした」と、彼女は愉快さうに叫んだ。
けれども彼はその言葉について來なかつた。「犬つて？　あなたは犬を飼つて居たんですか。僕は一寸も犬のことは覺えてゐませんね。」
「いゝえ、いゝえ。私はあなたが少年の頃、お宅にゐた庭の犬のことを云つてるんですよ。」彼は笑つて、煙草入をつかんだ。
「あの犬ですか？　それはすつかり忘れてゐました。それはもう何年も前の事の樣に思はれる。僕はそれがたつた六年前だとは信ずることが出來ない。僕が今日あなたに會つてあなただと分つた後に――僕は非常にとび越すやうになつたのです――僕は僕の全生涯を一とびしてその頃に戾つてしまつたんです。僕はその時、そんなに子供だつたんです。」彼はテーブルをドンドンとたゝいた。「僕はどんなにかあなたを困らせる事だらうと、よく思つたことです。そして今、僕は何故あなたがあの樣に書いてよこしたのかゞすつかりよく分ります。――尤もあの頃にはあの手紙のために僕は殆ど生命をたち切られさうだつたんだが……。僕はあの手紙をこの間また見付けて、讀んで見て笑はずにはゐられませんでした。なか〳〵頭のいゝ手紙でした。――僕の事がまざ〳〵と描いてありました。」彼は目を上げた。「もう行くんぢやありませんか。」
彼女は再びカラーのボタンをはめてヴェイルをひき下した。
「えゝ、私行かなくちやなるまいと思つてゐますの」と、彼女は云つて作り笑ひをした。今や彼女は男がからかつてゐるんだと云ふことが分つた。
「あゝ、いや、どうか」と彼は懇願した。「ほんの少しの間待つて下さい。」そして彼は女の手袋の片方をテーブルからつかみとり、宛かもそれさへ押へてをれば女を引止めることが出來るかの樣にそれを捕へてゐた。「僕はこの頃では話相手になる人間があまりなくて、そのために僕は一種の野蠻人になつて了つたんです」と彼は云つた。「僕は何かあなたのお氣に障るやうなことを云ひましたかね？」

「ちよつとも」と彼女は嘘をついた。けれども男が彼女の手袋を自分の指に靜かに、靜かに、通してゐるのを見守つてゐる内に、彼女の怒りは本當に沈まつた、そして又その瞬間に、彼は六年前の彼自身らしく見えた。‥‥

「あの頃、僕が本當に望んだことは」と、彼はおだやかに云つた。「一種の敷物になることでした。――あなたが角張つた石や、あなたの大嫌いの泥でいやな氣持にさせられないで歩いて行ける様に、あなたの爲に自分を一種の敷物にすることでした。それ以上積極的なことは何もありませんでした。――それ以上利已的なことも何もなかつたのでした。つまり僕の望んだことは唯、魔術の敷物になつてあなたが見度いと思ふ凡ゆる國々へあなたを連れて行くことでした。」

彼が話して行くに從つて、彼女はまるで何かに醉つた様に、頭を上げた。彼女の胸の中の不思議な獸物が喉を鳴らし始めた‥‥。

「僕はあなたが世界中の他の誰よりも孤獨である様に感じました」と彼は續けて云つた。「そして而もあなたは世界中で眞實に、實際に生きてゐる唯一の人だ感じてゐたらしいのです。生れるべからざる時に生れた」彼は手袋を撫でながら口づさんだ。「不運な人だと思つてゐたんです。」

あゝ何と云ふ事か！ 彼女は何と云ふ事をしたのだらう！ この様な幸福を投げ棄てゝ了ふとは、何と云ふことであらう。之れはかつて彼女を理解した唯一の男であつたのだ。もうあとの祭であらうか。あとの祭であり得ようか、彼女は男が指にはめてゐるあの手袋であつた‥‥。

「それから、あなたが友達を持つてゐなかつたと云ふこと、又決して人々と友達にならなかつたといふこと。それを僕はどうして理解したかと云ふに、僕も友達を持たなかつたのです。今でもやはり同じですか。」

「えゝ」と彼女はかすかに云つた。「やつぱり同じ。私は前の通り一人ぼつちですわ。」

「僕もさう」彼はおだやかに笑つた。「丁度同じだ。」

急にすばやい身振で彼は手袋を彼女にかへして、自分の椅子を床に擦り鳴らした。「けれどもその頃、僕に大變神

祕に見えたことは、今はすつかりよく分ります。勿論、あなたにもよく分つてゐませうが……。それはつまり、吾々がそんなにも主我主義者で、そんなにも自我に、そんなにも吾々自身に沒頭してゐたので、吾々は心の中に他の何人の事を考へる餘地を持たなかつたゞけです。分りますか。」と彼は純眞に、心から叫んだ。又、さうしてあの古い自己の一面の樣に恐怖を以て叫んだ。「僕はロシアに居た時に心理の組織を研究し始めました。そして僕は、吾々が別に變つてゐたのではないことを知りました。それは全く極普通の形式の……。」

彼女は行つて了つた。彼はそこに腰掛けてゐた、雷に打たれた樣に、口も利けないほど驚いて……。それから彼は女給仕に勘定を聞いた。

「併しクリームには手をつけてないよ、」と、彼は云つた。「それは僕に拂はせなくてもよからう。」(完)

「オランダ芹の漬物」と云ふ小説の主題は、男女の戀愛の喰違ひを描いてゐる。男は若い時分には女を母としてコムプレクスを轉嫁するが、やうやくそれを卒業して人間として、一異性として愛することが出來る時分には、女の方では母扱ひにされたがるやうになつてゐる。母扱ひにされないことが却つて不滿に思はれるやうに母性本能（常識で云ふよりももつと生物學的な意味での）が發展して來てゐる。「漬物」と云ふ題をとつたのは、大槻氏の云はれるやうに象徵的な意味があるやうだ。男主人公がロシアへ行つてゐる內に心理學を研究したと云つてゐる。これは勿論精神分析を意味してゐる。最後の「手をつけないクリーム」は象徵に違ひないが、何の象徵か、それは讀者の御判斷にまかせます。(記者)

祈りする彼女

坪田譲治

私は妻子を東京に殘して、遠い田舍の工場に起居してゐた。そんな生活は人をロマンチックにするもので、私は倉庫の例の空地に一箱の蜜蜂を飼つた。その前にヒナゲシやチュリップを植へた。そこへまた腰をかけるために手頃な石を轉がしておいた。さうして春の日曜など、そこで煙草をふかしたり、花に群る蜂の羽音を聞いたりして、永い時間を過した。

その時も、そこで食後の一服をやらうと思つて、出かけて行つたのであるが、すると。もう一人の女がゐて、石の上に肘をつき、額に手をあてゝ俯向いてゐるのであつた。思ひ餘ることでもあるのか、それとも――祈りする少女とでもいふべき姿であるが――と、私は立つて眺めてゐた。ふと振向いた彼女はひどく狼狽へて立上つた。

「御免なさい」

「なに、いゝですよ」

といふ間もなく、逃げるやうに去つて行つた。彼女は淺川雪子、工場一のインテリ女性で、美しいばかりか女學校も出てゐた。カトリックの信者で帶に銀の小さな十字架を下げてゐた。それが何でまたこんな工場などに――誰しも思ふのであるが、初め女工として入つて來て、三月ばかりで整理部副部長となり、半年後には事務員になることも決つてゐた。

處で、その午後の三時の休憩時間に、外から事務室に入つて行くと、丁度誰もゐない處で、電話がしきりに鳴つて

ゐた。

「モシ〳〵」

聞いて見る。と、

「やい、俺の家内をどうしてくれるんだいッ。」

大變な奴が彼方でどなつてゐる。

「こちらは田島製織所ですよ」

そこで云つて見る。

「解つてる。解つてるから云つてゐるんだ。俺は淺川庄太郎だ。××機關庫の助手だ。月給三十圓だぞッ。田島製織の風紀に就て文句があるんだ。社長を出せ、社長を――」

私は電話を切つた。そして丁度入つて來た電話受付の人に聞いて見ると、その淺川庄太郎こそ、先刻の淺川雪子の主人だといふのである。

「ふ――ん」

私は考へ込まないで居れなかつた。が、その前にも電話のベルは鳴りつゞけた。庄太郎君まだ彼方でねばつてゐると見へる。で、とう〳〵受付は受話器をはづしてしまつた。と、そこへ外から社長が歸つて來て、卓上電話に手をかけた。受付が外線にそれをつないだ。ベルが直ぐ鳴つた。彼方に出て來たのは、「俺は淺川庄太郎」で、社長もまたどなり付けられた。それから後二時間近く、五人の事務員がみな庄太郎氏に引つかゝつてどなられた。初めは誰も意としなかつたけれども、終には社長からして腹を立てた。

その晩、終業のベルが鳴ると、私は事務所の窓によつて、みんなの歸つて行くのを眺めてゐた。と、門の處で、窓から二十間もあつたであらうか。黑々とみんなが寄りたかつて一團をなしてゐる。よく見れば、その中で兩手を高く上げて振り廻し、何か大聲でわめいてゐるものがある。黑い詰襟服に鐵道員らしい帽子を冠つてゐる。それをまた――

――さうだ――淺川雪子が門の外の方へ引張つたり押し出したりしてゐる。と、取卷いてゐた四五人の男工連中が何かガヤガヤ云ひ出して、そのガヤ〳〵の內に彼を外へ押し出してしまつた。
私はその時、その鐵道員を、晝間勇敢に電話をかけたあの庄太郎氏と推察したのであるが、電話に似合はず、何とその男が小さかつたこと、五尺にも滿たない。それが私をほゝ笑ませた。
それから一寸して、窓をのぞくと、そこにはまた變つた光景が展けてゐた。一人の菜葉服の男がトタン塀に沿ふて門の方へ步いてゐた。その樣子は數步前にゐるバッタか雀の子をでも捕へようといふ腰つきである。
「何か居るな」
私は思つた。が、彼はそのまゝ門の處まで行つて、柱の側に身を潜め、顏だけ一寸外へのぞけた。
「何かあるんだな」
私は考へ直した。然しさう思つた時、彼はもう外へ飛出し、そこから姿を消してゐた。彼、名は山村一太郎。漂白部の釜焚きであつたが、後頭部に大きな禿があつて、みんなから一ハゲと呼ばれてゐた。
朝からのことを考へて見て、私には淺川夫婦とこの一ハゲとの間に何か想像されるものがあつたのであるが、その不似合な取合せに、いや、私は美しい淺川雪子のために、その想像を喜ばなかつた
一日おいた翌日のこと、電話がまた朝からかゝり始めた。
「俺は淺川庄太郎――」
そしていつ迄たつてもやめなかつた。それから晩に彼が門前に出現することも同じであつた。注意してゐると、一ハゲがまた門柱の處に身を潛ませてゐた。この一ハゲに就ては、知るのは私だけであつたけれども、電話は事務のもの凡てを憤慨させ、直ぐ淺川雪子は呼びつけられた。
「――例へどんな譯があるにした處で、――云つときますよ。――此後一度でも電話がかゝつて來たら、直ぐ會社は所置をとりますよ」

卽ち彼女を解雇するといふのである。斯う云ひ渡されて、彼女は白い耳たぶを眞赤にし、顏を隱すやうにして引き下つた。そしてその翌日、早朝庄太郎氏を先に立てゝやつて來た。小男の彼は細い手足をピン〳〵跳ねるやうにしてやつて來た。二人は人事掛の前で頭を下げた。が、何とその對照の不似合であつたことか。

これで事件も終つたらしかつたが、一日おいた翌日――これが多分淺川君の休み番の日らしいのであるが――電話はちやんとかゝつて來た。勇敢に「俺は――」とどなつてゐる。丁度正午の休憩で、事務室にはまた私だけである。私は受話器を下に置くと、受付の人に手短かに賴んで置いて、直ぐ整理部へ急いで行つた。そして製品倉庫の中にゐた淺川雪子に呼びかけた。

「淺川さん、また電話ですがねえ」

彼女は一瞬顏色をかえたが、暫くしてつぶやくやうに小さな聲で話し詰めた。

「あんな主人なものですから、皆樣に御迷惑をかけまして、ほんとうに相すみません。でも――でも、あの山村さんが一言主人に云つて戴きますと、それでもう主人も何も云はないやうになるので御座いますけど――」

「山村がどうしたんですか」

斯う云ふと、私はハとした。何か云ひ過ぎたやうな氣がしたのである。彼女もそれきりものを云はなくなり、唇をかんでヂッと眼の前を見つめてしまつた。然し片手は帶に下げてゐる十字架をしつかりつまんでゐて、人差指がその上で急しく動いてゐる。遂に私は斯うでも云ふより仕方がなかつた。

「事情は知りませんが、ぢあ斯うしませう。今晩、淺川君と來て下さい。話合つた上で、私に出來るだけのことはしてあげませう。でないと、あなたは會社を首になりますよ」

そして思ひつめたやうな彼女の眼色を後に、私はそこを出て來たのである。その晩、淺川君は彼女と共にやつて來た。終業後二時間も待ち、醉つてもゐないらしい。で、私は話した。

「此間から度々のお電話で、推察――と云つて失禮かも知れませんが、もしかしたら山村君と感情の行き違ひでもあ

りはしまいかと考へた譯なんです。で、まあ餘計なことではありますが、このまゝだと、淺川さんが明日にもこゝを解雇といふことになるだらうと思ふんです。それは會社にとつても、淺川さんにとつても、良い話でありませんので、出來ることなら何とか方法をとりたいと思ひますが、私が聞いて構はないことなら、一つ事情を話して見て下さい。いや、事情は聞かなくてもよろしいが、山村君にでも、または會社にもあなたの要求とでもいふものがありますなら、それを云つて見て下さい」

すると、暫く俯向いてゐた末、淺川君は少しく微笑して話し出した。

「いや、どうも面目しだいも御座いません。酒の上のことでありまして」そして頭を下げるのであつた。

「でも、また電話がかゝりますと、實際笑話でなくなりますので、こゝはキタンなく云つてみて下さい」

「いや、もう此後は絶對につゝしみまして、」

斯う云つて、また彼は頭を下げるのであつた。そこで私は云つた。「ぢあ、よくお願ひしときますよ」

二人は機嫌よく歸つて行つた。何と譯ない事件であらう、と私は思つたのであるが、翌々日電話は掛つて來た。社長へどなり付けたのである。仕方がなかつた。私は彼女の解雇されて行くのを眺めてゐるきりであつた。

その日、三時の休憩時、木工場で騒いでゐる男工連中の中へ入つて行くと、一人が盛に語つてゐた。

「淺川さんお祈りをするんだつてさ。然しそんなもの、あの一ハゲにかゝつちあ馬の耳に念佛だ。淺川君にだつて、つまりそのお祈りがきかなかつた譯だらうよ」

「ふ――ん、何て祈るだらう」

「さあ、誰か聞いたものゐないか」

「どうか兄弟の誘惑から、神樣、私をお守り下さい」

こんなお祈りの眞似をするものがあつたので、みんな大笑ひをやつた。が、私は笑へなかつた。チュリップの花の前に祈る彼女の姿が思ひ浮べられた。（完）

時評

分析時言五題

大槻憲二

一『にんじん』を觀る

近頃映畫に實演に、脚本に、大評判の作品『にんじん』の映畫を帝劇で見たのは、五月十日であつた。私はこの作品は期待したほどになかつたが、演技（殊に主人公になつた少年の）には感心した。またこんなに山のない、寫實主義的な作品を映畫化して戯曲的に成果を收めてゐるフランスの映畫界の技倆と觀衆の高級さには、流石に敬服した。またも一つ私を喜ばせたのは、その背景となつてゐるフランスの田園が、ピサロやシスレーの風景畫を偲ばせてゐた點であつた。

この映畫の最も重要な點は、教育的價値のあることであると思ふ。兩親の間が面白くなくなつて來た頃に生れ出た『にんじん』であつたがために、その子に兩親の憎しみが集中される。この集中がなかつたならば、兩親は遂に離婚をしてゐたであらう。双方の憎惡を一身に引受けてゐたが故に、この家庭が破壞せられずに終つたのであるから、ある意味で主人公は家庭支持の功勞者であり犠牲者である。併し兩親としては、子供を犠牲にして自分等の形式的共同生活を維持し來た事どもに就いては、何の責任も反省も不安も感じてゐないらしかつた。併しその無責任と無反省と呑氣さとは、遂に齎すべき結果を生まずにはおかなかつた。主人公は納屋に這入つて首釣りをして死なうとした。その時になつて兩親は、殊に父親は慌てた。さうして息子（『にんじん』）の心持を聽き、自分等夫婦の不幸な生活を告白したりする。さうして不幸を共通するものとして父子は、そこに同病相憐的の同一化の場面を展開して、この劇に終つてゐる。そこで觀衆は作者のホロリズムを味はされるだけで滿足しなければならぬのであるが、一體何故にこの兩親の結婚生活は不幸にならなければならなかつたのかと云ふ問題に關しては少しも觸れてはゐない。これは科學者としての我々を甚だ不滿に思はせるのみならず、文藝鑑賞家としての我々にも必ずしも滿足を與へない。更にまた、兩親の不平を緩衝地帶たる子供に向つて發散させてはならないとの教育的意義さへも不徹底なものとならざるを得ない。

併し、この境遇に於ける子供の心理描寫のためには、相當行屆いた努力が拂はれてあつた。主人公にとつての

唯一の理解者であり同情者である名付親のところへ行つての彼の幸福。その幸福からも直ぐさま呼戻されねばならなかつた彼の不滿。その不滿を勃發させるために、近處の家の子供の仲よく遊んでゐるところへ嫉妬的な投石をすることなど……その邊の心理描寫は相當細かく試みられてあつた。たゞ最根本的なもの(兩親不和の眞因)だけを逸して、その他の點ではこの作品はなか〱よく出來てゐた。

二　『檢察官』を見る

ロシアの文豪ゴーゴリの『檢察官』は有名な作品であるが、五月廿六日夜、神宮外苑の日本青年館で、新築地劇團の所演を見るの機會を持つたことは有難い仕合せであつた。

「其處から、三年間驅け續けても何處の國へも行かれない」やうな、灰色の惰眠を貪つてゐる田舍町に一大センセーションがまき起る。市長、判事、慈善病院長、郵便局長、町のおえらい方々が鳩首協議をするがいゝ智慧が浮ばない。地方巡視の檢察官が近くこの町にもやつて來ると言ふ報らせである。

　無智で、威張り屋で、收賄をこれ事としてゐる腐敗し盡した官吏連中にはこの檢察官の來る事が正に靑天の霹靂である。唯、まごまごするばかりで――と其處へあはて者の地主ドブチンスキー、ボブチンスキーが飛び込んで來て大變な報告をする。町の宿屋にゐるペテルスブルグから來た若い男と言ふのがその檢察官らしいと言ふのである。一同の恐慌は極度に達する。市長は正服でその若い男を迎へに宿屋へ出かけて行く、他の連中もそれぞれあはてゝ家へ歸つて行く。

　その若い男フレスターコフは實は檢察官ではなく、ペテルスブルグから故鄕へ歸る途中で旅費をスッカリ花牌(カルタ)ですつて了つた官吏だつた。圖々しくつて、出鱈目な、醉つぱらふと大風呂敷をひろげるこの男を、市長は全く檢察官と思ひ込んで大歡待をする。他の官吏連中も彼を信用して、暮夜人なきをうかがひ、祕かに賄賂をおくる。若い男は市長の娘と婚約までして、いゝ潮刻を見はからひ又の日を約して町をたつて了ふ。――が、暫くすると彼が一介の下級官吏であることが暴露する。地團太踏んでも間に合はない。憤激と口惜しさのクライマックスにほんものの檢察官が町へ到着する。――と言ふ筋。

　若い男フレスターコフの宿つてゐる部屋へ市長が出掛けて行つて、兩方で相手を怖れてゐる(一方は檢察官だと思つてゐるし、他方では宿料を拂はぬために市長が捕へに來たのだと思つてゐる)場景は、甚だ喜劇的である

がかう云ふ事は勿論そのまゝでは、現實的にはあり得ない。併し心理的には屢々あり得ると思ふ。兩方ともが脛に傷を持つてゐる（分析的に云ひ換へれば、超自我の苛責を感じてゐる）場合には、その超自我は外界の父コムプレクスに轉嫁せられる。つまりこの場合、市長にとつては檢察官（と間違はれたこの若い男）は父コムプレクスの轉嫁對象であり、若い男にとつては市長がそれに相當してゐる。否、この町の全體の者等、就中脛に傷を持つてゐる市長以下の諸役人にとつて若い男（檢察官）は父（投出せられたる超自我）であるのだ。今まで市長以下の者等に虐待せられて來た、商人にとつては救ひの神（善父コムプレクスの轉嫁對象）であるのだ。

市長以下の者等は賄賂や女色（彼等自身の超自我がそれに依つて克服せられて來たので）に依つて、この新たに現れた超自我を克服しようとする。さうして、克服し得たと、一時は信ぜられた。その時、市長等は威丈高になつて商人等をきめつける。と、忽ち、その克服と勝利とは夢であり超自我の象徴は幻覺であつたことが分る。折角の勝利感が滅茶々々に粉碎せられて、悲慘のどん底に陷れられてゐるところに、突如として本物の超自我（檢察官）が現れてこのどん底の上にどしんとばかり重しを載せる。そこでこの劇は終りを告げてゐる。

この戯曲は超自我の悲喜劇であると云へる。この喜劇を單なる喜劇に終らしめず、幕切れに於いて悲劇的效果を與へ得たことは、流石にこの作者ゴーゴリの深い人生觀照力の所以であると思ふ。第四幕目までは筋の運びと描寫とに主として作者の力は注がれてゐるやうに感ぜられたが、第五幕の終りに近づくに從つて、觀衆は笑ふに笑へなくなつた。この戯曲は四幕で終らせることが出來るのではないかと、四幕目まではやゝ冗漫な感じを覺えつゝ見てゐた自分も、五幕を見終つてやはりこゝまで描かねばならないのだと云ふことを感じた。この感じは私一人のものではなかつたと見えて、私のうしろに座つてゐた或る觀客も、「やはり最後まで見てゐてよかつたな」と連れの者と語り合つてゐるのを耳にした。

三 『東への道』の救助願望

この作品は十年も前に無聲映畫として我が國に來たものであつたと云ふことであるが、私は當時それを見なかつた。先頃、これが音樂をアフター・レコードして日本劇場に再出現した。私は、その筋が新聞紙上に紹介せられてゐるのを見て、救助願望の作品であるらしく察して出掛けて行つた。果して救助願望の典型的作品である。筋はかうである。

ニウイングランドの片田舎にアンナと云ふ娘が、老女と一緒に貧しく暮してゐた。アンナは母の苦勞を見るに忍びず、町に住んでゐる金持の親類トレモン家にお金を借りに行つたが、誰も相手にしてくれない。途方に暮れてゐる彼女に馴々しく話しかけるのは色魔のサンダスンであつた。彼女は、サンダスンの口車に載せられて、キリスト敎社會に許されない祕密結婚をして了つた。それから一人で田舍へ歸つた。アンナは毎日、男が迎へに來てくれると思つて樂しみにして待つてゐた。

が、或る日サンダスンが來たが、アンナは誑されてゐたことを知らねばならなかつた。が、一層惡いことには彼女はその時既に身重になつてゐた。と、同時に母とも死別れることになつた。アンナは村に居たゝまれず、ベルデン村のマリアと云ふ者の部屋を借りて身二つになつたが、赤子は間もなく死んでしまつた。

父なし子を産んだことを知られた彼女は家主のマリアのために、部屋を追出される。アンナは生活の途を求めて村から村へ漂泊の旅を續けた。やうやくバーレット村の豪農の家に雇はれることになつた。彼女は熱心に働いた。可憐な彼女にその家の息子のデーギッドが愛を求めたが、彼女は自分の恥づかしい過去故にそれを受けることを拒まねばならなかつた。

軈て冬が來て氷が村を閉し、例年の農閑期の舞踊會が開かれる頃、ベルデン村のマリアがバーレット村に來て、偶然にアンナの姿を認め、その過去を曝露した。熱心な聖書信者である主人は、戒を破つた女としてアンナを追放した。彼女は吹雪の中にさまよひ出で、川を流れ行く氷塊の上に身を投げて今にも瀧の中に陥らうとする時、あとから事情を知つて追蒐けて來たデーギットのために危いところを救ひ出された。さうして二人は人々の理解と同情との内に、芽出たく結婚をしたと云ふ筋。

この物語は觀衆の救助願望を刺激するために非常に念入りにプロットが造り上げてある。第一に主人公は美しい純情の女でなければならない。これが惡漢（現實には一寸見られないほどな圖々しい色魔）のためにだまされて罪なき罪を犯し、そのために當然以上の迫害を受ける。追出された日は朗らかな天氣では面白くない。大吹雪である。河の中に陥る。氷塊の上に危く留る。氷塊は流れて瀧と共に落下しようとする。間髪を入れないところに救助の手が及ぶ。

救助願望を刺激する獻立を完全にするために、大分不自然なところが出來てゐる。その意味に於いてこの作は通俗物である。善玉と惡玉とが判然區別され過ぎてゐる。色魔のサンダスンは人間性を超越して厚顔であり過

ぎはせぬか。アンナのサンダスンに誑された心理の中には果して少しでも不純なものが、虚榮心が、利害打算がなかつたであらうか。さう云ふやうな栓鑿はこの作では完全に避けてある。

なほ、何故にアンナは河の中から救助されねばならないかと云ふ事に關しては、既に筆者が本誌の第一卷第二號、第三號及び第五號に於いて『戀愛に於ける救助願望の研究』の題下に詳論しておいたから、も一度讀み返して頂きたい。

なほこの表題の『東への道』"Way Down East"の意味に就いて、或る人々がこれが不可解であるとか、『東への道』が誤譯であらうとか、云つてゐたやうである。併し私の見るところでは、この作を"Way Down East"としたことは、作者の才氣を示してゐると思ふ。この事件はニウイングランドの"Down East"(岡東?) 村で起つたことである。この普通名詞を固有名詞の如くに扱つてその前にWayの一語を付し、そこに象徴的な意義を與へたものと思はれる。"Way Down East"を普通名詞として直譯すれば『東へ下る道』或は『東へ下り行く』となるのであらうと思ふ。ところで、東へ下るとは何のことかと人々は問ふであらう。東へ下ると云ふ言葉は、分析的に解釋すれば、夢の言葉の如く、凝縮されてゐる。この凝縮を引延ばして見ると、「西へ下つて東へ上り行く」と云ふ意味になるのであらうと思ふ。太陽は常に西へ下つて東へ上り行くものであつて、これは毎日の我々の生と死と(覺と睡と)を象徴してゐることは、幾多の證據がある。東は常に再生を意味するのはそのためだ。この物語に於いても、女主人公は一度死して、男主人公に救はれて再生したのだ。かく解することに依つて、この表題は一層の面白味を持つて居るものであることが知られる。

四　心理家としての東郷元帥

東郷元帥の薨去に會して、國民、否、世界を擧げて哀悼の意を表してゐる秋、筆者もまた元帥を弔する意味に於いて、心理家としての元帥の一面をこゝに論じておきたい。

一、元帥が日本海の大海戰に際し、敵方からは既に盛んに發砲して來てゐるのに、さうして味方の將卒も速に應戰したがつてゐるのに、それを許さず、隨分戰線が接近してから漸く『打方始め』の號令を發したことは、味方の攻擊慾を出來るだけ欝積させておいて、猛烈に效果的に敵に向つて勃發させようとした意圖に多ならなかつたと思はれる。

二、『明治四十四年、英國皇帝ジョーヂ五世陛下の戴冠式に、東郷乃木兩將軍は御名代東伏見宮依仁親王、同妃兩殿下に隨行して英國を訪うた。

兩殿下が英國を御出發後、東郷大將は北米合衆國を訪問し、乃木大將は獨、佛、墺、バルカン諸國を巡察することになつたのだが、乃木大將はその序に露國にいり、嘗て半年の久しきにわたつて砲火の間に相見えた敵將ステッセルを慰めようと思つた。乃木大將からその話をきいた東郷さんは、しばらく考へてからこの訪問を思ひ止まるやうにと切に勸めた。露國は戰敗の屈辱を蒙り、就中旅順開城はステッセルにとつて致命の痛手である。乃木將軍の武士道的同情による慰問もむしろステッセルにとつては新しい恥辱と感じられるだらう、といふのがその理由だつた。危險を承知で露國に入つて、悲境にある曾ての敵將を慰めようとしたところに、人は純情な乃木さんの乃木さんらしい「詩」を感じる、そしてこれに對する東郷大將の言葉は、水の樣に冷靜である。』

と五月三十日の東朝に同紙記者は書いてゐる。全く、乃木さんは詩人であり、東郷さんは心理家だ。劣等感を持つもの丶心理をよく分析的に理解してゐると云ふべきだ。

三、『これも日露戰爭の時、明治三十七年四月十三日、旅順港にあつた露國東洋艦隊旗艦「ペテロパウロスク」が、我軍が沈置しておいた機械水雷に觸れて爆沈した。露國の輿望を擔ひ東郷司令長官と雌雄を決せんとしたマカロフ中將は、血にまみれながら甲板にひざまづいて、最後の祈禱を上帝に捧げながら、沈みゆく艦と運命を共にした。マカロフ中將戰死の確報が我艦隊に入つた時、幕僚の中に無線電信をもつて敵艦隊に弔意を表さうといふ話が出て、司令長官に進言したが東郷さんは遂にウンといはなかつた。

後ある人が何故止められたのかと尋ねたところが「その氣が起らんかつたからぢや——」とだけ答へたさうだ。水雷を沈めて置く以上、なるべくなら敵の司令長官の乘つてゐる旗艦がこれにブツかつて吳れと念ずるのは當り前の話である、こちらの注文通りに行つてから、遽に俠氣をてらつて、心にもない弔意を表するなどといふことは、東郷さんの潔しとしないところだつたのであらう。』

と同記者は云つてゐる。全くその通りだ。東郷さんとしても勿論弔意を表してやりたい氣持もあつたには相違ないが、それを表現することを許さない他方の意向は全く東朝記者の察する通りであらう。これは別に心理現象への分析的な觀察能力とは關係はないが少くとも心の力の大きく强い、甘さのない人であつたことを證明してゐ

る事實であると思ふ。換言すれば、如何にも正直な人であつたことを示してゐると思ふ。無意識を分析統制する力ある人であつたことを示してゐると思ふ。

四、また次の話も東郷さんの正直さをよく示してゐると思ふ。東朝記者は續けてから書いてゐる。

『元帥が、特別の關係あるもの丶外には一切揮毫に應じないのは有名だが、この少數の特權(?)階級の中に元帥の竹馬の友である一人の老翁がある。この人が訪ねて來ると、二人は子供時代と同じ親しさと、言葉で、樂しげな數刻を過すのが常で、また訪問の際その老翁は必ず數枚の揮毫を元帥に求めるのがいつものことだつた、元帥はいつでも快く筆をとつた。

ある日——例によつて筆を持つた元帥が、傍で一心に墨汁を磨つてゐる老人に、微笑みながら聞いた『貴方(おはん)は何時も澤山書かせるが一體誰のナ?』

老人は、言下に『おいどんのでごわす』と答へた。

『すべてナ?』

『はい』

『こげん澤山どげんするナ?』

老人はジロリと一瞥を元帥に呉れると、一段聲を張りあげていつた。

『賣り申すが!』

『然うなア⁉』

いかにも快げに笑つた元帥は、そのまゝスラ〳〵と筆を走らせて行つた、二枚、三枚、四枚。』

老人が正直に答へたからよかつたのだと思ふ。元帥だとて、何のために依賴するか位の事は百も承知してゐたのだらう。が、もしこの場合に老人が體裁のいゝやうな事を云つたら、元帥はお冠を曲げたに相違ない。困つてゐる友のために、甘んじて利用されてやつたところに元帥の心の偉きさが見える。とにかく、あらゆる意味で、心理家であつたと思ふ。

五　日本學藝家の規模

日本の學藝界の人々と西洋の學藝界の人々とを比較すると、前者はどうもその規模が小さいやうに見えるのは、あながち私の僻目ではないと思ふ。日本の學藝界の人々は、文藝家は讀者を樂ませることの上手な、藝人風(大衆的)の人々が多く、學者はたゞコツ〳〵と或る事柄について知識の集積をし、理論のないたゞの物識り風の人が多く、街頭に出て活躍する人は定見のない、ジャーナリストが多いようだ。

豐富な學殖と逞ましい理論の上に立つて、一世を指導し、やむを得なければ時の權威に反抗しても自說を曲げ

ない文明批評家風の人々は誠に少いのを遺憾とする。この事は、私が前號にも說いた日本人の超自我の低調なるに由るのであらうが、學藝に從事するには、實に致命的な缺陷だ。

ジャーナリズムにおだてられて柄にもない理論を述べて見たり、一度捕られて投獄されゝば忽ち轉向して見たりする誠に他愛のない連中が學界の權威で通つてゐるのだから困つたものだ。單なる物識りと卑屈な藝人と目先が利くだけのオッチョコチョイとで構成せられてゐる日本の學藝界だと云はれても、我々は辯解に窮するのではなからうか。

ダンテにしろ、ユウゴウにしろ、トルストイにしろ、ロマン・ロウランにしろ、アインシタインにしろ、近くはジードやローレンスにしろ、みな時の權威と戰つて戰ひ拔いてゐる。何も時の權威に容れられないやうな思想を抱かなければ、偉大な學藝家でないと云ふほどな父コムプレクスの所有者では私はないが、日本の學藝家は誠に不思議にその時々の、その年々の、權威者の意向に合致する思想を抱き得る幸福な人々ばかりであることだ。大きな目で見て日本のために幸か不幸か、私は知らない。（完）

敎員赤化の原因に就いて

奥本島田

少壯敎員赤化の原因に就いて、京都府思想對策委員會は調査を試み、假りに十二項目を擧げてゐたが、それについて私見を述べて見やう。

敎育に對する憧憬と希望とを抱いて師範學校から現實の敎育界へ放たれた彼等若き人々のなやみは、彼等の想像してゐたことゝは、甚だしいへだたりのあることである。それは赤化の原因に就いて述べられてある次の事柄によつて察し得られる。

1　生徒時代の敎育に對する憧憬と現實の敎師の職務との間に懸隔甚だしいことより不滿を感じたること、

2　有力者の子弟に對する敎員の阿諛的態度に對する不滿、

3　詰込主義の敎育と無產兒童の敎養を無視したる上級學校入學準備敎育に對する不滿。

この不滿を償ひ得べきものは、自己の昇進と經濟的利益とであるが、それとてもこの世界では閉ぢられてしま

つてゐる。卽ち、

1 待遇向上の道閉塞し人事行政の停滯したること、
2 自己の不利なる不意の轉任を命ぜられたること、
3 昇進の遲延。

それに加へて尊嚴と愛の神格化であるべき筈の「校長は官僚的主義であり、學校內の情實と職員室內に於ける職員の談話があまりに低級であるので、改善の必要を認めてゐた。」昇進して校長となることは彼等少壯敎員にとつては一つの願望でもある。而しながら前述の樣な現實情勢ではその苦痛をしのんでまでもこの願望を追求するに價せなかつたのだらう。現在の校長及び敎育家としての諸敎員の立場をながめた時、その願望すら容易に實現出來さうにもなかつたのだらう。

かやうに願望の代償が得られないところには安心と滿足とはない。のみならず彼等の憧憬と希望は失望と憤怒とに變はつていつた。尙、彼等の心は狹く歪められてゐる樣がうかがはれる。卽ち、

1 社會の不合理に對する反感。
2 校長の官僚主義的態度に對する反感。
3 政黨有力者の敎育への關與に對する反感。

校長や政黨有力者は父の象徵である。兒童は或は母コムプレクスの轉嫁對象となることもあらうと共に、敎員の同一化の對象となるであらう。幼兒期のエデポス・コムプレクスが醇化されてゐないで、そのまゝになつてゐると反社會的、反國家的の表現を採つて出て來るものであることは精神分析の說くところである。私は小學校敎員赤化の原因を、次の如く結論せざるを得ない。

若き敎師は父の象徵たる校長を、有力者を、又母と自己の象徵たるやさしい兒童を相手にしてゐる。そこに彼等が如上の各種の外的事情（抑壓）や「左翼農民運動なる地方の特殊の事情に影響される」からであらう、と。

赤化の原因を外的に求めてもそれを除去することは容易ではないとて、次の樣に述べられてゐる。

「各項目について見ても社會的の現況、財政問題、敎育制度等から改革至難のものも多く、たゞ當路者がこれ等の缺陷を自覺してゐて少しでもそれらの弊を除くよう努めることが當面の對策としてとるべきものであるとの意見が一致してゐる」と。これは一面からいふと赤化敎員は容易にたやすことが出來ないといふことの承認である。

同じ外的事情に接してゐても總てが赤化されるわけではないことは考慮すべき點である。故に其の原因を外的に求めてこれを除去する方法を考究すると同時に、各個人の心理作用の奧に潛む原因（傾向）をも探索し、ありのままの人間性を認識せしめ、人生の幻想的ならぬ道を

迯らしむることも思想善導のために必要であると思ふ。これは精神分析の仕事の一つであるが、これをなさうとする者は精神分析學の智識を得たのみでは不十分である。必ずや第一に自己自身が分析せられたる人となつてかからねばならない。（九、四、二七、稿）

トーキイ『居酒屋』に就いて

生形　要

人間本性を厭世的に見る一篇の敍事詩、エミール・ゾラの『ルーゴン・マカアル叢書』（第二帝政下に於ける一家族の社會的及び自然的歴史）二十卷のうちで、最も著名なものは、『居酒屋（ラッソモワール）』（一八七七年）と『ジェルミナル』（一八八四年）とであらう。そしてゾラは『居酒屋』に於て、酒精中毒の痴患を描きつゝ、女優ナナの前半生を明らかにして居る。すなはち彼はナナの兩親を宛然實驗臺に載せ、或る場合には、醫師が患者を取扱ふ如く、或は刑事が犯人を追ふが如くに、また百科全書風に行亘つた態度で、精緻な分析を行つてゐる。ゾラの言に從へば、「私のねらひどころは、何を措いても先づ科學的追求であつて、一つの血液的性質が他の神經的性質に接觸する際における深い擾亂を表現することにあつた」のである。しかしこの場合に、ゾラは一定の社會觀をもつて臨んでゐたことを見落すわけにはゆかないだらう。例へば、『居酒屋』を見ても判るやうに、そこには、舊型（クウポー）と新型（グラジエ）の對立が示されてゐること、そしてその時代——第三共和制の時代、この時フランスは英獨の如き工業資本の發展を示さずその成長が著しく阻害された——のあらゆる層の人々をその力關係に相應して、自在に登場させてゐることである。

×

從來ゾラの『居酒屋』は道學者からは、ヒステリイ文學だとか不道德文學だとか謂はれて來た。が、さらにこの種の文學を裏づけてゐるものは、作者の幼時に於ける愛の生活のうちに存すると云ふことが出來るのではなからうか。われわれは從來の道德的憤怒のみを以つて直ちに所謂「ヒステリイ文學」なるものを排斥すべきものではなく、さらに、その根柢を流れるものを理解すべきであると考へる。このゾラの『居酒屋』に對しても、また然りである。

×

次ぎに佛國ゴーモン會社のトーキイ『居酒屋』である

が、脚色兼監督者ガストン・ルウデエスは、あまり場面を衒學的に、原作通りに追ひすぎて、却つて人物紹介法――我國における映畫說明と同一の效果をねらつたものらしいが、すこぶる拙劣なものであつた――や物語の順序といつたものを取りちがえ、結局原作に及びもつかぬ半端な重苦しい――重苦じいと言つてもゾラのもつ重苦しさではなくルウデエスのもつ重苦しさであるが――品物をつくつて了つたやうである。

局部的にパデイの作曲が印象的な余韻をひびかせてゐるが、これとても、その寂しいリズムをとりのぞいて了ふと、殘るものは、不必要な饒舌であり、無趣味な雰圍氣の形骸だけでしかない。

× ×

このトーキイを見て、感銘をふかくしたことは、ナナの前半生を銳く――生理學的條件の下に、映出してゐること、例へば、ナナが兩親からうけついだ遺傳性や乃至は彼女の環境や、生活樣式について、すべての社會現象を、發生學的系統において說明しやうとしてゐることである。またこのトーキイを見てゐるうちに、ふとわたしの頭腦にひらめいたことは、「健全なる精神は健全なる身體に宿る」――これは Mens Sana In Corpores Ano といふラテン語を誤譯した日本語である――といふことわざが、如何に矛盾してゐることか、一代の偉才は如何に普通の凡俗を超越して特殊の精神的傾向をもつてゐるものであるかといふことである。

ナナの性格はよし支離滅烈であるにもせよ、彼女がもつ聰明さ、善良さを生んだ一種の精神異常性といつたものは、決して健全なる身體、血から來てゐるものではないこと、別言すれば、彼女の存在自體が全く異常な社會惡――何にも彼も商品化せずにはおかないといふ社會構造惡――の生んだかたまりにすぎないことを、このトーキイはまざまざと示してゐる。

また『居酒屋』といふところは、最も野性的な、しかし最も有效な方法(酒精中毒)を利用することによつて、無產者をして、壓制者や新興第三身分に對するかれらの敵對心をねむらしめ、かれらを偏執狂(マニア)にかりたて、酒精の犧牲者らしく仕立てあげる道場であることも、このトーキイは物語つてゐる。

要之、この映畫『居酒屋』は、映畫的手法において、いろ〳〵言ふところがあるだらうが、いままでに生產されたところのゾラ映畫――例へば『ナナ』『女優ナナ』『木の芽だち』等――と比較すれば、數等すぐれてゐる。またそれは原作には及びもつかぬにもせよ、ゾラには忠實である點で、一應、見るべき價値をもつてゐる。(完)

新刊紹介

一、"My Own Silhouette" by Elihu Nakao. 長谷川誠也氏や宮田修氏の舊友中尾清太郎氏の子息エリフ・ナカオ君（十六歳）の英文詩集である。幼時から英語とキリスト教の空氣の中で育つた著者ではあるとは云へ、英文詩脚の驅使輕妙、韻の用法自由自在。誠に驚き入つたる存在である。從つてこの著者は、三つの方面をこの一書に於いて示してゐる。英語學者と、キリスト教信者と、詩人としてゞある。詩人としてはあまりに完全にキリスト教儀でリファインされ過ぎ、ワイルドなところがなく、分析的には尻尾のつかみやうがない。分析的に尻尾をつかめさへすればいゝとはいへないが、少くとも摑めるものゝ方に文學としては優秀なものがより多いとは云へると思ふ。今のまゝでは詩人としてはあまり高く買へないが、英語家として、キリスト教的紳士として、誠に優れた青年であると思ふ。（丸善發賣、三圓五十錢）

一、ジイド全集第十卷（コンゴ紀行、根津憲三譯、モンテエニュに則して、佐藤輝夫譯）――アフリカの白領コンゴへの紀行は、原著者が最初この地方の美しい見なれぬ蝶に心を惹かれ思出の採集をしようとするのが、その目的の一つであつたのだが、併し旅行して行く內に土人の悲慘な生活とその原因たる白人の迫害、不合理な政策などに氣付くやうになり、採集網を呑氣に振廻してゐられなくなつたと譯者は云つてゐる。飜譯は極めて流暢である。（神田、金星堂、一圓五十錢）

一、海邊の悲劇（バルザック作、水野亮譯。）――『グランド・ブルテーシュ綺譚』、『復讐』、『フランドルの基督』、『海邊の悲劇』の小說四編を收載してある。何でもエドガー・アラン・ポーを思はせるやうな物凄い話や、探偵的興味ある話で、讀物としても面白いものである。譯文もよくこなれてゐる。（岩波文庫九九六、金二十錢。）

一、『精神病者に對する施設の概況』高野六郎稿、『精神衞生』第一卷第七號拔刷）――わが國に於ける精神病の事情とそれに對する施設との關係が大觀してある。稿者は濟生會名譽副會長內務省衞生局豫防課長である。明治三十八年には二三、九三一であつた精神病患者總數が、昭和六年には七三、七三一に上つてゐる。追年增加して行きつゝあることは、我々を寒心せしめる。

一、『ヨーロッパ各國に於ける現行精神病法規』――『精神衞生』第一卷第七號拔刷。――墺、佛、白、英、伊、五ヶ國の法規の飜譯。

資料

自己分析の試み二題

奥本島田

文學の食はず嫌ひ

文學研究號が出た時、私は文學きらひである自分の分析を試みて見た。

小説を創作する人は、小説即ち文學と考へてゐる「小説はために惡いから讀まされぬ」と少年時代に父から抑壓せられてしまふのが常である。その當時から小説は惡いものとなつてゐる。子供が讀むものではない、成人も小説は讀むとあまり良くないものだと考へてゐる。家に小説が五六冊ばかりあつたが、私は讀まないので年上の青年に貸してやつた。いつまでたつても返さない。催足しても返へさなかつた。その男はうそばかりついてゐる墮落青年であつた。小説を讀むやうな奴はこんな不良分子か、それは小説の影響であらうかと想像してゐた。小説を讀むと墮落してしまつて、偉い人になれない、身體が弱くなる（運動しないから）――それで自由に活動が出來ないのだ。發育が惡いのだ。小説は自分にとつては惡い。特に少年、即ちこれから成長せなければならぬ者にとつて有害であると思つてゐた。父の訓戒とそれの實例とは、この通りピッたり合ふてゐる。特に『子供が：：』といはれたのが、心によくひびいてゐた。それで小説を讀むと成人になりがたいといふ去勢恐怖を起してしまつてゐた。（少年時代にはあの大きな力强い成人に早くなりたいと願望してゐたことを思ひ出す。）

青年になつてからも――

『君、小説を讀まぬのか』

『僕は小説はきらひだ』

『何んでだ？』

『何でか知らぬが、小説は虫がすかぬ』

『ハハア、小説の食はずぎらひだな』

かういふ會話が時折かはされてゐた。

ここで文學研究號が心よく受け入れられた。以前に二度讀んだ文藝概論を今一度くりかへして見た。

秘密の手紙

ハガキ型のもの、例へば戸、障子、壁面、等に角から

角へ心の中で直線を引くくせが私にはある。これを自己分析しようとしたが、あまり容易ではなかつた。

（聯想一）子供の時分、道を歩むのに、道の凹んでゐる處をまたがうとして脚を曲げずに歩んだことを思ひ出す。このときに股のあたりに性的感じのあるために、さうして歩んだのであつた。道に凹所のない處であれば、小さな石から石へまたいで歩んだ。

（聯想二）幾何學がすきであつた。其の練習中に、道路面や庭のきれいな土の處に平行四邊形や三角形を畫いて、一點から一點へ直線を引いて其の問題を解決したのが思ひ出される。

（聯想三）戀愛の祕密の手紙は他人には見られたくない。どうしたら彼女へ祕密的に通信が出來るだらうか？此處からあそこへ、あそこからこちらへ、中で他人が扱へば必ず知られるがな！一點から一點への最短距離は直線である。物思ひに沈む時、角から角へ目をくばる。祕密の手紙を出す時にハガキ型の封筒を角から角へ目をくばつた。此處から彼處へ、直線に行くことを願つてゐた。誰の手にも渡らぬ樣にと、併しそれは祕密には出來なかつた。それがために精神上大なるショックを受けなければならぬことゝなつた。それ以後祕密の手紙は書いても郵便では出さなかつた。凡て直渡しにすることとした。以上の自己分析の試みは、まだ徹底してゐないことを自分でも認める。（昭和・九・四・四）

最幼兒期の憶ひ出

梅木米吉

A

その夫人は非常にふしあはせな方だと噂されてゐた。城代家老の家柄であつたけれども、夫といふ人が放蕩をしたのである。彼女は惜しい美人であるといはれてゐた。頬に（その左右何れであつたかを私は忘却したが）大きなアザがあつたから。彼女は常にきちんと丸髷を結つてゐた。

近くに住んでゐた私は屢々あそびに行つた。彼女の邸宅は兩側が川で、一間半位の橋を渡ると門があつた。大きな犬が飼つてあつて、私は小さな下駄をガリ〳〵くはれてしまつた事がある。この犬は一人で戸をあける事ができるといはれてゐた。

いくつの頃であつたかはつきりしないが、學校にあが

るよほど前の話。私は保之助さんといふ子供と友達であつた。彼は年は私と同じであつたが、私より一年上で屢々私のために性的指導者の役割を演じた。「逢ひたさ見たさに怖さを忘れ」といふ流行唄を、後に至つてまつさきに私に教へこんだのも彼である。

ある天氣のよい日、夫人が私の家に電話を借りに來た。電話は庭に面した緣側にあつたのだが、緣側で遊んでゐた私共二人は電話をかけてゐる夫人の下に這ひよつて旺に彼女の裾の中を覗きこむ事に腐心しつつあつた。……「怖るべき子供たち」と人々は考へて來た。併し分析を知つて、これは必ずしも恐るべきでないことを知つて安心した。

B

海軍記念日に大運動會を開催するのが、この町の小學校の慣はしであつた。私と正三さんといふ二人の一年生は大運動會に出場するため學校にでかけた。私は必ず優勝旗を貰つて來ますと、固く祖母に誓つて出立したのである。

私達二人が昔の殿様の墓所のある大きな寺の前に三つ又になつてゐる道の所まで來ると、私の母に呼びとめられた。彼女はその當時其處からそんなに遠く離れてゐない或る醫者の宅に入院してゐたのであるが、自由に動ける種類の病氣であつたものか、私のためにサルマタを買ひ求めて來てくれたのであつた。彼女は先程から私共の通るのを待構へてゐたのであらう。彼女は私に今この場でそのサルマタをはいてみろといふのであつた。私はいやだといつた。彼女はこの我儘者のためにそのサルマタを買ひ求めた商店の名前や値段の事などを述べて私に承諾させようと試みた。

「ごらんなさい。正三さんはちやんとはゐてるぢやありませんか」

いかにも正三さんは大運動會のために兄貴の白いキヤラコ製のサルマタを借りてはいてゐた。しかし私は問答無益とばかり正三さんをうながして倉皇と立去つた。私の決心は隨分と固かつたのである。

今でこそ幼稚園の運動會でもサルマタをはいてゐない生徒はないけれども、この東北の草深い田舍では、その頃漸くサルマタといふ物の存在が人々の間に知られ始めな商店のポスターが辻々にはりめぐらされてあつたやうに覺えてゐる。だからその頃はサルマタをはかなくとも大した恥ではなかつた。腰までの白木綿製の肌着を着用して、その上にお守りの澤山はいつてゐる巾着と迷子札

の附着してゐる夫々の色の帶をきつくしめて走るのが一年生達のありふれた風態であつた。曲り角で外側の腕を風車のやうにグル〳〵廻したり、足首のところを白い木綿糸で固くしばる事が一つの流行であつた。中川といふ落第生はヨヂムチンクを足のこぶらに黄色く塗つていたく私共を美しがらせたものである。ヨヂムチンクを塗れば、どんなにも早く走れるのだと彼は説明を與へた。いかにも彼は一等賞になつて黄色の花を貰つた。私はその日三等賞で赤い花であつた。私の優勝旗を獲得したいといふ野望は、あへなき最後をとげた譯である。その賞品の花といふのは上級生が手工の時間に敎師達との共力で日本紙によつて制作した造花にすぎないのであつて、一等は黄色、二等は綠色、三等は赤色に夫々染め分けられてあつた。そしてその名譽を得た人達がその名譽の章を胸間に誇り得るやうに極く小型の安全ピンが附着されてある。

當時四つあつたこの町の小學校の中、最後にできた學校であり一番貧しい學校であつたが爲（この學校には女の體操場といふものがなく彼女達は廊下で遊んでゐた）さういふいたく精神的な賞品を與へる慣はしであつたのであらう。

●　●　●

中學校にはいつてからのとある日、二階の物置の古行李のボロキレの中からすぎし日の件んの小さいサルマタ（それは白地にゴバルトブルーの太い横縞のある仲々に意氣な柄であつた）を發見して、しとどに私は泣いたものである。

今にしても、母がサルマタを持つて幼い私を待構へてゐる風景を想像する事はそゞろに感傷をそゝる事柄であり、その際の立會人正三さんが昨春二十五歳を一期として胸の病で不歸の客となつた事も、今は悲しい憶ひ出である。（完）

戀愛の生理

高水力太郎

一　神經活動の肉體反應――

人間は自分の生理的及び精神的構成に依つて想起する意識的或は無意識的の記憶のために、或る異性に牽かされる。有機體の必然として、男はその性的相手として女を求めなければならない。その求めてゐる狀態が戀愛で

ある。惚込みである。惚込みの狀態とはどう云ふ意味のものか。それを判然と、測定的な形で示すことは出來ないものか。これを判然させるためには、近代の心理學が漸次に採用しつゝある有機體の統一觀に準據しなければならない。

有機體は統一であり單位である。これは純粹に方便のため以外には、相互に對比的な特質として分化せしめることは出來ない筈だ。假令へば、肉體と精神、物と心、などゝ云ふ風に……。一定の肉體的現象には、必ず一定の精神的現象が隨伴する。その反對の場合も、同樣である。肉體は有機體の接觸に依り知覺することの出來る方面であり、精神は接觸に依つて知覺することは出來ない方面である。併し兩者の間に截然たる區別を劃することは、科學的には不可能である。

なほ我々はまた肉體の諸機關中に於いても、どこまでが心臟で、どこまでが胃で、どこまでが肝臟か、性器かなどゝ區別することは出來ない。それ等は相互に緊密に關係し合つてをり、そこにまた行動の深き統一聯絡が發見せられる。生活に關係ある部分の神經組織が活動してゐる時には、瞳は收縮せられ、唾液はよく流れ出で心臟は緩漫に鼓動し、胃は胃液を分泌し、喰物を攪亂し、腸は咀嚼せられた喰物を直腸の方へと送り、性器は充血してゐる。安全神經の方が働いてゐる場合には、瞳は膨脹し、唾液は減少し、心臟の鼓動は激しくなり、胃液の分泌は少くなり、腸はその活動を停止するか、或は下痢を催し、性器には血液が少くなる。以上諸器管の內の何れかに何等かの刺戟を加へても、その他の諸器管に如上の諸反應が程度の差こそあれ、生じて來る。

換言すれば、完全に平和であり完全であれば、生活神經のあらゆる活動が促進せられ、危險と恐怖の場合では安全神經のあらゆる活動が促される。危險と恐怖とは戰鬪や逃避に直接關係のない一切の活動を停止し、從つて有機體としての働きを緩漫にし、性生活を停止する。人々が戀愛してゐる相手から愛を保證する手紙や寫眞のやうなものを貰ひ、それを身につけてゐると、卽ち安定してゐると、人々の心は非常に滿足してゐる。甘さうな喰物を見たり、その臭ひを嗅いだり、それを味つたり、面白いものを見たり、よい音樂を聽いたり、などしてゐると、そこに力强い刺戟が生ずる。

二　得戀者の生理――

戀愛の刺戟が人間のあらゆる感覺や記憶を通じて入込んで來ると、それは他のあらゆる慾望の刺戟よりは力强い。滋養物を適度にとつてをれば、それは槪して云へば

健康であると云ふことになる。滋養にならぬものを不適度にとつてをれば、それは健康を害することを大抵は意味してゐる。併し喰物の良否の心理作用に及ぼす影響は、戀愛の成否の影響ほどに重要ではない。戀愛生活にはその他になほ、性生活と云ふ非常に主我的な要素がある。戀愛は有機組織としての人間に對して最も力強い刺戟であり、これの失はれ時には有機組織は最も甚だしい打撃を受けるのである。

得戀者は食慾も盛んであり、心臓の鼓動も正規であり、(從つて顏色もよく)、睡眠もよくとれ、甲狀腺の活動よく仕事にも實が這入り、筋肉も確乎とし、他人をアテにせず自己を恃むことが出來る。換言すると、彼の有機組織は百パーセントの働きをなしつゝあるのだ。

雌雄の蜂が愛に陷ると、彼等は太陽の方に向つて高く昇つて行き、そこで性的結合を行ふ。メーテルリンクのやうな詩人ならば、そこに愛の高揚の美しい象徴を見るであらう。が、科學者はさうロマンティックには解さない。性的亢奮のために光熱的材料を多量に生産する、そのために光源に近付く必要があるのであらうと考へる。性行爲が終ると、光熱的材料の產出はやむで、蜂は地上に歸つて來る。このやうに動物でも人間でも、戀愛時には物的に心的に高まつて行くのである。

三　失戀者の生理——

それに反し、失戀者は敗亡の屈辱と、今後の同様な敗亡の恐怖とのため、彼のあらゆる感覺は萎微し、一切の生活活動が一時的に停止して了ふ。食慾は減退し、寧ろ嘔吐を催して來る。腸の働きも惡くなり、下痢か便秘がその代りに來る。そのために身體は弱り、愈々憂欝の度を增す。心臓の活動も惡くなり、そのために不安は益々增大する。呼吸も困難となり吐息は繁くなり、皮膚面に血液が減退して顏色は蒼白となる。

さう云ふ狀態の人間は、あらゆる方面に持續的な活動力が鈍り、生活機能が停止するために虛無的な思想が培はれる。敗亡の恐怖のために、屢々自殺に驅られるやうになる。この事は有機體の最も完全なる安泰——胎內、母なる大地——への還元を象徴的に意味する。

その時もし、化學的に怒りや亂暴を起させる物を生ずる腎臓皮質が、苦惱のために適度の刺戟を受けると、復讐慾や憎惡や殺人衝動を起させる。で、その擧句には本人は刑務所に入つたり、瘋狂院へ這入つたりするやうになることもある。

四　戀愛と五官——

フリイドランダーと云ふ學者は、戀愛には性慾よりも五官の感能の方が多く働くと云つてゐるのは、或る意味では正しい。視、聽、嗅、味、觸の何れもが、戀愛に於いては重要な役割を果してゐる。精神分析で謂ふ所の露出、窃視の相反的兩本能は視覺に關係があり、接吻は味覺に、握手は接觸に關係してゐる。トルストイが『クロイツェル・ソナタ』に於いて音樂が戀愛に及ぼす魔力を說いて寧ろこれを難じてゐることは、如何に聽覺が戀愛に及ぼす力の大であることを證明してゐる結果となつてゐる。嗅覺が戀愛に重大な影響を持つことは、その皮膚の臭が相手に大きな魅力を意味することを何人も否定し得ない事實に徴して贅言するまでもなく、また香水が戀愛者の間に、或は青春者の間に、重用せられるに徴して明かである。

たゞこゝに接吻に就いて一言附加しておくが、この習慣はフロイドの云ふ如く、母の乳房を吸ふたことに起源してゐるには相違ないが、原始人の間に於いては文明人の間に於けるほどには、接吻は常住でなかつたと云ふ事實は何を意味してゐるか。接吻に就いてはギリシアの文學はあまり多くの記述を用ゐてゐない。中世紀に於いてさへ、これは敎養ある人々の間に於いてこそやゝ多く行はれたが、下層階級者の間に於いてはあまり多く用ゐられなかつたやうである。わが國に於いても、明治年間に於いては接吻は現今ほど流行せず、外國人の無暗に接吻し握手する習慣を見て、人々は寧ろ滑稽なくすぐつたい感じを受けたものであつた。が、昭和の青年たちは、映寫幕上にこれを見ても、殆ど奇異の感を持たない。接吻は文化の進むと共に、性慾を禁壓され、或は昇華してゐる者がそれの代償として、より屢々行はれるやうになつたのだと解することは、極めて自然のやうである。(完)

今にして思ふこと

今福由江

『何人あつても自分の子は皆同じに可愛い。』と世の母親達が言つてゐるのを娘の頃に聞いて私は、それを本當だと信じてゐた。一般にはさうで無ければならないと固く信じてゐ、又、さうなのが當然だと思つてゐた。母親が自分達姉妹を不公平に扱つた事に不滿を感じながら……。確かに私は數多い姉妹の中で兩親の愛情を平等に受けたとは言へない幼兒時代を過した。然し、その事を永い間忘れてゐ、一方には私は自分自身のひがみに一

人で惱まされてゐた。

精神分析に興味を持ち始めて、正直に自分の性格を反省し得るやうになつて來た頃、私は『どうも人が私の事を愛して吳れるとは到底思へない』孤獨感のために自分の、現在幸福に暮して居る事の出來る境遇を歪めてゐるのに氣を付け初めたのである。そして私の自己分析は子供の頃へと、溯つて行く事が出來た。忘れてゐた樣々な思ひ出が昨日の出來事のやうに、その時受けた衝動までハッキリと想起する事が出來るやうになつた。とかく回想と云ふものは人を感傷的にするものである。ましてあまり愛されなかつた子供の思ひ出と云ふものは、愉快でない。私はこの愉快でない思ひ出の爲めにどれ程エネルギーを浪費してゐたか、それを抑壓する爲めに、どんなに現在を惱み多く生活したか、自己分析に依つてやつと自分本來の朗かさを取り戾した今日、深い感慨に打たれる。

私は女姉妹八人の中の四番目に生れた。『今度こそ男の兒だと思つたら又女の兒で、全く穴があれば入り度い位父親に對して申し譯がなかつた』とよく母は言つてゐたものだつた。三女まではそれでも父が名前を擇んで役場へ屆けたが、四女からは、產室も覗かなかつたとも言つてゐた。然し、次の妹が生れるまでは普通に育つてゐたらしい。五、六歲の頃の思ひ出が一つあつて、人力車にゆられて一人で家に歸つた時の事である。車の中には樣々な玩具がブラ下つてゐてゆられる度にぶつつかり合つては音を立てた。其の頃遊びの劇しかつた父は母の手前、私を連れて家を出たが、しまひには邪魔になつたので、一人で私を歸してよこしたものらしい。大きな聲で泣きわめいて車夫を手古ずらしたのを覺えてゐる。その時分から、妹が身體をこわしてとても丈夫には育つまいと云ふ狀態になつて、私は母の手から離され、母は專ら妹の看病に當つた。そして、私のひがみが強くなつたと同時に、だん〳〵所謂手に負へない子になつて行つたものらしい。私の思ひ出に必ずつきまとふ一つの實に厭な言葉がある。それは時々兩親が私の目の前で、『この子は變つた子だ。姉妹中のクズだ。』と云つた事であつた。何故に親は、自分の子にこの樣な侮辱的な言葉を吐かねばならなかつたか。理由があつたにしても、子供が絕對に信賴してゐた兩親にかうした事を言はれると、成る程自分はつまらない厭な子に違ひない、姉妹中のクズに違ひないと思ひ込んでしまふ。そして、この劣等感が私の場合如何に災ひしたか。

たしか、八歲の頃であつたと思ふ。原因は忘れたが、私は母の怒りにふれてひどく體罰を加へられた事があつ

た。その時母は、『こんな子は殺してやる』と繰り返し〳〵て私の身體を打ち、目に一杯涙を溜めてゐた。その時、私は我を忘れて、「母ちやんに殺されなくとも、あたい自分で死ぬよ」と思はず絶叫したのを覺えてゐる。母はそれを聞くと尚怒りが募つて、「この子はこの通りひがんでゐる」と罵つた沈痛な聲音をまざ〳〵と覺えてゐる。だが、私は決して惡意があつて言つたわけではなかつたのだ。自分の樣な厭な子が死んで了つたら母は喜ぶだらうと云ふ、寧ろ母に同情した餘り、逆り出た叫びであつたのだ。それ程、母の怒りの中に愛情を見出せず、憎惡されてゐる自分が悲しかつた。結局は止める人などあつて、體罰はそれで濟んだが、あと暫くの間、子供心にも母に約束した「自分で死ぬ」事の不履行が氣に懸つてゐた。

私の劣等感を刺戟したもう一つの事は、容貌が醜かつた事で、それを又、親達や姉妹に折にふれて口にされたのも、當時の私にすれば大した苦痛であつたのだが、抑壓してゐたらしい。そして反對に顏の事には一切無頓着になつて行つた。後年のかまはなさは、それに由來したと思つてゐる。九歲位の頃、それは夏であつた。長姉が齒醫者に行くについて私を連れて行つて吳れると云ふので、喜こんで着物を着代へて姉を待つてゐた所へ、妹が歸つて來た。すると姉は實に無雜作に私との約束を外して妹を連れて行つて了つたのである。その食言の理由は私より妹の方が見た目に可愛いかつたからと云ふ、甚だ私にとつては傍若無人な姉の考へであつたし、それを知つてゐた母も何も言はなかつた。私は二階の窓から、妹を連れて行く姉の後姿を見て、こゝから飛び降りて死んで了はうかしらんと思つた。其の時の感じには、自分が侮辱されたとの心外さが隨分强かつた。私は小說類を讀み耽ける事を覺え、その中へ逃避して行つた。

今自分は子供を持ち母親としての苦痛や歡喜を交々に味ふ時、つく〴〵思ふのは、子供を平等に愛する事の困難さである。何人の子供でも皆同じに愛してやる事が出來ると云ふ人があるが、それは意識されざる噓か又はかくあり度いとの願望に過ぎないのではなからうか。かう正直に感じてはじめて母の不公平な愛情も亦止むを得ざる其の場の仕儀であつたのであらうと、母の精神生活の不幸を想ふ念が深い。そして私が、淺薄ながらも自己のコムプレクスを分析し得て、子供への愛情に自信が持てるやうになつた幸福を、自分で嬉しく思つてゐる。(完)

初戀ガイド

高橋 鐵

(A) 初戀の口上——分析的意義

オギヤアと云ふ聲と共に、持つて生れたリビドウが肉體の發展に從ひ育つて行き、自我の核も形が備つて行くと、醇化(ズブリミーレン)されたリビドウは何かのチャンスに於て一つの對象に纒綿する。これが初戀てふ甚だロマンティックな人生エピソードとなるのである。

初戀は末の仕末の念はなし
初戀は戀と知らないうちに過ぎ
初戀は惚れたツきりの日が續き
初戀の漸う家を見屆ける
只歩くだけを初戀呼びに來る

等々の一聯の諧謔詩が描き出すが如く、くだらない程淡いものではあるけれ共、人間と生れた以上誰にでも胸に覺えがあるだらう程に普遍的で、誠にハシカの樣な現象である。

併し、それにしても決して無意味なものではなく、いはゞリビドウを昇華(醇化)し得ると云ふ一の確證の記念碑と考へてもいゝであらう。そして尚、これを契機として個人の自我機能は一段階を飛躍して行く。

(B) 初戀は幾歳(いくつ)頃?

初戀期は前述の樣な一段階として重要視すべきものでレミ・ド・グールモンは "Un Coeur Virginal" に「女達はその最初の接吻の時に死への第一歩を踏み出す。・・・同時に又生き始めるとも言へやう」——と書いてゐる程である。

所で今から丁度十年前千九百廿四年紐育の醫學者G・V・ハミルトン氏が同市在住の既婚の智識階級男女百名宛から性生活のいろ〳〵についての囘答を求めた事があつて、其の一項目として「初戀の年齡」がある。それによると、

	六歳迄	七歳十一歳	十二歳十四歳	十五歳以上	無經驗
男	四名	四十名	卅一名	二十五名	ナシ
女	七名	卅八名	廿九名	二十三名	三名

と云ふ結果で、斷然七歳より十一歳迄に初戀を經驗した

者が多い。その次が十二歳より十四歳迄の經驗者と云ふ事になる。

目下座右にある實例二三を擧げて見れば――

スタンダールは七歳にして「子としての愛ならざる愛を以て母を愛した」さうだし、好色一代男の世之介は同じく七つの夏の夜半「戀は暗といふことを知らずや」と女を口説いたさうである。伊太利の好色一代男カザノヴは十歳の折十三歳の少女と戀のアヴンチュールを果した。

又、小市民小説家淺原六朗氏は八歳の時十歳の少女に愛着し、ダンテは九歳の春、永遠の戀人ビアトリーチェを一目惚れした。革命的思想家ルソーは十一歳にして二人の女に熱情を捧げ大衆詩人西條八十氏は十一歳にして二つ上の軍人の娘に胸こがしたと云ふ。

源氏物語の光源氏の君も十二歳で元服する迄に一生の好色史の元となつた義母藤壺に散々まとはりぬいたではないか。

十一歳以後の初戀は星の數ほど限りないから省略するが、これによつて見ると、初戀は――從つて人生は――七歳よりと云ふスローガンが一應許さるべきであらう。

(C) 男の初戀・女の初戀

B章の實例二三によつても奇異に感ぜられる事は、男性殊に感受性の強いであらう少年の初戀の對象が概して年上である事である。

以上早熟組の例のみでなく、エドガー・アラン・ポーは十五歳で友達の母スタンナード夫人を熱愛し、彼女の死するや悶々として弔ふ事數ケ月と云ふ記録を有し、シェイクスピアは十八の折既に六つ年上のアン・ハザエーを姙娠させて結婚してゐるし、今尚世界の支配階級を戰慄させてゐるカール・マルクスは一生の好伴侶エニー夫人が四つも年上であるにかゝはらず純情の限りを盡して廿歳の折、婚約迄漕ぎつけた。

又、ツルゲネーフ自身の投出しであると云はれる彼の傑作「初戀」の主人公は十六才にして、廿一歳の妖艶な公爵の娘に頤使されて欣んでゐる。

もつと卑近な例に近寄れば、探偵小説家甲賀三郎氏の話では、同氏は十二歳で踊りのお師匠さんに綿々と纒綿し、漫談幇間大辻司郎氏は十八歳の時、一つ年上のミルクホールの娘を感傷的にはつたさうである。

之等は考へるに男性の初戀であつて、その對象となつた女性側は既に初戀を經過した人であるかも知れない。そして飜つて女性の初戀を見ると、そこには、天の星よ地の菫（すみれ）と云つた風な、偏（ひとへ）に夢の様な一様の過程を見る事が出來る。まこと、ピネロの言葉の様に「女の最初の戀

は信仰である」以外何物もない様である。

彼女等は醇化されたりビドウを美しい者、偉いもの、完全なものとしての一對象に纒綿し、そこに性をシムボライズした面影(イマゴー)を描き、男性器羨望(ペニスナイド)から起る不安――やるせなさを補償せんとするらしい。その爲に數多くの例を見ても、彼女達の對象は何等變化なく、級長であり模範少年であり旅役者であり時の英雄である。

此の狀態は、大衆が胸に抱いてゐる不朽の初戀物語をみれば釋然と判明する。一葉女史作「たけくらべ」の美登利は勝氣な娘のくせに、群を抜いて悧巧でおとなしい信如に內心憧憬し、モーパッサン作「女の一生」のジャンヌは十七歳の時、眉目麗しい子爵に身も心も打委せ、「ファウスト」のグレエチヘンは天から降つて來た樣な美青年に忽ち誘惑されて了ふ。八百屋お七は人形の様な小姓吉三に魂を飛ばし放火の罪を犯して了ふ。又ジュリエットは十四歳でロミオに魅惑され、浪漫的な死に殉じて了つた。E・T・C

つまり、初戀に於ては、兩性とも、以後の凡ゆる戀に比して、最も純粋に、スタンダールの說く結晶狀態、卽ち對者の盲目的美化とマゾヒズム的崇拜を見る事が出來る。

初戀期の彼等は、所謂春の眼醒め――リビドウ醇化の第一歩に逢着し、性機能の神秘を體驗しエスの偉力を仄かに感ずる。そして性の象徴化された面影(イマゴー)に對して只管マゾヒズム的崇拜を捧げ、またそれと人類傳統のタブーとの葛藤を經驗する。

そこで、後年に於る戀愛とは異り、男性も女性も殆んど一様にマゾヒズム的要求を滿足させて貰へる様な戀愛對象に向ひ、それに依つてマゾヒスティクな戀愛過程を辿らうとする様である。

(D) 個人の神話、初戀の投ずる影響

ピネロの「女の最初の戀は信仰である」と云ふ言葉はまだ續く。曰く「もしその的(まと)が價値ある時には、それは彼女の一生を聖めてくれる」と云ふ。

實際、男性にしろ女性にしろ初戀に於ては魂拔けた様に所謂性的開花を果すので、對象が既に戀愛の體驗者であつたならば其の戀は一層マゾヒズム的要求を滿足させ、そして自我機能を成育せしめる。

その後、男性は概してサディズムに移行し女性はマゾヒズムをそのまゝ持續するのが多いが、いづれたるを問はずいかなる人も初戀に對する關心は相當大きいものゝ様である。例令アルバート・モーデルの精神分析學的文學評論書「文學に於る性愛的基因(エロティック・モーティフ)」に引例してある様

に、E・A・ポーは十五歳の折戀慕した友人の母の早死に會して衝動(ショック)を受け、そのために彼は屢々女性の死を作品中に描いたのだと分析し得るであらうし、又シェリーは初戀人たる從姉ハーリエット・グローヴに十九の年、思想及び見解が不滿であると云ふ理由で結婚を解消された爲、全生涯を反逆的な創作で通したのだと考察し得る。

ゲーテは十四歳の頃戀したグレーチヘンに非常に子供扱ひされて、後年の大作「ファウスト」に崇高な少女グレーチヘンの姦淫される樣を描いた。ルソーは八歳の時に牧師の娘に懲罰としてお尻を平手で叩かれ、その時のマゾヒズム的快感を後年「懺悔錄」の中に表現した。

卽ち人々は意識的にも無意識的にも常に初戀を回想してゐるのである。何故かならば、人々は過去の幼稚なマゾヒズム的戀愛狀態に對してナルチスティッシュな憧憬を持ち、少くとも初戀期よりも荒んでゐる現在の性愛態度に多少の罪惡感を持つてゐるから：：。

そして初戀のロマンスは演劇に文藝に映畫に美術に音樂に不朽の題材を供し、乳酸菌飲料カルピスはその柔軟な甘酸つぱさを「初戀の味」に似てゐると宣傳してゐるのは相當頭がよい。また櫻草やリラはその淡い甘美さによりその花言葉は初戀を意味することになつてゐる。

早く云へば初戀は自我史上の神話傳説でありハシカ的外傷であるから、此の現象を單にロマンチックに許り經過せしめないで、宜しく後車をしてリビドウ醇化の大道を疾駈せしむべきではなからうか。――稿を閉すに臨み前車の一轍を述べておく所以である。(完)

戀愛研究文獻鈔

一、「戀愛の研究」神田左京著
大正十年四月三十日、越山堂。

一、「予の戀愛觀」中桐確太郎著
大正十二年、小西書店。

一、「戀愛の殉教者」本間久雄著
大正十二年七月二十五日、小西書店。

一、「近代の戀愛觀」厨川白村著

一、「戀愛の心理」森田正馬著

一、「分析戀愛論」フロイド原著、大槻憲二譯

講座

初戀の心理

大槻憲一

初戀のみならず、第二戀愛でも、第三戀愛でも、一般に戀愛は人々を幸福にするものです。人間を幸福にするものとしては、富貴、名譽、善事、事業など、多くありますが、戀愛はその最も根本的な、最も力强いものゝ一つです。富貴に望みなく、名譽に執着なく、善事に興味なく、事業に感激のない人もありませうが、戀愛に歡喜と幸福とを感じない人は稀であります。もしありとすれば不健康な人であると云つて差支へありません。併しながら、戀愛ばかり人を幸福にする事の大である代りに、人を不幸にする事も大なるものはありません。得戀の大きな歡喜は人々を天上に昇らせますが、失戀の苦惱は人々を地獄につき落します。さうして一度、戀愛地獄の痛手に負ふた傷は遂に癒えることなく、その人の一生の運命をさへ決定することが屢々であります。恐るべきは戀愛であります。その故に、古聖賢はみな口を揃へて戀愛の避くべきことを敎へてゐます。併し、戀愛は生物の權利であり義務であつて、これを避けることは絕對に出來ません。只、少數の選ばれたる人々が、戀愛に用ふべきエネルギーを純化して、これを別途に使用してゐるに過ぎません。彼等もまた戀愛してゐるのです。たゞその表現形式が違つてゐるだけであります。それ等の變形したる戀愛に就いてはまた、段々お話しする機會があるでありませう。

そのやうに戀愛は樂しく恐ろしい魔物でありますが、殊に恐ろしいのは初戀であります。何故恐ろしいかと云ふに、初戀は盲目だからです。戀愛はどうも盲目になり勝ちですが、初戀は殊にそれが甚だしいのであります。

何故に初戀に於いて殊に、人々は盲目になるかと云ふに、それは當人がまだ斯道の無經驗者であるばかりでなく、その愛慾本能が力强く猛烈であるからです。猛烈であるためにその本能力を支配することが一層困難だからです。

そこで、戀愛（この場合初戀）の危險を避ける方法としては、從つて戀愛の幸福のみを十分に享愛すべき方法としては、第一に、戀愛の何たるかを知つて、經驗者と

同じほどな豫備知識を得てかゝることゝ、第二には、自分の愛慾本能を支配し得る力を具へることゝ、この二つであります。

我々は何か面白い遊びをしようとする場合には――甚だ卑俗な例を擧げて恐縮だが、コリント・ゲームでも麻雀でもいゝ――、それに必要な豫備知識を備へてかゝらなければなりません。野球でもトランプでも一定の規則(ルール)があります。これを知らずして取掛つたならば、みな大失敗をして、ひどい目に會ひます。それと同じで戀愛にも戀愛の規則(ルール)があります。ところが、戀愛にばかりはすべての青年男女が何等ルールの豫備知識なしに乘込んで行きます。これほど危險なことはありません。初戀が、その名は美しい拘らず、大抵は悲慘な結果に終るのは、實にルールを知らざるゲームに、行きなり乘込んで行く輕率者の無知亂暴のせいであります。

戀愛を遊戲にたとへるのは不謹愼だと批難される方があるならば、職業に例へてもいゝです。我々は事務員になるにしても、會社員になるにしても、學校教師になるにしても、必ずその職業に必要な豫備知識が要ります。それがなければ第一先方で採用してくれません。併し戀愛ばかりは豫備知識がなくても採用だけはしてくれますが、直ぐにひどい目に會はせておいて馘首する恐ろしい傭主です。

戀愛を就職に例へてもなほ不眞面目だと云はれる向があるならば、それならば學校にたとへてもいゝです。我々は何處かの學校に入學するには、必ず、その學校の先生の良否、建物の具合、學風の傳統、並びに自分の家庭の經濟事情、才能の素質、健康狀態などを吟味してから入學の決心をするでありませう。それをしないでは輕卒の誹りを免れません。

では、戀愛のルールの第一條は何でありませうか。これを箇條書きにして話し出すことは論を抽象化して分り難くします。で、私はまづ具體的な例の一二を擧げて臨床的に講義をして見ませう。その方が分り易いでありませう。

次は何れも諸方の新聞の相談欄に見えた事實です。第一のは文章がなかなか上手ですから、そのまゝ轉載して見ます。

第一例――

『戀とはこんなにも淺ましいものか。人知れず劫火に身をこがす一人の乙女をお救ひ下さいませ。今年の三月までは幸福に自家で商賣をしてをりましたが、故あつて人に店を貸し、私は只今の家へ奉公いたしました。初めての奉公、たゞ理由もなく泣けて仕方のなかつた頃、風邪

を引いてすつかり咽喉をいためてしまひました。咽喉を使ふ商賣故、その辛さ悲しさ、そこに親切の手をさしのべて下さつたのが主人でした。

感謝の念がいつしか戀へ、道ならぬ戀心にまざ〳〵見せられる人間性の淺ましさ。併しそれは越えてはならぬ一線でした。二人のお子様まである夫婦仲、しかも甘い〳〵ロマンスは、店へくる客から度々聽かされてゐるのに、やけて仕方のない私。その時思いがけなく主人から戀の告白を受けて不安と恐怖に戰き乍らも強く〳〵燃え上る歡喜、私はグン〳〵男に引ずられるばかりでした。それからの私は毎日不安の内にイラ〳〵してゐます。

主人夫婦の仲のよいのが私への見せつけのやうで、荒波のやうな私の心の起伏。全く自分にして自分でない様な嵐の中にもまれてをります。主人はずつと冷たくなりました。でもその時だけはやさしい言葉をかけてくれます。先生お笑ひ下さいませ。そんな冷たい主人でさへ憎むことが出來ない私です。主人はお前は外の事は考へずに俺に賴つてをればいゝのだと申します。人形ならばそれでもいゝでせう。この渦中から逃れるため折よく是非來てくれと云ふ店があるので、そちらへ行かうかと思ひますが、何も知らぬ父母は成るたけ同じ店にゐて長く辛抱せよと申します。併しその理由を私は父母に話せません。戀にとらはれの弱い女心、どうぞ進路をお示し下さいませ。』（野の花）

第二例——

『私は女學校卒業後、只今のところへ見習奉公に參りました。さうして御主人樣の行動と、あまりにも清く美しい御心に私は心から師の如き尊敬と、父なき身の父の如き愛慕の念を抱くやうになりました。

然し、凡ての男性はあくまで色魔的氣分の持主なのでせうか？　私の上にも誘惑の魔の手が延されたのです。が、あまりにも敬慕の念に燃えてゐた私は、遂に許してならぬものを許して了ひました。けれども感激からさめた時には頭も胸もはり裂けるばかりの汚辱を感じ、何とも云ひ知れぬ惱みに襲はれました。私が許した動機はたゞ純眞この上もないものでしたけれども、御主人樣の動機は誘惑であつたことが殘念で殘念でなりません。御主人樣の心を信じて信じ切れず、憎んで憎み切れず、日夜私の心は動搖しつゝ激しい焦燥と戰つてゐます。

『人を疑ふことは自分をも信じられない事で、認識不足に陷つてゐるわけだ』と御主人樣は仰有ります。私は飽くまで純な氣持で信じて行くべきでせうか。主人は『僕がお前に對して如何に眞心と愛とを持つてゐたかといふことはこれから段々に證明して行く』と申します。

家庭では奥様との間も至極圓滿です。『お前とは一生心の交りをしようと誓つたのに、心が變つたか』と申してゐます。』(Ｈ)

私は以上二つの實例を報告しただけで、もう惱ましくなりました。あゝ何と云ふ氣の毒な方々でありませう。讀者諸兄姉の内にも、右の報告を讀んで我が身につまされる方が少くないでありませう。まつて下さい。やがて私がその病源——敢て「病源」と申します——を明かにして御覽に入れませう。さて私は次の例に移らねばなりません。

第三例——

『私の家に永年奉公してゐる女中（當年廿五歳）の戀愛問題につき御意見を伺ひます。日頃大變快活な女中が、最近物思ひにふけるやうになり、先日思ひあまつたのか同年配の私に總てを打明け相談をしてくれましたが、私も全く返事に窮して了ひました。話に依ると、女中の命をかけて戀する人と云ふのは、私の家の知人で五十を超えた妻子ある人なのです。

その人は現在東京近縣に居住してゐますが、奥様と氣性が合はないため家庭的には甚だ惠まれず、東京へ來るのが何よりも樂しいと云つてゐます。人格的にも大變優れた人なので女中の心も尊敬から戀愛へ變つたのだと思ひます。

此の女中も又大變眞面目な女ですが、年齢の差などは問題でない、せめて東京へいらした時だけでも心から慰めてあげたいと云ふのです。私も全く困りました。と云つて、相手は妻子のある人です。私の母や姉にこの事が知れると女中も家に居られなくなると思ひます。

全く思ひつめてゐるので、あまり強い意見も出來ないのです。一應先方の男に話して見ようかと思ひますが、とにかく一應御意見を伺つてから決したく思ひます。よき解決法をお敎へ下さい。(日本橋、初子)

以上、私は女の初戀の例ばかりを擧げて來ました。次に、私は男の初戀の例を擧げませう。

第四例——

『私は廿八歳の人妻で御座います。主人が或る研究に從事してゐる關係上、廿二三歳の學生が大勢出入りしてゐます。私も結婚後數年たつても愛兒に惠まれませぬ爲、淋しいまゝに主人に代つていつも青年達の相手をして居りました。丁度大きい子供や弟が澤山出來たやうな氣持で、私の家へ來れば家へ歸つたやうだと喜ぶ學生さん達の顏を見ては主人とも喜んで居りました。

その内の一人にＡ（廿三歳）と呼ぶ近縣の素封家の長男もをりましたが、大變おとなしくていつも淋しさうに

隅の方にばかりゐる人でした。主人もよく青年の意氣を出すんだと勵まし、私も母のやうな氣持でいたはつて居りました。處がどうしたものか、此頃私に對して非常にはにかむやうになり、私が横を向いたりすると激しい熱つぽい視線を向けるやうになりました。

然し、かゝることは輕々しく主人に話すべき事でないと、色々注意してA青年の樣子を見てゐましたが、明かに私に對して戀情を寄せてゐることが分りました。この事は既にAの友人間には評判になつてゐるらしく、内氣な性質が私の宅へ來ると、餘計に固くなつてゐるやうでした。

一時は私も當惑いたしましたが、何よりも此純情の青年の前途をあやまらさぬやうにしなければならないと思ひ、色々考へましたが、結局考へは同じところを循環する丈です。主人に相談すべきか、私が納得行くやうに此の青年に話したものか、Aの出入を斷然止める事も考へましたが、それは却つてAを横道へそらさしめる事ではないでせうか。』(麻布區、雪枝)

以上四つの實例を比較研究して見ますと、そこに非常に澤山の共通點があることを我々は直ちに認めないわけに參りません。私が殊更に類似のものばかり集めたものゝやうにお思ひになる方々があるかも知れませんが、純情的な初戀と認められるものを求めると、みながう云ふ型になつて來るのであります。他にもまだ〳〵澤山に類似のものがあつて擧げ切れないほどですが、現にみなさんも、既に初戀の御經驗濟みの方々は、自分の過去をふり返つて御覽なさい。大なり小なり、これ等の何れかに非常に類似してゐたことを、承認されるに相違ないと私は信じてをります。

では、どう云ふ點が共通してゐるかと云ふに、――

第一、非常に年齢の相違があると云ふことです。それも愛す方が若くて戀せられる方が遙かに年長であると云ふことです。併し第一例や第二例は娘の方から戀したのではない(誘惑された)やうに本人達も云つてゐますし、皆さんもお信じになることゝ思ひますが、私は認めません。誘惑される前に、既に年長者に祕かに戀心を寄せてゐたことは、明かに文字の裏面に見えてゐます。でなければ、どうしてこの不自然な關係に未練がましく執着したり「歡喜」を覺えたりしませう。

第二は、相手を「父の如く尊敬」してゐることです。母の如く慕つてゐることです。各實例の本人達はみな明かにこのやうな表現をさへ用ゐてゐます。第二例の人は「師の如き尊敬と、父なき身の父の如き愛慕の念を抱くやうになつた」と云つてゐます。さうして「敬慕の念に

燃えてゐた私は遂に許してならぬものを許して了ひました」と云つてゐます。どうして「敬慕」する人に「許してならぬものを許し」たりするのでせうか。これは常識から考へると理解出來ないことです。「尊敬」と「不倫」との間に何の關係がありませう。全然無關係どころか、却つて相反の心理のやうに考へられます。而も實際に於いてこの二つの心理過程の中には密接な關係のある事が、科學的研究の結果分つて來ました。

第三例の人も相手の老人を「人格的に大變優れた人」と云つてゐます。然るにやはりその人格者を「慰めてやりたい」――言葉は大變美しいが、露骨な表現を用ふれば「不義な關係を結びたい」と云ふことになります――と云ふのです。これは大きな矛盾ではありますまいか。

第三の共通點は、何れも必ず三角關係であることです。みな相手は子供まである既婚者ばかりです。既婚者との戀慕が不幸な結果に終らなければならないことは、馬鹿でない限り、誰にだつて分りきつたことではないでせうか。それがやはり分つてをりながら三角關係であることが、初戀を燃え立たせる一つの重大な契機となつてをります。誰か「憤る第三者」がなくては初戀の亢奮は感ぜられないものであるかのやうです。

第四は、第三と同じことかも知れませんが、彼等が、到底貫徹出來ないことを、貫徹出來ないと分つてをりながら、行はうとしてゐることです。詩人イプセンは「到達すべからざるものを獲んとする高らかなる歡喜」と云ふ言葉を用ゐてゐますが、初戀が一つの詩であるためには、やはりこの貫徹し得べからざることを貫徹しようと強いて自分自身を無理な立場に置いて悲劇の主人公に仕立て上げて了ふ傾向があると云ふことです。

以上、私は初戀の共通點として四つの要素を擧げて來ましたが、どうして斯くも不自然な、誤つた戀愛が斯くもなつかしく魅惑的なのでせうか。みなさんの內には、自分の初戀はさうでなかつた。相手はもつと若かつた。三角關係でなかつた。……と云はれる方があるかも知れません。併しそれが本當の初戀であつたならば、本質に於いて必ずから云ふ型をとるに相違ないと私は斷言してもいゝのです。假りに、相手の年齡が若かつたとしませう。併しその若い相手に對してやはり年長者に對する心持を寄せてゐたに相違ないのです。若い者を年長者として見ると云ふ事は一寸考へられない事のやうに思はれます。併し實際に人間の心理を分析して見ますと、から云ふ事はよくあるものです。例へば、學校の老小使が若い校長などに對する態度を見て御覽なさい。自分の方が校長よりは年長でありながら、その心の持方はまるで子供

が親に對する時のやうであることが屢々であります。否親でさへも年とつてからは立派に成人した子供を親のやうに見てゐる人がよくあります。

話が少し脇へそれましたが、初戀の要素を研究して以上のやうな不思議な特徴を發見したとしますと、その源因はどこにあるのだらうかと云ふ事が何人にも問題になつて來ます。新しい心理學の研究したところに依りますと、これ等の源因は驚いたことには、本人達の過去の經驗にあることが分りました。彼等は過去に於いて幼時期に於いて、正に殆どこの通りの經驗を嘗めて居ることが分つたのであります。從つてこれは名は初戀ではあるが、さうして常識的な意味では慥に最初の戀ではあるが、學問的な意味では、初戀ではないのです。嚴格な意味では、彼等の初戀は幼兒時代に既に經驗されてゐます。思春期に於ける初戀は、その幼兒期的初戀の反覆であり、再經驗であるのです。では、さうしてそれが思春期の初戀とどんな關係を有つのでありませうか。それはエディポス・コムプレクスと云つて、讀者諸氏の既に御存知のことゝ思はれます。（「人生創造」二月號から轉載）

精神分析語彙（十二）

一、第二次仕上げ――夢はそれ自身、夢の仕事に依つて仕上げられてゐるものであるが、覺醒時には意識の干渉に依つて第二次仕上げが更に附加せられて、愈々解釋に困難なるものとなされる。

一、妥協――相葛藤する二つ以上の心的勢力（例へば本能と禁制との如き）が、互に歩み寄つて、双方が多少づゝ讓歩しつゝ、また同時に自己の主張を貫徹する。その結果が妥協である。前號講座欄參照。

一、男根期――男性器に未だ性殖器としての性的統裁力なき時期。並びにそれに相當する時期の女兒が陰核に依りて性的亢奮を知る期間。

一、男性器嫉妬――去勢コムプレクスの女性に於ける反應の一つ。

一、男性的抗議――アードラーの造語。優越慾の顯現。

一、團體結婚――フイソンの所謂團體結婚 Gruppenehe の本質は一定數の男子が一定數の女子に對して結婚權を行使することなのである。この結婚から生れた子孫は、皆が一人の母から生れたのではないが、お互に正しく兄弟姉妹と見做されて、その團體の總ての男子は彼等の子と見做されてゐる。」（フロイド「トーテムとタブー」）

一、團體動物――トロッターが人間は群集動物 Herdentier で

あると云つたのを、フロイドが訂正し、「人間は寧ろ集團動物 Hordentier であつて、換言すれば、人間は首領に依つて率ゐられて團體をなす個々の生物である」と主張してゐるのである。(「集團心理と自我の分析」第九章)

一、談話療法――ブロイヤーが扱つた少女患者がブロイヤーの施した發散的な精神療法をかく呼んだのである。また彼女はこれを「煙突掃除」とも呼んだ。精神分析法はつまりこの談話療法の進化したものである。

一、中毒妄想――神經症的不安のために食物を攝り得ないことを云ふ。

一、稚氣――「滑稽と同じ種類で、機智に最も近いものは稚氣 das Naive である。稚氣は滑稽と同樣に一般には、見出されるもので、作されるものではない。併し純粹の滑稽の場合には、滑稽を作すこと 滑稽を喚起することは考へられる。稚氣は我々の干渉はなくとも、他の人間の話し振りや行動に現れるものである。」(フロイド「機智とその無意識に對する關係と」)なほ「機智」及び「滑稽」の條參照。

一、知識の忘却――既に一度意識化されたことの忘却。

一、チック――筋肉痙攣症。

一、血の恐怖――未開人の女がその月經期間中に服する無數のタブー禁制は、血に關する迷信的恐怖に基いてゐる。が、そこにはまた美的、衞生的の目的を持つたものも存してゐることを、見遁してはならない。(「トーテムとタブー」第三章)

一、恥毛――Schamhaar

一、超過補償――Überkompensation の譯。例へば他人から五圓を盗んだ泥棒が氣の毒になつて、これを六圓にして返す如き場合ありとすれば、その差額一圓だけが超過補償で、返された五圓は普通の補償である。これは意識心理に就いての實例であるが、これを人々は無意識的に行ふ。無意識の補償は多くの場合、超過的になされる。

一、腸管出産觀――Cloaca Theory の譯。幼兒的出産觀の一つである。童話や神話に於けるが如く、幼兒もまた屢々、人間は鷄卵の如く通路のやうな腸管から生れると考へてゐる。「出産觀」の條參照。

一、徵候行爲――症候行爲とも云ふ。Symptomhandlung の譯偶然行爲と同義。「行爲者自身が思ひも寄らない或るものを且つ行爲者が概して他人に知らすことの意圖はなく、寧ろ自分自身の内に祕しておかうと目ざしてゐる或るものを表現する」(フロイド「日常生活」)如き行爲である。略言すれば「計畫せざる行爲」(フロイド「療法論」)である。

――未完――

内外彙報

「分析運動」誌昨年度第五册

一、『悟性と感性』――英國のアーネスト・ジョーンズ及びシリル・バート兩學者の間に交された對話の形をとり、學校心理學と精神分析學との差違を論じてゐる論文。

一、『エッケルマン論』――エドゥアルト・ヒッチマンがヰインのゲーテ協會に於いて一九三三年二月四日に試みたる講演。エッケルマンは『ゲーテとの對話』の著者として有名であるが、この論文は、エッケルマンとゲーテとの間の父子コムプレクス的關係を分析的に研究したもの。

一、『精神分析と世界觀』――ヰインの分析學者ハインツ・ハルトマン稿。精神分析學は科學であつて哲學ではないから、世界觀には直接關係がないが、新たに發見せられた科學的知識は必然的に世界觀に變化を及ぼさなければならないことは、ガリレオやダーヰンの科學思想がキリスト教の世界觀を動揺させた事實に徵しても明かである。フロイドは「精神分析新講」の中で精神分析學と世界觀との關係を論じてゐるが、本稿はその論を契機として同じ問題を敷衍してゐるのである。

一、『白日夢と罪惡感』――パリの分析學者R・A・ピッツ稿。英國の小說家リチャード・ヒウズの『ジャメイカのの暴風』と題する小說を分析しつゝ、白日夢と罪惡感とに就いて論及したもの。

一、『性格構成と精神分析』――ニウヨオクの分析者サンドル・ロウランド稿。或る個人の性格とはその人の本能が社會的環境に對して示す反應の總體である…とのアブラハムの命題に一致してゐる。

一、その他、新刊圖書及び雜誌所載論文の紹介。

「分析運動」誌昨年度第六册

一、『老衰、靑春及び美の心理學的源因』――ヰインのアリース・スペルバー稿。性的エネルギーを早く浪費したりするよりもそれを遲くまで保留してゐたものゝ方が、比較的に云へば、永く若々しさを保つてゐることを證明せんとした論文。

一、『日常生活に於ける無意識的願望』――ロンドンのエドワード・クラヴー稿。フロイドの「日常生活」以來、古くて新しい問題であるが、グラヴーは日支間の滿洲事變の間、八ヶ月の久しきに亘つて、英國の諸新聞紙が新聞の第一面を蟋の脚の理論に依つて占領せしめ、極東からの報導を「抑壓」してゐたと云ふ事實を一例證として擧げてゐるのは我々には一層興味が深い。

一、『今日の傳記は精神分析の見方を採用す』――ヰインの分析

者エドムント・ベルグラー稿。現代の出版界の一つの著しい傾向は、傳記文學である。それも舊來の型にはまつたものでなく、科學的（分析學的）な方法でなされるものが多い。さう云ふ事實とその樣相とに就いて論じたもの。

一、『若い娘と老婦人』（未刊書「喜劇の內に見られる悲劇」の一節）――ギインの分析者テオドル・ライク稿。――喜劇的な事柄も、よく考へて見ると笑つてばかりゐられぬ事がよくある。その理由を分析的に研究したもの。

一、『エッケルマンのゲーテへの傾倒に就いて』（エッケルマンの二つの夢に就いて證明す）――ヒッチマン稿。前號所載論文續篇。

一、グラヴーの戰爭心理論の批評――本誌第一卷第七號所載、岩倉氏譯論文の批評。

一、フリードリヒ・ヘッベルの日記中よりの精神分析的箴言の拔粹――、本誌本號が「戀愛心理研究號」なるに徵し、戀愛に關する二三を拔粹すべし。「戀愛とは自己を他人の內に高めることなり。」「男の中の女は男を女に牽寄せ、女の中の男は男に反抗す。」「子供は兩親の自己愛の自然的派生なり。」「愛は自己愛を防ぐが故に尊し。」等。

一、その他、新刊批評。

×同誌は最も通俗的な分析雜誌であるが本號を以て終刊とす。他の獨文斯學雜誌三册及び年鑑は勿論續刊。

ポーの分析研究書出づ

ギリシア皇女マリイ・ボナパルトはパリに於て分析學者として活動し、既に「幼兒性感論」や「母なき或る少女の分析」など多數の分析學的著書のある人であるが、この度「エドガー・アラン・ポーの精神分析的研究」と題する大著を公にした。同書は元、フランス語で、書かれたものであるが、ドイツ譯も出來、フロイドの序文が附いてゐる。全部三卷、四部から成り、第一卷（卽ち第一部）は「生活と文學」、第二卷（卽ち第二部）は「種々の作品に循環出現する母」、第三卷（卽ち第三部及び第四部）は「種々の作品に循環出現する父」、と「ポーと人間精神」とに就いて研究してゐる。

最近國內事實

★『接尾語 mal の機構に現れたるZの無意識心理斷片』小野田幸雄氏稿――『エスペラント研究』五月號。

★讀賣新聞、六月四日紙上「綠蔭藝話」欄に、江戸川亂歩氏と同氏記者とが、探偵小說と精神分析學との關係に就いて語り合つた記事掲載。

☆本誌特別誌友梅木米吉氏編輯「時代」（山形縣）六月號に喜多川泰世氏の分析的小說「惡い日」出づ。

★「大日本經濟通信」五月十五日號に、精神分析學研究家としての岩倉具榮氏を推讃する意味の記事を掲載。

★『マクベスの精神分析的鑑賞』大槻憲二氏稿（日本シェイクスピア協會本年度會報）

★『心理學から見た人道愛について』大槻憲二氏稿、（「人生創造」六月號）

★『同性愛の精神分析』大槻憲二氏談。八重洲園の女給たちの間の同性愛事件に就いて讀賣新聞六月十五日號家庭欄に掲載

★『治療方面から見た精神病』式場隆三郎氏稿——讀賣新聞六月十五日家庭欄。

★『精神病學に於ける佯詐概念の發達』——柴田潤一氏稿（「腦」第七卷、第八卷別刷）

★本誌五月號内容に關しては、卷末廣告欄を參照ありたし。

本研究所研究會五月例會

五月十四日、例によりアメリカン・ベーカリに開く。前號にも報告しておいた通り、本例會から、會の始めに一時間ほど講義を催すことになつた。卽ち、大槻憲二氏「部分本能」に就いて講義した。その後、座談の形となつたが、雜誌經營の事情について編輯部からの報告と相談とがあつて、會は比較的早く閉ぢられた。出席者は、大久保眞太郎、立川玄一郎、松居桃多郎、小松德、生形要、奥村博史、小山良修、高橋鐵、長谷川誠也、霜田靜志、長崎文治、大槻岐美、大槻憲二の諸氏であつた。

本研究所研究會六月例會

六月十四日、アメリカン・ベーカリに催す。會の始めの講義は「性感と性格との關係」に就いてゞあつた。食後、司會者は新出席者（文理科大學心理科出身）山本鎭雄、（同潤會勤務）武俣勇往の二氏を紹介し、研究談は兒童教育に關することに主題をとり、霜田靜志氏は氏の取扱はれた兒童等に就いての經驗として「鍵の話二つ」をせられた。また大槻氏は「田植に女を殺す民俗の分析的研究」を述べられた。

出席者は右言及の諸氏の他、小松德、小杉長平、大槻岐美、大久保眞太郎、立川玄一郎、高橋鐵、長崎文治、生形要、小山良修、岩倉具榮の諸氏であつた。なほ長谷川誠也氏は出席せられたが、急用あつて早く退席せられた。眞面目ないゝ空氣の會合であつた。

相談

奥さんに申譯がない

問——二十一歳になる女です、幼い時父母に死別れ、或人の

お世話で今の家に女中に來ました、忙しい商賣で一生懸命働きますので主人夫婦に可愛がられて居ります。所がまだ若い主人は何時しか私に對して變な素ぶりを示すやうになり、とう〳〵その人のために處女を奪はれて了ひました。私ほ奥さんに申し譯がないからと拒みましたが力及びませんでした。私は親兄弟もない一人ぼつちですから行末の面倒を見て下さる人は主人夫婦より外にないのです。主人はお前の事は全部引受けてやると云つて下さいますが有難くもあり又憎らしくも思ひ、日夜惱んで居ります。處女を破られた私はその事を打明けて結婚しなければならないでせうか。（淺草、美子）

答――いつも申しますやうに、主人と傭人との間にはエディポス・コムプレクスが存しますので、とにかく間違ひを起し易く困ります。事が出來て了つてから相談を受けても分析者は何とも致し方がありません。他の方の御參考までに、貴女の心理を少し分折して見ませう。併しこれだけの御文面で分析をすることは殆と不可能ですが、たゞ貴女が主人の無體な要求に對して「奥さんに申譯がないからと拒みましたが」と云つてゐられるところはをかしいと思ひます。奥さんの事を考へるより前に何故に、御自分の事と主人の事とをお考へにならなかつたのでせう。いや貴女は實際はこの二つを先にお考へになつたのでせう。併し、この相談を出すに際して、拒絶の理由に奥さんを持出したまでなのでせう。それが一番忠實らしく聞えて、人聞きがよいからです。併し奥さんに申譯がないとお考へになつたことにウソがあると云ふわけではありません。申譯がないと承知して、やはり奥さんのものを奪つてやらうと云ふお心持ちも反面に存してゐたと云ふことを、貴女は御自分の無意識を正直に反省なさるならば、承認せられるでせう。奥さんと競爭して主人を誘惑してやらうと云ふ無意識の强烈な意圖が少しでもなかつたら、これほど困難な結果に陷るやうなことを仕出來すわけはありません。貴女は主人の力に及ばなかつたと云つてゐられますが、それは致方あるまいと思はれます。主人がもし難攻不落である場合には、主婦の比較的可愛がらない子供（主人の家に子供が二三人ゐるとすれば）を反抗的に可愛がると云つたやうな形で、このエデポス・コムプレクスを示す女中さんも時々ゐる事を分析者は知つてゐます。

貴女の御相談の目的は、處女を失つたことを打明けて結婚すべきか否かと云ふことにあります。仕方がありません。他の人と結婚する以上は、やはりそれを正直に云ふより外はありますまいと（冷酷な云ひ分のやうですけれども）思ひます。誰と如何にしてと云ふことまでは云はないで我慢して貰ふにしても。

併しその責任の大半は、やはり主人にあるのですから、主人に何とかして貰つたらよからうと思ひます。我々としては早く世の人々が分析を學んでこのやうな間違ひを少くして貰ひたいと思ふのみです。（記者）

編輯後記

先月は突然休刊しまして熱心な愛讀者諸君から六月號の註文が殺到して、誠に相濟まぬ思ひをさせられました。巻頭に斷つておきました通り、今後隔月刊制をとらせて貰ひます。編輯委員に少し餘裕が出來たらまた月刊制に復するかも知れません。實際、書きたいこと、研究發表したいこと、紹介したいことは山ほどあつて、困るほどだが、雜用の多端に苦められて隔月刊にせねばならぬことは、御互に遺憾千萬ですが、こゝ暫く已むを得ません。御寛恕を乞ふ。

×

例により新執筆者を御紹介いたします

生形要氏は東京の人、昭和五年三月慶應義塾大學經濟學部卒業。同年四月、時事新聞社入社、同社の景氣研究所に勤務、昨年末退社。現在は自宅で文獻や統計の調査作成をなしつゝある。著作としては『ショウを語る』、『戰爭批判』、『イギリス宗敎史』、『インフレーションはどうなる』など。

梅木米吉氏は山形縣鶴岡市にて雜誌『時代』を經營しつゝある人。

高橋鐵氏は日本大學心理學科卒業、性格學、廣告心理學などに興味を持ち、また日活の文藝部にも關係を持つ才人。氏は既に四月號にも執筆してゐられる。

石井佐太郎氏は醫學士で今回で既に本誌には三度目の執筆である。新人が簇々と現れて、本誌上を賑はして下さることは喜ばしい次第である。

×

坪田氏の作品の女主人公「雪子が祈る心理は、彼女がキリスト舊敎信者で、弱い性格――と云つても、クリスチヤンやインテリの持つ弱さのため、危急の場合祈る以外に道を知らず、それが勞働者の獸的な腕力の前には何の效果もなく、一ひしぎにされてしまう事を書かうとしたもので、そのため彼女が美しい心、美しい姿を持ちながら工場の勞働者のために餌食にされることを嘆ずる」ものだと作者は云はれる。小説に説明を附けることは作者に對する禮儀でないかも知れないが、本誌は學術雜誌であるから、そこを作者に我慢して貰つて讀者のために、こゝに作者の意圖を洩して貰つた。なほ作者の救助願望を作品の裏に認識することは分析者の自由であらう。

×

岩倉氏のマンスフィールド研究は愈々進展して行く。近く研究の結果を纏めて單行本にせられる計畫中である。發行所は多分本研究所出版部。大槻氏の『戀愛に於ける救助願望の研究』もその後の研究を加へ、増補して近く單行本とせらるゝ計畫の由。長崎文治氏の『血に關する心理の研究』も同樣。

×

五月以降、誌代前納の方々は左の通り受取代りにこゝに芳名を記す。高村光太郎、小柳津邦太、田中雅子、高崎能樹、福岡光、淸水桃子、小林忠藏、島崎勝次郎、森永醇、梅木米吉、尾形孝次郎、中野正一、山本鎭雄の諸氏。

合本

「精神分析」第二卷・上（本年一月號から四月號まで）出來!!

總布裝美本

定價二圓五十錢
送料ナシ

品切中のところ、第一卷・上及び下も追加製本出來！

研究所事業案内

一、分析部

●神經症治療　ヒステリー、強迫症、恐怖症、妄想症、その他）

●性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

●客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし。

二、教育部

●當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

●所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

三、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會

毎月一回開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を別に申受く。）

五、講習會

毎月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

昭和九年六月二十五日印刷
昭和九年七月一日發行　第二卷第六號
（隔月刊）定價五十錢（郵稅二錢）

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市牛込區改代町廿四　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵稅二錢）
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。

●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。

●郵券代用の場合は一割增に願ひます。

●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂　大東館・北隆館

次號內容豫告

性慾心理研究號

戀愛心理を研究した我々は、當然、性心理を研究せねばなりません。この方面はまた精神分析學の最も得意とする方面であると共に、最も重大な問題を含んでゐる領域であります。計畫の大要は次の如くであります。

性慾新考……………………諸岡存
性慾と優越慾………………長谷川誠也
性教育に於ける兩親の失敗……大槻憲二
フェレンチーの性慾心理論……高水力太郎
ハヴロック・エリスに就いて……高橋鐵
對象愛の心理機制…………岩倉具榮
マリーのマンスフィールド論……同氏
性慾心理文獻表……………記者

藝術殿

坪内逍遙博士會號執筆

七月號（第四卷第七號）

要目

年極讀者募集　本誌は舞臺藝術の研究を中心とし、併せて一般文化の向上に裨補せんことを目的とする高級文藝雜誌であります。一ヶ年分誌代を金五圓（特別號、送料共）とし、國劇向上會主催の種々の演藝會、講演會等に對しても種々の便宜を圖ります。詳細は早稻田大學演劇博物館内『藝術殿』編輯部へお聞き合せ下さい。

一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯　財團法人國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京二〇二九〇番）

發行　梓書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替（東京七八六四四番）

早大教授 本間久雄著　小林古徑畫伯裝幀・限定版・番號入

英國近世 唯美主義の研究

四六倍判・四八〇頁・本文上質刷・別刷圖版三十八葉・定價七圓五拾錢・送料卅二錢

著者、十九世紀後半英文學の興味ある一異色、唯美主義運動の研究に沒頭する事多年。本書はその集大成で、ロセッティ、モリス、ホイッスラア、ペイタア、ワイルド等の協力的藝術運動の全貌と並びにその文化史的意義とは本書に依つて始めて明かである。

本書の三大特色

(一) 著者滞英中、親しく蒐集した諸文献、取り分け、唯美主義研究の權威メエソン氏四十年に亘る努力の結晶たる所謂メエッソン文庫に依つて、この運動の文献的根據を明かにしたこと。

(二) 現に大英博物館の保管にかゝり誰人にもその閲讀を禁ぜられてゐるワイルドの所謂禁止本『獄中記』をワイルド遺族の許諾を得て滞英中著者自ら手寫し、この唯一無二の文献に依つて、唯美主義の代表たるワイルドの生活と思想とを再検討してワイルド研究に一新紀元を劃したこと。

(三) 唯美主義に及ぼした日本藝術の影響を一々明快に指摘して未だ誰人も云はなかつた前人未踏の研究を完成したこと。

本書裝幀について

○裝幀は、日本畫壇の第一人者小林古徑畫伯が、特に本書のために、唯美主義の三象徴に象どり、表紙には金泥の孔雀、前見返しには白百合、後見返しには向日葵、を揮毫せられたるもの。絢爛にして上品、淸楚にして高雅、實に裝幀界空前の美本である。昭和出版界の王座を占める豪華版として敢て愛書家各位の座右に薦む。

○本書は五百部限定版にて賣品は僅かに四百八十部。全部番號入。絶對に再版不可能につき賣切れぬ中お求めを乞ふ。

東京麴町九段下　東京堂　振替東京二七〇番

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和九年六月廿五日印刷納本
昭和九年七月一日發行
隔月一回一日發行
精神分析 七・八月號

II. Jahrgang, Heft 6, Juli, 1934. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Liebespsychologie)

Inhalt

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalytischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Nippon.

定價金五十錢 郵税二錢